

平成27年度

大分大学
高等教育開発センター報告書

目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センター事業概要	2
II 各部門活動・事業報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	5
2. メディア・IT活用部門	11
3. FD・授業評価部門	17
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門 (文部科学省委託「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」報告を含む)	51
IV 付録	
1. センター関係諸規則(投稿規程を含む)	103
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	109

はじめに

大分大学高等教育開発センター長
山下 茂

いつもセンターの活動にご支援、ご協力いただきありがとうございます。高等教育開発センター平成27年度の報告書で、第二期中期計画における最終年度の活動報告をお届けします。

今年度は、大分大学において大きな転換点の年でありました。ようやく教養教育に関する改革を実施していくことがきまり、その準備に追われる1年でありました。また、学部改変、新学部設置等の制度改革、地域貢献の取り組み等が精力的に進められました。

センターの活動は、高等教育系と生涯教育系の大きく2つの柱で運用されています。26年度は、高等教育系では教養教育の改革に関与する活動が大きなウェイトを占めました。現在大学に求められている学士課程教育の質の保証に関しては、4(6)年間の学修成果を把握するシステムの構築が急務として、全学の検討組織「学修システム部会」では中心となって活動を行いました。また教養教育の改革については「教養教育改革WG」から「教育改革WG」に発展した取り組みにも参加し、センターのこれまでの活動に基づき関与しました。

一方、生涯教育系は、学外との地域連携をセンターが主体となって取り組んだ文部科学省特別経費プロジェクト事業で、一昨年まで参加してきた「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の実績を受け継いでいく取り組みに強く関わってきました。先と同じく文科省の地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革で、地域との一層の共同作業が求められる「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に中心的に取り組まれました。このほか、社会教育に関する活動としても、文科省の「学びによる地域活性化プログラム普及・啓発事業」に採択され、「地域協育コンファレンスINおおいた」をはじめ精力的な活動を進めてきました。このように、全学的な取り組みの事業における地域との連携をはじめ、社会教育に関わる多くの活動が着実に成果を積み上げてきています。

学部等の改組、新学部設置、そしてCOC+事業等の本学の教育改革が実施されていく際に、教育内容、教育方法などの見直し、点検、改革が、組織検討と同時に重要な事項であります。これらを検討する体制の中で、全学組織である高等教育開発センターは大きな役割を担っており、この役目を十分に果たしてきていると自負できていると思っています。しかし、この頃の教育改革における対応に際して、現在の高等教育開発センターの組織的な位置づけやあり方に手を入れていかないと、センターとしての有効な働き方が達成できないと感じています。これらの検討は次年度以降にぜひ検討して欲しいと思います。

このような状況下での本センターの事業活動を、センター内各部門の今年度における報告としてとりまとめしています。本センター事業の取組みの円滑な推進は、学内教職員のご協力とご支援、ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり、この場を借りて感謝を申し上げますとともに、今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いです。なお、今年度の発行が大変遅れましたことをお詫びいたします。

平成28年3月

I 高等教育開発センター事業概要

高等教育開発センターは、「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されています。その目的を達成するための平成27年度の成果について、部門ごとに列挙すると以下のようになる。

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・高等教育協議会が設置している「とよのまなび」コンソーシアムへの支援と参加
- ・教養教育における初年次教育科目の実施の支援
- ・きっちよむフォーラム2015「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

2. メディア・IT活用部門

- ・グローバルキャンパスの運営
- ・遠隔授業の実施支援
- ・大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ・WebClassの活用支援と普及
- ・eポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ・教育支援機器の貸し出し・活用支援
- ・「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の支援

3. FD・授業評価部門

- ・WebClass利用への支援
- ・学内合同研修会「きっちよむフォーラム2015」の実施
- ・大学院学部合同FD講演会、学習会の実施
- ・学生のメンタルヘルス講演会を保健管理センターと共催
- ・eラーニング活用セミナーの開催
- ・学生による授業評価アンケートの実施

4. 大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・社会教育関係職員等に対する研修（自治体等との連携による）
- ・大学開放に関する調査・研究の実施

5. 生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体への支援及び自治体や諸団体との共同・連携事業の実施
- ・地域指導者育成のための社会人や学生の学習の場の提供
- ・教育の協働に関するネットワークの取り組み
- ・地域社会システムに関する調査研究

6. 平成27年度高等教育開発センター運営委員会

第1回

日 時：平成27年6月29日（月）9：00～10：05

場 所：且野原キャンパス 教養教育棟 会議室2

議 題

1. 平成26年度各部門活動報告及び平成27年度活動計画について
2. 平成26年度決算報告及び平成27年度予算案について
3. 平成27年度計画・アクションプランへの対応について
4. 教員人事について

第2回（メール審議）

審議期間：平成27年9月2日（水）～9月4日（金）

議 題

1. 規程の改正について

報 告

1. 高等教育開発センターの教員人事について
2. 公開講座について

第3回

日 時：平成27年11月10日（火） 10：40～11：15

場 所：且野原キャンパス 教養教育棟 会議室2

挟間キャンパス 第3会議室 【遠隔会議システムを利用】

議 題

1. 高等教育開発センター教員の予備審査に関する申合せの改正について
2. 教員人事について
3. 平成22～26年度業務実績報告書について
4. 平成27年度後期公開授業について

報 告

1. 認証評価の「訪問調査時の確認事項」に対する回答について
2. 公開講座について
3. 地域協育コンファレンス in おおいたについて

第4回（メール審議）

審議期間：平成27年11月20日（金）～11月25日（水）

議 題

1. 公開授業について

第5回

日 時：平成28年3月10日（木） 14：50～15：55

場 所：且野原キャンパス 教養教育棟 会議室2

挟間キャンパス 第2会議室 【遠隔会議システムを利用】

議 題

1. 平成22～26年度及び平成27年度業務実績報告書について
- 報 告
1. 平成28年度計画アクションプランについて
 2. 教員公募について
 3. 平成28年度以降の高等教育開発センターの体制について

Ⅱ 各部門活動・事業報告

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

本部門は全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する部門であり、以下の事業を行った。

【平成27年度の主な取り組み】

- ①全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」における教育プログラム
- ②高等教育協議会が設置している「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加
- ③教養教育における初年次教育科目の実施
- ④センター教員の教養科目等の担当
- ⑤きつちよむフォーラム2015「学生教職員合同研修会」

【平成27年度の事業内容】

（1）全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

全学教育機構運営会議では、教養科目の検討など本学の学務事項の審議を行っており、センターから2名（センター長、次長）が参加している。特に教養科目カリキュラムについての検討組織である全学教育機構主題科目専門部会にはセンター長、次長、専任教員1名の3名が入っており、各年度の教養教育科目の検討作業を行っている。

昨年度、教務部門会議の審議の結果、全学共通科目では主題の統合を行い、「主題1. 導入・転換」、「主題2. 福祉・地域」、「主題3. 文化・国際」、「主題4. 社会・経済」、「主題5. 自然・科学」の5つに組みなおすことにした。この中で、大きな特色として「福祉・地域」の主題については選択必修としての縛りを付けることにしている。この改革の方針案が教授会に諮られ、今年度は平成28年度からの運用に向けた準備を行った。この検討の中では、アクティブラーニングの整備に向けた議論も行われ、これにはセンターも大きな関わりを持って議論に臨んだ。

今年度もう一つ大きな本学の教養教育に大きな影響を与えた取り組みとして、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」いわゆる「COC+」の採択がなされ、組織的な対応を行うためにCOC+推進機構を設置し、「大分豊じょう化教育プログラム」の検討から、教養教育の体制を再整備することになった。この取り組みにおいては、地域社会とのつながりを教育課程に組み込んだカリキュラムが求められるため、高等教育開発センターの生涯学習部門教員が中心のメンバーとなって取り組み、他の部門の教員も専門的な立場から精力的な作業を行い、実施にこぎ着けることができた。この検討において、社会での就業力の基礎となるカリキュラム作りをめざし、5つの主題の中から、社会人力、企業理解、地域理解を柱にした「大分を創る人材を育成す

る」科目群を「基盤教養科目」として位置づけ、また大分の地元企業、自治体と共同する授業づくりを行い、フィールドワーク等を中心とした「高度化教養科目」群を新たに配置し、地域に貢献できる人材養成に対応するカリキュラム作りに貢献した。

この実施が今年度から一部先行して試行されたことから授業の到達目標や、授業方法に能動的学習をシラバスに記載する対応が必要となった。これまでも検討は行っているが「シラバス改革」が早急に求められる。また、教務部門会議で、もう一つ今年度最も大きな取り組みとなったのは、各学部（学士課程）における授業科目にナンバリングを行う作業であった。今後これらの制度がカリキュラムマップ等に整備されていくことが重要であり、来年度設置される新学部においては、設置の準備の中で教育科目の編成においてすでに作成されている。

これらの運用が順調に機能するためには、教育質保証の裏付けとなる「シラバスの改革」、学修成果の見える化である「学修評価システム」の整備が必要である。このための準備が進められているが、第3期の教育体制では整備された環境で運用されていく必要がある。

（2）高等教育協議会「とよのまなびコンソーシアムおおいた」への支援と参加

大分県における「地域連携研究、国際教育・留学生支援、教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」事業として高等教育協議会が設置されており、その1つとして「とよのまなびコンソーシアム」による教育連携として共同授業を実施している。現在、講義に相当する部分はすべてeラーニング（VODによる学習）で行い、2回分（2コマ分）を対面授業でのグループ学習によって、大分大学において実施している。

この講義のビデオコンテンツは対面授業で収録されたビデオを基に、コンソーシアムの共同授業分科会で選択し運用している。この授業を構成するビデオコンテンツは、今後毎年各大学においていくつか製作していくことが申し合わされている。今年度も「共通教育事業におけるeラーニング教材の作成と取り扱いに関わるガイドライン2016年度版」に基づくコンテンツの作成についての一部の修正を行った。「利用条件」で、コンテンツの利用が単年度更新制としていたところを2年度更新制とし、「ガイドラインの確認・更新」では2年更新制でもガイドラインの確認・見直しは単年度ごとに行い、「その他」でコンテンツをeラーニング教材と明記した。

これらのビデオコンテンツにおいては、コンソーシアムが共有する教材として、この共同授業のほか、各大学における授業の中の教材としての利用も可能としている。しかし、その際の授業の運用については、各大学の責任において対応が必要となる。この授業目的も、COC+での取り組みとも関連し、コンテンツのアップデートが急務の1つであろう。

なお、この共同授業の単位互換制度は、これまでの実施体制の見直しを行い、加盟大学間での単位互換が可能ないように制度の改正を一昨年度行った。これもCOC+との間の位置づけには、「とよのまなび」連携大学間で当面区別して運用することとした。

なお、運営会議で「大分の人と学問」の受講者数については、1校20名以内としていたが、受講者数が100名以内であれば、上限に関係なく柔軟に運用していくことを確認した。

授業実施曜日 後期

講義科目：「大分の人と学問」

受講形態：VODによるeラーニング（13回分）と半日（2コマ分）大分大学の図書館にあるラーニングcommonsに集合しての学習活動（2回分）である。

授業の具体的な到達目標：

- ①講義内容の要約および感想・意見の記述を通して、大分の特色や課題などを他者に説明できる。
- ②講義内容を受け、派生的な課題を自ら見つけ、1200字程度の文章として論述することができる。

評価：講義ごとのミニレポート(300字)と学期全体を通して1回の課題レポート(1200字)のオンラインによる提出。これらを総合的に評価する。

平成27年度の「大分の人と学問」講義スケジュールは下記の通りに行われた。

講義ビデオの配信日	担当者	所属	講義タイトル
10月7日	島田達生	放送大学大分学習センター	今よみがえる田原淳の業績。ノーベル賞を超える大偉業
10月14日	井上正文	大分大学	竹の研究
10月21日	望月 聡	大分大学	『関あじ・関さば』を科学する
10月28日	豊田寛三	別府大学	永山城と永山布政所の歴史
11月4日	石川雄一	大分大学	おおいた過疎地域を元気にする産学連携－柚子の抗アレルギー能について－
11月11日	芝原雅彦	大分大学	大分の水と温泉
11月14日	牧野治敏	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 旦野原キャンパス)
11月14日	牧野治敏	大分大学	対面授業： グループワーク (会場：大分大学 旦野原キャンパス)
11月18日	牧野伸義	大分工業高等専門学校	江戸の天文学と麻田剛立
11月25日	島岡成治	日本文理大学	大分近世城下町の成立とその後 ～大分のまちの起源を探る～
12月2日	小川伊作	大分県立芸術文化短期大学	大分の音楽 ふるさと大分に貢献した音楽家たち ～過去・現在そして未来～
12月9日	廣田篤彦	日本文理大学	都市のイメージと嗜好性 ～外から見た大分とは～

12月16日	横山研治	立命館アジア 太平洋大学	iichikoの顧客価値創造 ー過去・現在・未来ー
12月23日	鳥井裕美子	大分大学	江戸時代の大分の医術
1月6日	溝部 仁	別府溝部学園 短期大学	大分県の中の朝鮮半島

今年度の履修状況については、下記の表に示してある。全体的に参加者が少ない傾向にある。今年度の開講では、大分県立芸術文化短期大学、別府大学、別府大学短期大学部、大分工業高等専門学校、放送大学学習センターからの受講者は0名であった。

	大分大学	日本文理大学	立命館アジア 太平洋大学	別府溝部学園 短期大学
登録者数	19名	1名	15名	DVD貸出 (40名)
単位取得者数	14名	0名	7名	ー
修了率	74%	0%	47%	ー

合計 登録者数：75名

なお、対面授業において、今年度は別府溝部学園短期大学からの学生参加も実施した。学生が他大学の交流しながら学習する機会はほとんどない中、今回もこの授業においては好評であった。

もうひとつコンソーシアムの事業である生涯学習支援としての連携講座部門については、大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門の報告を参照されたい。

(3) 教養教育における初年次教育に向けた新科目の検討と準備

教養教育の大きな目的となっていることとして、各自のキャリアを意識し、学修する動機や人間の成長、社会人を育ててもらふことがある。そのため大学生になった初年次で学ぶ科目として、平成25年度よりオムニバス形式で、大学生としての学生生活への心構え、学業についての動機づけを目的に、初年次教育科目「分大キャンパスライフ入門」が開設されている。

この授業の運用については、今年度より全学教育機構主題科目専門部会が行い、各学部の担当者として講師の設定、評価を行っている。本センターは、下記の2テーマ（3回）を担当した。

平成27年度 前期水曜3限 「分大キャンパスライフ入門」実績

第11回	7月1日（水）	「大学におけるキャリア形成には」 中川忠宣（大分大学高等教育開発センター教授）
第14回	7月22日（水）	ワークショップ「授業の振り返り」
第15回	7月24日（金）	ワークショップ「授業の振り返り」

ワークショップでは、約200名の受講生が3つの教室に分かれ、講義内容の振り返りを目的に、4人1組になってグループ学習での方法を取り入れ、授業内容を語れる力、企画力、表現力、発言力、チーム参加力等を学習する授業企画を立て、実施した。学生からの反応は、好評であった。

(4) センター教員の教養科目等の担当

センター教員の専門性を生かした科目を開設している。今年度も教養科目全体の必要開設数を補う形で、これまでの専任教員が実施してきた科目、前期8科目、後期6科目を全学共通科目として継続して実施できた。センターの役割として、全学で取り組んでいるプロジェクトに応じた多様な教育方法を取入れた授業となっている。

【前期】

- ・プロジェクト型学習入門Ⅰ
- ・「中小企業の魅力大発見」(集中)
- ・生涯学習論入門
- ・学習ボランティア入門
- ・社会教育からみた「教育の協働」
- ・生命観の変遷
- ・自然体験活動の理論と実践
- ・分大キャンパスライフ入門(オムニバスの一部)

【後期】

- ・キャリアデザイン入門
- ・プロジェクト型学習入門
- ・成人教育方法入門
- ・大学開放論
- ・カラダの見方・考え方
- ・大分の人と学問(とよのまなびコンソーシアムおおいた共同授業)

(5) きつちよむフォーラム2015「学生教職員合同研修会」

このフォーラムは、大分大学の教育改善のための学生と教職員による合同研修会として開催している。FD・授業評価部門の事業であるが、授業やカリキュラムの検討の場でもあり、本部門も関連している。しかし、今回は、学生生活におけるテーマとして「カルトの被害に遭わないために」を考える場として開催しており、ここでは日程等だけを示しておく。

日付：平成27年12月2日(水) 14:30~16:20

場所： 且野原キャンパス 第2大講義室
 挟間キャンパス 第2会議室(遠隔配信)

テーマ： 「安全・安心で充実した学生生活のために」～カルトの被害に遭わないために～
詳しい報告は、FD・授業評価部門に掲載している。

(6) センター業務に関わる研修参加実績（協議会，学会，研究会等への参加）

本年度における本部門関係者の出張，研修は，

- ・「日本高等教育学会第18回大会」（2015/5/27～28早稲田大学，東京）
- ・「大学教育学会」（2015/6/6～7長崎大学，長崎）
- ・「全国大学教育研究センター等協議会」（2015/8/26～27筑波大学文京校舎，東京）
- ・「九州地区一般教育研究協議会」（2015/9/11～12熊本学園大学，熊本）
- ・「大学教育学会 課題研究会」（2015/11/28～29岩手大学，岩手）
- ・「大学教育研究フォーラム」（2016/3/17～18京都大学高等教育開発推進センター，京都）

などに出席した。今年度も質保証，評価，ラーニングアウトカム，ポートフォリオ，そしてアクティブラーニング等の話題についての多くの調査や情報収集ができており，教養教育の改革，COC+教育プログラムなどの議論で役に立った。

<近年の動向>

近年話題の1つとして大きくクローズアップされてきているといえる“AHELLO”，そしてこの具体的行動として“チューニング”が挙げられる。いくつかの先進的な大学では，工学教育でのグローバル対応として取り組みが始まってきている。COC+での足元としての地域に視点を置いた教育対応と連動していくものとして，重要であると感じている。この点を補足として記載しておく。

2. メディア・IT活用部門

メディア・IT活用部門では「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図るとともに、自由な学習機会の充実を進める」という中期計画のもと、情報通信技術(ICT: Information and Communication Technology)を活用した教育活動の推進を支援している。特にICTを活用した学修環境の整備、ICT活用型授業の支援、授業方法の改善に向けた相談、eラーニング教材の開発、学習メンタリングを通して、本学における教育課題の解決を目指している。

【平成27年度の主な取り組み】

- ①グローバルキャンパスの運営
- ②遠隔授業の実施支援
- ③大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ④WebClassの活用支援と普及
- ⑤eポートフォリオ・コンテナの活用支援と普及
- ⑥教育支援機器の貸出・活用支援
- ⑦「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+：Center of Community Plus）」の支援

【平成27年度の主な事業内容】

（1）授業支援のビデオ撮影

上記取り組みの①及び③に関して、以下のように授業収録とオンデマンド配信、またはDVD化を行った。

講義名	担当教員	授業収録日
分大キャンパスライフ入門	古城和敬(理事教育担当)	4/8, 4/15, 7/1
生命観の変遷	牧野治敏(高等教育開発センター)	4/20, 4/27, 5/25, 6/1 6/8, 6/15, 6/22, 6/29
地球環境とエネルギー	山田英巳(工学部) 岩本光生(工学部)	4/14, 4/21, 4/28, 4/30 5/12, 5/19, 5/26, 6/2 6/9, 6/16, 6/23, 6/30 7/7, 7/14, 7/21
おおいた学		6/21
中小企業の魅力の発見と発信	中川忠宣(高等教育開発センター) 岡田正彦(高等教育開発センター)	9/8, 9/11
日本語5(中間考査)	武原美穂(国際教育研究センター)	6/1, 6/2
日本語5(期末考査)	武原美穂(国際教育研究センター)	7/27, 7/28

(2) 教養教育科目「大分の人と学問」の授業配信

上記③に関して、連携大学の学生向けに、授業の動画配信システムの運営とレポート提出のためのLMSの運営を行った。また、第7回、第8回の対面授業では、センター教員が授業の企画及び実施を担当した。学術情報拠点且野原図書館1階ラーニングコモンズにおいて、大学間混成のグループをつくり、大分県の観光を課題としたグループワークを行った。

本事業に関する授業配信等の授業スケジュールは以下の表のとおりである。

平成27年度「大分の人と学問」授業スケジュール

回数	日付	担当者	担当者所属	講義タイトル	ミニレポート 提出期間
1	10/07	島田達生	放送大学大分 学習センター	今よみがえる田原淳の業績。ノーベル 賞を超える大偉業	10/07(水)09:00 ～10/20(火)23:59
2	10/14	井上正文	大分大学	竹の研究①	10/14(水)09:00 ～10/27(火)23:59
3	10/21	望月 聡	大分大学	『関あじ・関さば』を科学する	10/21(水)09:00 ～11/03(火)23:59
4	10/28	豊田寛三	別府大学	永山城と永山布政所の歴史	10/28(水)09:00 ～11/10(火)23:59
5	11/04	石川雄一	大分大学	おおいた過疎地域を元気にする産学連 携一軸子の抗アレルギー能について	11/04(水)09:00 ～11/17(火)23:59
6	11/11	芝原雅彦	大分大学	大分の水と温泉	11/11(水)09:00 ～11/24(火)23:59
7	11/14	牧野治敏	大分大学	対面授業：グループワーク 会場：大分大学 且野原キャンパス	
8	11/14	牧野治敏	大分大学	対面授業：グループワーク 会場：大分大学 且野原キャンパス	
9	11/18	牧野伸義	大分工業高等 専門学校	江戸の天文学と麻田剛立	11/18(水)09:00 ～12/01(火)23:59
10	11/25	島岡成治	日本文理大学	大分近世城下町の成立とその後 ～大分のまちの起源を探る～	11/25(水)09:00 ～12/08(火)23:59
11	12/02	小川伊作	大分県立芸術 文化短期大学	大分の音楽 ふるさと大分に貢献した 音楽家たち～過去・現在そして未来～	12/02(水)09:00 ～12/15(火)23:59
12	12/09	廣田篤彦	日本文理大学	都市のイメージと嗜好性～外から見た 大分とは～	12/09(水)09:00 ～12/22(火)23:59
13	12/16	横山研治	立命館アジア 太平洋大学	iichikoの顧客価値創造 ～過去・現在・未来～	12/16(水)09:00 ～01/05(火)23:59
14	12/23	鳥井裕美子	大分大学	江戸時代の大分の医療	12/23(水)09:00 ～01/12(火)23:59
15	01/06	溝部 仁	別府溝部学園 短期大学	大分県の中の朝鮮半島	01/06(水)09:00 ～01/19(火)23:59
-				課題レポート	01/20(水)09:00 ～01/27(水)23:59

(3) 教育支援機器の貸出・活用支援

上記⑥に関して、クリッカー、ノートパソコン、iPad、ビデオカメラ、プロジェクタ等の教育支援機器の貸出を行った。貸出状況は、次の表の通りである。クリッカーは年間で8科目計73の授業で貸出を行った。ノートパソコンは16回延べ172台、iPadは4回延べ62台、ビデオカメラは10回延べ14台の貸出を行った。また、3月には授業支援ボックスの利用に関する研修会を実施した。

クリッカーの貸出を行った科目と回数

	曜日	時限	科目名	使用回数
前期	月	2	生命観の変遷	14
	火	3	生活(小)	1
	水	1	自然体験	2
	水	3	環境と生物	15
	木	3	経済学Ⅲ	14
	金	2	生涯学習論入門	1
後期	水	1	カラダの見方・考え方	12
	金	4	マルチメディア処理	14

ノートパソコンの貸出状況

月	貸し出し先(利用者の部署等)	台数
4月	経済学部	12
6月	図書企画係	15
7月	教育学部	25
	図書企画係	20
9月	医学部看護学科	12
	教育学部	10
	高等教育開発センター	11
	施設企画課	10
10月	医学部看護学科	1
	大分大学学術情報拠点(図書館)	4
	経済学部	1
12月	経済学部	4
	男女共同参画推進室	15
1月	教育学部	17
2月	教育支援課	5
3月	教育支援課	10
		172

i P a d の貸出状況

月	貸出先(利用者の部署等)	台数
5月	その他	14
6月	教育学部	20
9月	教育学部	6
11月	教育学部	22
		62

ビデオカメラの貸出状況

月	貸出先(利用者の部署等)	台数
5月	教育学部	1
6月	国際教育研究センター	1
7月	国際教育研究センター	1
8月	経済学部	1
9月	高等教育開発センター	1
	高等教育開発センター	1
10月	福祉科学研究センター	3
11月	国際教育研究センター	2
1月	COC+推進機構	1
2月	国際教育研究センター	2
		14

プロジェクトの貸出状況

月	貸出先（利用者の部署等）	台数
10月	教育学部	1
12月	教育支援課	1
	教育学部	1
1月	教育学部	1
3月	経済学部	1
		5

(4) 福井県立大学への訪問調査

上記⑦に関連して、「平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」を推進するため、福井県の事例について情報収集を行った。概要は以下のとおりである。

日時：平成27年12月22日（火）10：00～12：30

場所：福井県立大学附属図書館棟2F

応対者：山川修（福井県立大学学術教養センター教授）
田中洋一（仁愛女子短期大学生生活科学学科教授）

訪問者：牧野治敏（大分大学高等教育開発センター教授）
舛田佳弘（日本文理大学経営経済学部経営経済学科准教授）
市田秀樹（日本文理大学工学部特任准教授）
鈴木雄清（大分大学高等教育開発センター准教授）

調査内容：

調査項目は事前に送付した質問事項に従った。回答に先立って山川氏（福井県立大学）より、連携事業の設計にあたって参考とした書籍と授業の成果をまとめた論文が提示された。訪問調査でのやり取りを以下のようにまとめた。

福井県で行っている大学連携リーグ講座は、福井県の大学コンソーシアム（フレックス：福井県学習コミュニティ推進協議会）ではなく、福井県（総務部大学・私学振興課）の主導で実施しているものである。県内大学が持ち回りで主管校となり、フィールドワークを含む連携授業を行っている。今年度実施した2科目のうち、「ふくい総合学」は福井県からの依頼でトップダウン的に、もう一つの「地域課題にデザイン思考で取り組む」はフレックスを中心にボトムアップ形式でつくられた科目である。「ふくい総合学」は今年度で2年目になる。2科目ともに受講学生は20名程度を想定している。当初100名という依頼があったが、暗黙の人数制限として30名を設定している。福井県が主導的に実施しているため、学生を募集するためのポスターの作成、移動のために必要なバス代や会場（AOSSA：福井市地域交流プラザ）費は福井県が負担している。科目開講の日程は、大学間で調整しているが、実習等もあるため難しいのが現実である。授業内容の作り込みに際しては、フレックスのSNS（OpenSNP）が活用された。

「地域課題にデザイン思考で取り組む」の授業を実施するまでの経緯は次のとおりである。まず、担当教員の一人が東京で行われているデザイン思考のマスタークラスに参加し、デザイン思考の基本を学んだ。その学習の知見をもとにフレックスの部会の教員が中心となって、学生を対象に想定しつつ教員を対象にした模擬授業を実施し、授業実現の可能性を検討した。その後、昨年度に8名の学生を対象に単位を出さない形式で試行した。事前学習に加えて、3日間の宿泊ありの日程で実施した。

単位互換については、いくつかの問題がある。福井県内の大学等では、互換科目の開設には教授会を経る必要があり、学生は単位互換科目を受講するためには4ヶ月前に登録する必要がある。加えて、各大学の授業時間のずれもある。授業配信のためのストリーミングシステムもあるが、現状では利用者はいない。電子会議システムも人手がかかる。9月の終わりのオリエンテーションで広報している。非常に手間のかかる授業であり、あまり学生が多すぎても実施が困難になるので、現状は都合がよい。

大学連携リーグ講座科目の大学ごとのカリキュラムでの位置づけは異なっている。福井県立大学の場合は、「地域社会とフィールドワーク」群を新設しそこに割り当てている。仁愛女子短期大学では、この科目がディプロマポリシーから外れているので、カリキュラムマップには入っていない。フィールドワークに必要な基礎力の育成や前提条件を満たすために、科目ごとに事前学習を用意している。

主な対象としているのは、1年生である。入学してモチベーションが高い時に実施するのがよいと感じている。本年度は4名の学生が、「ふくい総合学」、「地域課題にデザイン思考で取組む」の両方を受講した。

関連して仁愛女子短期大学では、デザイン思考のミニワークに加え、ジェネリックスキル養成（PROGテストで効果測定）として、ブレインストーミングやSWOT分析、KJ法を行う導入教育や、グループワークを含む入学前教育などを実施している。授業への参加資格は各大学のルールに従っている。

対象とする地域を選定するにあたり、調整にはマンパワーが不可欠である。「ふくい総合学」では、県と打ち合わせて選定した。「地域課題にデザイン思考で取組む」では、授業とは関係のない活動での知人がいる地域（福井市殿下地区）を選定した。その地域は、関西の大学もフィールドワークを行っている。東と西にそれぞれまちづくりが積極的で核になっておられる方がおり、協力を依頼している。

広報としてFacebookも活用しており、AOSSAでの授業のプレゼン時に県議会議員が参加したこともあった。地元の方も7～8名参加していただき、学生の発表を元にして、地元の方が議論するなどの展開もあった。学生間では自発的にLINEグループができ、授業のない期間も学生間で打ち合わせをしていたようである。メールも同時に送信するフレックスのSNS（OpenSNP）も活用された。地域の方とのコミュニケーションにはSNSが活用され、レポートはMoodle(LMS)に提出された。写真等はMahara（eポートフォリオ）に保存された。

デザイン思考における問題定義までのプロセスはかなり時間をかけた。20回以上のプロセスが実施され、予定の時間を超過した。「地域課題にデザイン思考で取組む」では、主催者から「こんな問題について考えて欲しい」と依頼されたが、フィールドワークで聞き取りの際に地域の方から「そんな問題じゃない」と言われるなど、矛盾する問題提起もなされたが、このことが学生にとっては深い学びになっていた。

成績は、担当者の付けた素点そのまま使用される。過去には認定という時期もあった。個々の学生についてはレポートによる評価を行った。また、授業の前後でのマインドセットの変容を比較して、身についた考え方を評価している。加えて自己評価ワークシートも参照している。今後は、ディープアクティブラーニングの評価として、コンセプトマップによる評価も検討している。

授業担当者によるフレックスの学習チームが中心になって、合宿研修会を実施している。連携

授業の計画・設計，実施などを共同研究とし，そこで得られた知見を学会等で積極的に発表することで，参加教員の研究業績になるようにしている。加えて，授業のパッケージ化を図っている。教学IRの共同実施や，ティーチングポートフォリオワークショップなども協力して開催している。

3. F D ・ 授業評価部門

本部門の主な活動は、本学の教育改善を目的として、研修会を企画・実施するとともに、その成果を測定するための、学生による授業評価アンケートの実施と分析・報告である。これらの事業はいずれも教務部門会議の要請を受けたもので全学の教職員および学生を対象としており、本学の中期計画・中期目標に掲げられたものである。また、個別の教員への授業支援として、授業のコンサルテーション、教員相互による授業参観と授業検討会のために門戸を開いている。さらに、大学教育全般の動向について情報収集も本部門の重要な業務であり、大学教育に関連する学会や研究会へも参加している。

本年度は、これらの事業に加えて、学修ポートフォリオシステムの導入やアクティブラーニング対応の教室改修、地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+事業）についても関与し以下のように事業を行った。

【平成27年度の主な取り組み】

F D ・ 授業評価部門の事業として、全学的な教育改善を目的とした講演会やワークショップ等の開催と授業評価アンケートを実施した。また、前年度に引き続き、全学教育機構教養教育改革部門学修システムワーキンググループへの参加、平成27年度学長戦略経費（機能強化推進枠及び教育改革推進枠）による教室整備事業を支援した。概要は以下のとおりである。

- ①電子黒板の使用説明会（平成27年4月22日、23日）
- ②授業公開F Dワークショップ教養科目「中小企業の魅力の発見と発信」（平成27年9月11日）
- ③F D ・ S D講演会「これからの教員養成に何を求めるのか」（平成27年9月18日）
- ④大分大学教育I TミニEXPO「大学のI C T教育の取り組みと今後の課題」（平成27年9月25日）
- ⑤学生教職員合同研修会「きっちよむフォーラム2015」（平成27年12月2日）
- ⑥学生のメンタルヘルス講演会（平成27年12月16日）
- ⑦F D ・ S D研修会「第30回教育サロニ n大分」（平成27年12月19日）
- ⑧F D ・ S D講演会「変動するこれからの教育～中央教育審議会委員から見た地方大学のこれからの方向性～」（平成28年1月25日）
- ⑨大学院・学部合同F D研修会「アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会」（平成27年3月24日）
- ⑩学修システムワーキンググループのための情報収集（他大学施設の視察）
- ⑪F D ・ S D研修会「地域で学び、地域で活躍する学生を育成するためには」（平成28年3月6日、28日）
- ⑫教養教育棟28号教室 使用説明会（平成28年3月24日）
- ⑬授業支援ボックス利用講習会（平成28年3月29日）
- ⑭学修ポートフォリオ利用講習会（平成28年3月30日）
- ⑮地（知）の拠点大学による地方創生事業への参加

⑯そのほか、全学教育に関わる事業

学長裁量経費「人づくり経費」

全学教育機構教養改革部門学修システムワーキング

特別経費によるアクティブラーニング対応教室への改修

⑰学生による授業評価アンケート調査（平成27年7月，平成28年1月）

（1）講演会・研修会・ワークショップ等

①電子黒板の使用説明会

日 時： 平成27年4月22日（水），4月23日（木） 15：00～16：00

場 所： 教養教育棟35号教室（4月22日）

図書館1階科目別学習支援ブース（4月23日）

概 要： 4月22日 Promethean製ActivBoard 500PRO

4月23日 CHIeru製GoodSAM

平成26年度予算により平成27年3月末に導入した2台の電子黒板についての使用説明会を実施した。

教養教育棟35号教室に設置されたPromethan製ActivBoardは圧力感応型の電子黒板であり，電子黒板用ドライバ，ソフトウェアを教員の個人用PCにインストールして利用できるものである。基本的な使用法，セッティング，電子黒板用のソフトウェアについて，導入業者技術士からの実地による説明が行われた。本機はキャスターを備えており，移動が可能である。

基盤情報センター（旦野原図書館）1階科目等支援ブースに設置されたCHIeru製GoodSAMは赤外線による座標感知型の電子黒板である。電子黒板用ドライバとソフトウェアは，PC1台に限りインストールが可能であるので，本機が設置された図書館所有のPCにインストールし，そのPCを使って業者による説明が行われた。使用する際には，専用PCにパワーポイントなどのデータを移動することが必要である。画像は鮮明であるので，モニターとしての利用価値も大きい。

②WebClass説明会

日 時： 平成27年5月21日（木）第1部13：10～14：40，第2部14：50～16：20

場 所： 情報基盤センター2階演習室（旦野原キャンパス）

概 要：

本年度よりWebClassの機能が強化されたことにより，利用促進の目的も兼ねて利用説明会を実施した。講師はデータパシフィックから派遣された。

【第1部】

WebClass初心者向けに説明会を行った。

【第2部】

今年度より拡張された機能について，の概要説明，とそのデモンストレーションが行われた。

③授業公開FDワークショップ教養科目「中小企業の魅力の発見と発信」

日 時： 平成27年9月11日（金）13：10～16：20

場 所： 教養教育棟28号教室（旦野原キャンパス）

概要：

本授業は、1・2年生を主たる対象として、職業観を養うとともに、ジェネリックスキルを実地の企業研修によって身につけようとするものである。そして、企業研修を終えた後、その活動を基盤として企業を紹介するプロモーションビデオを作成し受講生以外にも広く公開・報告する活動も重要な授業の要素である。今年度は、大分大学におけるアクティブラーニングの推進の観点から、この学生発表の授業を公開授業とした。

④FD・SD講演会 「これからの教員養成に何を求めるのか」 9月18日（金）

日時： 9月18日（金）第1部13：10～14：40 第2部15：00～16：00

場所： 教育福祉科学部第1会議室（巨野原キャンパス）

高等教育開発センター（第2部）

講師： 柳澤好治氏 文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長

概要：

文部科学省より高等教育局大学振興課教員養成企画室室長柳澤好治氏を講師として迎え、これからの教員養成はどうあるべきかを中心的な課題としてFD講演会を開催した（参加者数48名）。

このFD講演会は、新学部設置や学部改組により教員養成の仕組みが大きく変わる本学にとって、今後の方向性を見定めるための指標を得る目的で設定したものである。

講演内容は、文部科学省が今を変革の時ととらえており、教育再生実行会議による教員養成への多くの提言、中央教育審議会答申に書かれたことの意味、全国的な人口統計による学校数・児童生徒数・教員数の推移と文部科学省の教員養成の方針、教職大学院の設置状況等について、豊富な資料とともに解説された。

課題の提言として、質の高い教員養成は私立でも実施されており、国立大学卒のシェアが落ちている現状に危機感を持って取り組んで欲しいこと。国立大学の教員養成は色々な学部を有している特長を活かし、地域の教育課題に明るく、学校の中でコアとなる教員の養成を目指してはどうか等が指摘された。

講師の柳澤氏は大分県教育庁に在職した経歴があり大分県の事情に詳しい立場から、大分大学への期待として、大学が持っている資源をうまくアピールし、特徴を活かした取り組みをして欲しいこと。特に過去の不祥事はそれを乗り越えたことを示すことで非常に力強いメッセージになること等のアドバイスがあった。また、柳澤氏自身を大分県担当の地方創生コンシェルジュとして大いに活用して欲しいなど、今後の大分大学にとって有意義な講演会となった。

参加者

所属	氏名
教育福祉科学部	藤井 康子, 渡邊 祥了, 木本 大清, 衛藤 裕司, 望月 聡, 古城 和敬 山崎 清男, 住田 実, 古賀 精治, 三次 徳二, 柴山 久美子 井上 あゆみ, 伊藤 安浩, 柳井 智彦, 尾石 圭, 永田 誠, 黒川 勲 長谷川 祐介, 谷野 勝敏, 馬場 清, 田中 洋, 島田 和典, 山元 每美 川寄 道広, 大野 貴雄, 清水 慶彦, 松田 聡, 平田 利文, 甘利 弘樹 堀 泰樹, 川田 菜穂子, 永野 昌博
経済学部	石井 まこと
工学部	金澤 誠司, 越智 義道, 鈴木 義弘, 松尾 孝美, 田中 康彦 石川 雄一

その他	高等教育開発センター 岡田 正彦, 牧野 治敏, 中川 忠宣 福祉健康科学部設置準備室 田中 健一郎 学生支援部 佐藤 晃一 福祉健康科学部設置準備室 朝井 政治
-----	--

感想, 意見等

- とても内容の濃い講演会で、勉強になりました。もっと学部の教員が参加されたいと思いましたが、ビデオの記録があれば見られるようにしたら良いのではないかと思います。
- なんとなく大分大学はなくならないうらやまがあると楽観視していたが、データを見てみると本当に教員養成課程が減らされてもおかしくないと感じるようになった。他の大学との差別化ができるよう、自分の大学のよさを知ることが大切である。
- 豊富なデータの比較に基づいた説明がなされ、理解がしやすかった。大分に縁のある方が講師だったので、通常の講演会よりも大分大学に対する率直な意見を伺うことができたように思う。
- 教育再生実行会議、中央教育審議会の答申等の資料から、新しい教員養成学部の今後の方向性「重要なポイント」を明確に学ぶことができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。何を目指していけばいいのかを考えるよい機会になりました。
- 特に後半のキーワードには今後の取り組みで活用できるものが多く含まれ参考になった。実際に取り組みを進めていきたい。
- 今後の教育改革、大学改革を推進していく中で非常に示唆に富む話であり大変よい講演であった。
- 本学の抱える問題について直接的な指摘を受けたことがありがたかった。「エビデンス」について発掘していく意識を強くもった。文科省の幹部から「大分」に関連づけたお話を聞いたのははじめてで、たいへん刺激的な講演会であった。
- データが役立ちました。国立大学における教員養成をどう考えるかの視点を再確認することができた。大学の危機感のなさ、確かに大学教員は動きませんね。共通に質問できる時間があると良かったと思います。はじめの紹介と終わりの挨拶を質問の時間にまわすと良かったと思います。
- 本学部の今後の改善点について、一般論のみならず多様のスライドにより指摘、提言させていただいたことに驚くと共に心から感謝申し上げます。(特にスライドP.34以降)、エビデンスの集積、先を見据えた教育について、大変に参考、勉強になりました。ありがとうございました。繰り返しますが、本学、本学部に即した多くの具体的なご提言をありがとうございました。
- とてもわかりやすい話、ありがとうございました。県教委、学校現場との連携の重要性を改めて感じました。自らの大学をよく知り、他大学との対比の中で独自性を明確にしていく中であたりまえのことですが、私の中で出来ていると思いました。
- 大変申し訳ないのですが、学部のほうは教育実習の期間中なので、時期が悪かったと思います。学部の今後について、胸に響く言葉がいくつもありませんでした。
- 大学教員としての姿勢を考え直す機会となった。
- 今後の教員養成、教職大学院を考える上で、有意義な示唆とヒントが得られた。
- 今後の学部において必要なデータ、方向性を示して頂いたと思います。今日の話にもありましたが、教員養成に関するものはぜひ附属学校園にも参加して欲しいと思います。

- エビデンスを示す内容や方向性が端的に指摘されて参考になった。
- 他学部の者ですが、本学部にも通じるものが多く参考になりました。
- 有益な講演会でした。資料を深く読みたいと思いました。
- 全国的な本年、来年の他大学の様子が理解できて参考になった。
- 国立教員養成大学の危機的状況について、具体的なデータを紹介しつつ、今後の養成のあるべき姿を行政側の意見、提案として分かりやすく述べていた。大分県教委、大分大学を応接してもらえる人財として貴重であると感じた。職員が自分の大学を分かってない、ということは反省すべき点で強烈であった。
- 時宜を得た講演会であった。いろいろと考えさせられた。
- 教員養成の現状と、今後の展望について理解できた。設置審の話が聞けて参考になりました。
- 教員採用数の観点から、あと数年で一層厳しい状況におかれること、など今後の課題について十分に理解できたように思う。その上で、データの集積とその分析が必要だ、ということが分かった。“小さなデータ”もチリつも方式でより良いデータになるのではないか。
- 勉強になりました。文科省と各国立大とのコミュニケーションも今以上に活発にすべきだと思います。ありがとうございました。
- 多くのデータに基づいた話で、教員養成の現状と今後の方向性がよくわかりました。
- 大変ためになる話でした。大分大学独自の強みを今後に探していこうと思いました。
- 工学部に在籍している立場上、教員養成に関する具体的な過大を改めて確認することが大いに参考になった。
- 大変、参考になりました。
- いろいろ情報提供していただき、感謝しています。
- 今後の教員養成の方向性について理解が深まり、大変役に立ちました。“国立教員養成大学に求められるもの”に関しては、問題解決の必要性を強く感じました。
- 「求められるもの」を具体的に説明され、参考になりました。
- 今後、向かうべき方向、重要な考え方、心のもち方が理解できた。
- 国立大学の教員養成の現状と改組等の動向、方向性についてよく理解できました。
- 国、県、社会の動向を踏まえた教員養成学部の方向性がよりわかりました。ありがとうございます。

⑤第1回 大分大学 教育ITミニEXPO

教育改善のためにICT機器を導入することは効果的であり、また、それらの機器を用いずに授業や学生への指導を進めることは難しくなっている。ICT機器の進歩は目覚ましく日々、便利な機器が開発され教育現場にも普及が進められている。その一方で、これらの機器についての情報は東京や大阪等では毎年おおきなイベントが実施されているが、地方都市ではなかなかそれに接する機会に恵まれないという現状がある。そこで、大分大学を会場として、小規模ではあるものの、それらの機器の提示や説明会を実施するとともに、企業はどのような姿勢で開発を進めているのか、今後の展開は、等についての小講演会を実施した。

日 時： 平成27年9月25日（金）11：00～17：30

場 所： 教養教育棟25・26・27・28号教室（旦野原キャンパス）

テーマ： 「大学のICT教育の取り組みと今後の課題」

講演会： 27号教室

- 1) 11:00~11:20 授業参加システムでアクティブラーニングの蓄積が？
パナソニックシステムネットワークス（株）
- 2) 11:30~11:50 LMS(学習マネジメントシステム)の活用でアクティブ・ラーニングに!
日本データパシフィック（株）
- 3) 12:30~12:50 学修ポートフォリオはどのように使われ、何をを目指すのか？
SCSK（株）
- 4) 13:00~13:20 地域との連携を授業でどのように共有する??
ソニービジネスソリューション（株）
- 5) 13:30~13:50 紙ベースでポートフォリオはどうやって??
富士ゼロックス（株）
- 6) 14:00~14:20 講義収録をどのように使って学習支援につなげられるのか？
パナソニックシステムネットワークス（株）

講演会出席者数

学内（所属）		学外（所属）
教育福祉科学部	5名	2名（関西学院大学） 1名（別府大学）
経済学部	2名	
医学部	3名	
工学部	9名	
その他	3名（健康福祉科学部）， 4名（センター等） 7名（事務）	

機器展示 11:00~17:00

25号教室

- ・ソニービジネスソリューション ・チエル ・パナソニックシステムネットワークス
- ・COBU ・NAV

26号教室

- ・SCSK ・日本データパシフィック ・富士ゼロックス ・ナリカ

⑥学生教職員合同研修会「きっちよむフォーラム2015」（平成27年12月2日）

今回は、「安全・安心で充実した学生生活のために～カルトの被害に遭わないために～」をメインテーマとして、本学教職員と立命館アジア太平洋大学職員による報告による学習会として開催した。

日時： 12月2日（水）14:30~16:20

場所： 第2大講義室（旦野原キャンパス）

第2会議室（挾間キャンパス：テレビ会議システムによる配信）

プログラム：

はじめに 14:30~ 大分大学のFD・SDについて—大分大学の教育改革—

望月聡氏（副学長 教育改革担当）

1. 14:50~ 大分大学のカルト対策について

- ・学生支援部門会議による取組の状況（DVD教材視聴を含む）

西野浩明氏（学長補佐 教学担当）

- ・研究集会参加報告その1
本谷るり氏（経済学部学生生活委員長）
- ・研究集会参加報告その2
水野雅美氏（学生支援部学生・キャリア支援課課長）
- ・APUでの実践例
村田陽一氏（立命館アジア太平洋大学事務局次長）

2. 質疑討論

報告の概要：

はじめに、望月聡氏（大分大学副学長：教育改革担当）より、今回のきっちよむフォーラムの主旨説明を含めて、FD、SDの必要性、大分大学が取り組む教育改革の現状と展望、COC+事業への取組にともなうFD、SDの強化、きっちよむフォーラムの経緯、今後の課題について説明があった。特にCOC+事業においては、全教員の4分の3が毎年FD活動に参加しなければならない旨が強調された。

今回のメインテーマであるカルト対策については、西野浩明氏（工学部教授、学長補佐教学担当）により「大分大学のカルト対策 学生支援部門による取組の状況」として、概要の説明があった。日本でカルトが取り上げられるきっかけとなった事件に巻き込まれそうになったご自身の体験談と、DVD視聴も含めて、カルトの実態が説明された。また、大分大学が取り組んでいる様々なカルト対策とともに、学生と教職員への注意が喚起された。

本谷るり氏（経済学部教授、学生生活委員長）からは、全国靈感商法対策弁護士連絡会への参加報告があった。具体的な教団の名称とその団体が関与する事例について要点をまとめた説明であった。

水野雅美氏（学生支援部 学生・キャリア支援課長）より、日本脱カルト協会創立20周年公開講座への参加報告と、本学でのカルト対策について、具体的な取り組みの紹介があった。

最後に、村田陽一氏（立命館アジア太平洋大学事務局次長）より、キャンパス内でのカルトの実際や、その対応策について、実例を踏まえて報告された。

なお、遠隔配信については、工学部技術補佐員から厚い援助をいただいた。

所 属	氏 名
教育福祉科学部	佐藤 晋治, 藤井 康子, 川寄 道広, 三次 徳二
経済学部	西村 善博, 石井 まこと, 本谷 るり
医学部	出川 隆富, 田中 千秋, 木村 美香, 森 茂, 隅田 眞樹子 馬見塚 一美, 中田 健, 田所 朱美, 三宅 秀俊, 園田 英人
工学部	濱本 誠, 小田 和浩
事務局・その他	山口 誠, 弓削 純一, 金澤 誠司, 新家 聡, 釘宮 隆, 河野 桃子 長浜 典子, 岩瀬 みどり, 生駒 もと子, 岩政 亮, 佐藤 智久 中川 忠宣, 今村 正明, 尾石 圭, 藤本 弥生, 佐藤 慶三, 大内 沙紀 姫野 秀樹, 首藤 明美, 中村 浩之, 佐藤 晃一, 宮本 大輔, 池部 実 小林 浩司, 工藤 英治, 守田 岳司, 久保 克智, 安東 敏明 平尾 好生, 佐藤 大祐, 布施 覚弘, 立花 志保, 村上 有紀 工藤 径子, 津々見 智子

学生 56名

参加者の声

- (1) 教職員からの感想, 質問, 意見など

- 音が少し割れていました。DVD面白かったです。他にもギャンブル、DVなど入学時にDVDや体験者の話をうけたかったです。喫煙の害も。
- TV会議で、声が聞き取りにくいので、本学と医学部と設置しているTV会議の調整をしてほしい。早急に対応を。
- カルトの活動ビデオは本学のHPの中にありますか？あるいは、観れらるようになっていませんか？
- 学生を守るための安全配慮義務という点、しっかりと留意します。学生だけでなく教職員ももしかしたら、守らなければならないかもしれませんね。
- 本学のカルト対策の具体的な取り組み、他大学の様々な事例、他国の取り組みが知れて大変参考になりました。ありがとうございました。勉強になりました。
- カルト問題については、これまで認識していたこととあまり違いはなかった。大学でできる対策（すぐにはなければならぬ対策）をしても、良い方向に向かわない事例については、大学の取り組みだけでは限界があると感じた。
- とても勉強になりました。特にキャンパス内で活動を制限する根拠についてです。難しいですが・・・
- 「APUでの実践例」の時間をもう少しとっていただくと良かったと思います。
- カルトの実態を知るのは良かった。
- APU村田さんの実践例は参考になりました。国立と私立の差はあるかもしれないので、同じような具体策は難しいでしょうが、いろいろと検討し、対策を講じていきたいと思います。
- APUの村田次長の報告のような、実態、事実関係の情報をもっと聞きたかった。限られた時間で分かりやすい内容のフォーラムであった。APUの村田様の話は生情報を提示して頂き、ありがとうございました。
- カルトに対する理解が深まりました。自分が考えた状況よりもかなり悪い状況であることが分かりました。新入生に対する対策も行っていると思いますが、その重要性が認識できた。学生の安全確保（インターンシップなどの学外活動などで）に係るテーマももっと取り上げてよいのでは。
- カルトについての知識がなく、どのようなものか少し理解できた。また、各カルト団体より手口が異なって勧誘していることは初めて知った。
- FD・SDの説明は良かった。プレゼン資料は大学内の教員に提供するよう、HP等に掲載してはどうですか。
- 学生の参加も多く、注意喚起の点でよかった。
- 大変良い活動であると思います。
- カルトに関しては、まだ知らないことも多く、このような機会は貴重だと思います。
- テーマの設定が適正であったと感じた。学生を守るという立場での取り組みは重要である。
- 20年以上前、幸福の科学が流行したときのことを思い出しました。学生だけでなく、教員や職員が影響を受けて学生を巻き込むこともあるのだと思いました。
- 医学部では、表面化していない問題ではあるけれども、学生、学生を指導する教職員が他人事だと思わず、常日頃危機感をもって生活しなければならないと感じました。医学部の教職員がこの問題（カルト）に対してどのくらい危機意識を持っているかということを感じます。
- 全ての報告等を聞くことは出来ませんでしたが、有意義なフォーラムだと思いました。

- 最初の部分は聞いてませんでした。すみません。研究集会参加報告その2以降は、分かり易く良かったです。
- 日本中を震撼させたオウムの話や、どうやって宗教から学生を守るのか、その術を最初から最後まで聞いてみたかったです。なかなかこういう内容の講演の話をきくチャンスがないので・・・
- 学外者（APU）の方の報告は真実味があり、有益だったように思う。これからも学外者の方の参加を考慮すべきだと思います。「カルトの言うことは99%は正しい、1%が間違っているその1%に騙される」この言葉が心に刺さりました。
- 教員・学生がもっと参加してほしい。有意義な内容だけに参加数の少なさが残念です。具体的なお話が聞けました。ここまで大変なことであるということを改めて感じました。
- カルトのことやその対策等について、わかったような気がします。認証評価でも高評価であり、COCの考え方にも一致するので、今後ますます充実する必要がある。
- APUのお話など、実際にあったお話が聞いてとても参考になりました。カルトについての現状や対策方法など、とても有益な情報を得ることができました。ありがとうございました。
- FD・SDの必要性を改めて感じました。
- 「カルト」についての基本的知識と様々な事例を知ることができ役に立つフォーラムだと感じた。
- 大変有意義な機会でした。APUの村田様の非常に具体的な事例が参考となった。本学も徹底した対応が必要と感じた。
- カルト集団にもいくつかあることが学習できた。APUの内部での情報共有について、ためになった。
- FD・SDの現状についてわかりやすい説明があってよかった。DVD等を使用しており、とりつきやすかった。カルト問題の現状の報告は参考になった。
- “カルト”言葉は知っていましたが、どういうものをあまり知らず、本日研修会に参加させていただいた。DVDでカルトについて理解することが出来たので良かったと思います。
- それぞれ簡潔で、具体的事例を紹介しながらの説明であったので、学生も理解できたのではないかと。

(2) カルトについて

- 図書館（医学）に、そういうコーナーがあってもよいかと思いました。村上春樹のアンダーグラウンドは医学図書館にあります。森達也さんのAとかも聞いてみてはどうでしょう。
- 授業に出なくなりつつある学生を早めに把握すること、学生と面談すること。
- 大分大学の現況は？
- なかなか具体的な話を聞くことがなかったので、まずはよい機会でした。特にAPUの事例。
- 私の周りにはございませんが、今後注意していきたいと思います。学生のサークル活動には特に注意したいと思います。
- 申し訳ありませんが、見たり聞いたりしたことはありません。会議などで学生生活関係の先生方から聞くのみです。

- 学生支援部門会議で様々な話を聞いている
- 図書館でのカルトの際の対応など
- 前任の大学でも、カルト教団への対応は大きな課題でした。慎重な対応が要求されること、また、学生の保護者が信者である場合もあるので、より慎重な対応が必要です。
- 県外で大学に通っている娘が「カープの〇〇です」と言うので、略語と知らず野球のカープかと思い、ドアをあけたところ、統一教会の人で話を聞かされたとのこと。その後、特にしつこくされてはいないようですが、身近な問題として気になります。暗証番号がないと入れないマンションですが恐ろしいことです。学生に広く注意喚起していくことが重要ですよ。
- カルトは身近でよく聞きますが、気軽に周りの人へ相談できる環境が一番必要ではないかと思いました。ひとりにならない環境づくりが大切だと思います。
- 学生には是非DVDを見てもらった方がよいと思います。今回「カルト」という言葉の認識がなかったのですが、理解できました。
- 講演内容の理解は出来ても、実際は見分けなどが難しいと思います。水際でストップできるとういのですが。
- 今後の指導の参考になりました。学生の参加があったのもよかったです。
- 防ぐことが難しいと感じる。ビデオで副会長が勧誘する人だったら恐ろしいことだと感じる。
- 定期的にパトロールをしているが、カルト勧誘の場面には出くわしていない。
- 琉球大学在任中（留学生課長）、統一教会系の女性団体との関係見直しを行った。こまめに確認し、こまめに対応するしかないと思う。
- 大分でもたくさん活動していると聞いて少し驚きました。カルト対策にはとても根気がいるのだと思いました。
- 以前、学生の中に信者がいて、学内で勧誘等していたことがありました。
- 電話番号を聞かれた学生からの相談を受けたことがあり、身近なことだと思う。カルトかどうかの判断が難しい。
- 他人事のようにしていましたが、カルトはものすごく身近にあることを今回気づかされました。最近では、SNSによる勧誘も増えていることから、いかにカルトを防げるか今後、しっかり向き合って考えていかないといけないなと思いました。
- カルトと見分けることの難しさを強く感じました。

学生より

(1) 感想、質問、意見など

- APUでの実践例がとても生々しく、写真などでおさえたり、名前を公開している対策はとても良いものと思った。APUと大分大学での対策の質に違いがありすぎている。
- 自分はカルト事件に関心があり、カルト対策もくわしい方だと思っていたのですが、自分の知らないカルト団体や対策が今回多くでてきて大変勉強になりました。
- 学生の家庭での学習時間を増やしたいという指針は理解できるが、アルバイトを圧迫して生活費を稼ぐことが困難になることが考えられるので、奨学金を充実させて欲しい。
- カルト団体注意のビラを大学で初めて見たのは、入学してすぐの事でした。当時の自分からすれば、カルト団体などあるのかと信じられませんでした。これまでの学生生活やセミナーを聞いて、現実には身近にある危険なのだと実感しています。

- フォーラムの最後のページのポスターに書いてある、勧誘例を見ると、自分なら疑わずについていくものがあって驚いた。誘われない人で悪い人がでたのは面白かった。一口で“カルト”と言っても、勧誘の手口やマインド・コントロールの方法が多様で複雑化しているように思えた。常に高いアンテナを張って、カルトに取り込まれないように自己防衛の術を身につけていきたい。
- 自分は学内での勧誘を受けたことはないが、大学などでは学内でのカルト勧誘が行われていることを聞き、驚きだけではなく恐怖すら感じた。身近にもカルトがひそんでいることを知ることが出来、様々な団体がそれに対して対策していることを知ることが出来て良かった。
- カルトについて改めて詳しく知る機会となった。大学内また自身のアパート周辺で実際にカルト教団を見たことはないので今回のフォーラムを機に日々の対策をどうするべきか考えながら生活していきたい。
- 大学のFD・SDの取り組みについては、今まで知ることのなかった、大学がどのように講義をくみだて、今後どうしていくか知ることができ、興味深かった。また、カルトについて学べたのは、対策をうてるようになったのでよかった。
- 情報を偽って勧誘しているとのことでしたが、これでは、日頃からカルトに気をつけていても入信してしまう危険性があると感じた。直接の勧誘だけでなく、SNSからの勧誘もあるとはじめて知りました。
- あまり気にするようなことがなかったのですが、実体験等の話が聞けて、これからは気をつけなければと感じることができました。
- “カルト”という言葉について詳しく知らなかったのですが、そのことや、どういう団体などがあるか知れて良かったです。カルトの被害にあわないよう気をつけようと思います。
- 今まで、カルトの人たちは、他の話もしながらも直球にカルトへの勧誘をしてくると思っていたので、区別をつける判断が難しいな、と感じました。名前と電話番号くらいなら・・・って思っていたので、もし勧誘を受けても、はっきりと断れるように、関わらないように気をつけます。
- カルトについてほとんど何も知らなかったので知れて良かったです。
- 気づかぬうちにカルトに入団してしまったりすることが多くあることがわかり、大学入学後などは何も知らずサークル勧誘などによってしまうこともあるため、カルトという存在はとても身近にあるのだと思いました。私自身も気をつけたいと思いました。
- ビデオに出演していた方もおっしゃっていたが、生きる目的や夢中になれるものがなく、探していたり、不安なときは、引きずりこまれる可能性は高くなると感じた。この講義を受けて、普段からできるだけ多くのコミュニティの中で生きていこうと思った。ある“つながり”に偏りすぎないようにしたい。
- 他大学や、他県の事例が多かったため、自分の身近な問題として考えるのが少し難しく感じました。将来、自分だけでなく生徒の身も守らなければならない者として、意識を変えなければならぬと感じました。
- APUの方のお話がとてもリアルで身近にも同じようなことが起こっていると思うと恐ろしいことだと思った。改めてまわりに気をつけなさいといけなさいと思った。
- 身近な話題について取り上げたものだったのですごく分かりやすかったです。初めてきっちりフォーラムに参加しましたが、また興味のある内容の場合は参加したいと思いました。

- カルトに入ってしまうと、大学の授業がおろそかになってしまうなど、人生を狂わせることがよく分かった。少しでもおかしいことがあれば、きっぱり断るようにしたい。
- カルトの恐ろしさを改めて実感した。カルトに入ってしまうと、大学生活もそうだけど、人生までも壊すことになってしまうので、気をつけようと思う。不安なことがあったら、誰かに相談しようと思った。
- 大分大学の公認部活動、公認サークルをしっかりと公表し、年に数回、検査を行う必要があると思う。非公認サークルは発覚次第解散・解体させる事が必要であると思う。大分大学内での被害を具体的に公表してほしい。
- 今回、初めて最近のカルトの被害を聞いた。学生をイベントに来させるなど、言葉巧みに誘い出すのだなあと思い、怖く感じた。
- 学生や教職員と一緒に、学び、情報交換することができる場で良いと思う。
- 今までたくさん話をきいていたけど、実際の事例を聞いてみると改めて怖いなあと思った。
- とても生々しい話をきくことができ改めてカルトのおそろしさがわかったし、今まで知らなかったカルトの情報をたくさん知れて勉強になりました。
- 新入生などまだ生活に慣れていない人たちへの勧誘をしているので、信じやすいんだと思った。不安や、迷いにつけ込んでいくのでやっかいだと思う。
- カルトについてよく知ることができた。新入生等に対して自分たちがアドバイス等できることがあれば行いたいと思う。
- 今回の講義でカルトの危険性や対策の難しさについて改めて認識できたと思う。カルト教団と抗えるにも、その違法性を証明することが大変だと知って、思っていた以上に難しい問題であることが分かった。
- 本当のカルトがどういうものなのか分かった。その団体に加わったときの怖さやその後の人生に大きな影響を与えること。団体がカルトでないと気付くことはとても難しいが、先輩や周囲の人の意見や相談をすることはとても大切だと思う。自分のためにも、人生を壊されないように注意したい。
- この大分大学に入っただけで“カルト”についての講義があったため、今までそのような勧誘にあわなかったのかなと思った。やはり、そういった団体がいるということを知っているだけでも自らで防止することができるだろう。
- カルトは怖いと思うと同時に、悪意のない人が悪いことをさせられることが悲しく思った。自分の身を自分で守る。
- 実際に被害を受けた人の話を聞いてカルトの怖さを思い知りました。私は人を信用しやすいので本当に気をつけなければならないと思いました。自分の中でちゃんとした誠実さをもっていたと思いました。
- 自分の学生生活をよりよい有意義なものにするために、勧誘をうけても断る勇気を持つことが大切だと思いました。
- カルトというのは、意外と身近にひそんでいて、いつ自分が勧誘されるかわからないため、日頃から注意して安易に勧誘に乗らないようにしたい。
- カルトに実際に声をかけられた時にきちんと断れるようにしたいと思った。
- カルトは、自分が意識しないうちに入り込んでしまっているという怖い面があるということを知った。有名なオウム真理教も始まりは、私たちに声をかけているカルト集団とかわりないと

思うと怖いなと思った。

- カルトは本当に怖いなと思った。なにか怪しいことがあったら、すぐ疑うことが大事だと思った。
- カルト団体の恐さを改めて実感することができました。自分の学生生活の周辺にカルト団体がひそんでいると考えると、すごい怖いです。
- 今住んでいるアパートにも宗教団体が来たことがあり、カルトがとても身近な問題だということを知り知らされた。その対応も各先生方が他の体験談とともに話してくださり、とても分かりやすかった。
- カルトのショートムービーがわかりやすく、とても良かった。実際に大学の雰囲気表現されていたので、大学生はとても受け入れやすいと思った。
- 自分が勧誘された場合、騙されないよう、断る勇気を持つことが大切だと思いました。また、自分の友達が入会してしまった場合の対策を考えたことがなかったので、勉強になりました。大学側がカルト対策に力を入れていることは、とても安心できるなと感じました。
- 初めて、カルトがどのようなものなのか理解することができた。カルトに入った人の体験談を聞いて、表面と裏の違いに驚いた。カルトのことを理解しておかないと、本当にだまされると感じた。
- カルトに入り込んでしまうときの細かい心理や様々な精神的被害などを学ぶことができました。周りの人が気付くことが重要だということを理解できました。
- カルトの恐さがわかるビデオが見れてよかったです。カルトと普通のサークルの違いは自らが勧誘されたときには分からないかも知れないと思ったら怖いです。
- カルトは、とてもたくみに誘ってきて自分で判断することができなくなるまで追い詰めてくる恐ろしい団体なので、自分が誘われた時は慎重に判断し、安全な大学生活をおくれるようにしていきたいと思いました。
- カルトは、自分では気づきにくいものだ映像を見て改めて分かった。身の周りにそういうことはあんまりありませんが、一歩ひいて知らない人と話をするときは注意しようと思った。
- カルトの勧誘かもしれないと思ったら、調べることが大切だと思った。
- カルト問題について、大分大学全体で考え対策に取り組んでいくことが今後重要になってくると感じた。カルト勧誘に見えなくても疑いの心を忘れずしておくことが大切だと思う。
- どの先生も話が上手く、興味のもてる内容だった。
- カルトはいいことをしているように見せながら、少しずつマインド・コントロールが行われていくので気づきにくい。抜け出すのは困難をきわめることが分かった。
- 大学が何をしようとしているのか少しわかった気がする。普段、知らないことを聴けてよかった。

(2) 選択肢によるアンケート結果

カルト団体からの勧誘を受けたことがありますか。		
ある	ない	よく分からないが それらしい経験がある
3名 (5.4%)	42名 (75%)	11名 (19.6%)

(3) カルトについて

- 女性が勧誘してくる。パンフレットみたいなものを絶対に置いていく。
- 自分は、学生生活の中でカルトに関わることはなく、周りの友人からもそういう話は聞いたことがなかったが、今回の話を聞いて実際身近に存在することがわかり、今後気をつけるとともに、何かあればすぐ支援課にしようと思った。
- 結構勧誘を受けた事があり、基本はしっかり断れるのですが、一度塾のバイトをしていた時にいわゆる二世の生徒に勧誘された時、大変断るのがむずかしかったおぼえがあります。相手が子どもなので強くでられませんでした。
- 学生、特に新生生にはどの団体・サークルがカルトなのかの判断がつかないので、真剣にサークル活動をしている人たちにはいい迷惑だと思う。
- エホバや幸福の科学が家まで来て雑誌や本を置いていった事があり、インターホン越しでの勧誘も受けたが断った。
- 過去に勧誘されたりしたことはない。ただ、アパートにカルト系団体（幸福の科学 他）の印刷物が時々入れられたりすることがあった。また、学外では、出身地の成人式の終わりに同団体が本を配っている所を見たことがあった。
- 1度、家にアンケートをしているという男性が来た。アンケートに答えたら、聖書を渡してきたが、受けとらなかった。
- 綺麗なお姉さん二人組でしたので、油断していました。
- 大学前駅付近でのパンフレット配布が、毎年春頃行われているのを見たことがあります。
- 宗教の勧誘が家に来たことがあるが、話をさえぎることができず、相手が話し終えるまで話を聞いてしまった。一方的に話されるとなかなか断ることができない。
- 自分とは関係ないという気持ちが今まで強かったけど、全く他人ごとではないと思いました。被害にあわないように自分の身は自分で守っていきたいです。
- 直接はないのですが、フレンドシップに行ったときカルトらしきものに誘われていた友だちがいました。
- カルトに入るというのではなく、気付いたら入っているという状況になるので、そこがカルトの怖さであると思った。フレンドシップ作業という活動中、ある男の人にカルトとはわからない広告が配られた。
- 不必要な人との関わりは断った方が良いと感じた。自分の生活は自分で豊かにしないと、つけこまれるなと思った。自分の今のメインは“大学”である事を忘れないようにしたい。
- カルトらしき人たちが家に訪ねてきたことがある。
- 自分でしっかりと断ることが必要だと感じた。サークルやセミナーやボランティア活動など、色々な手口があると分かった。でも、自分でカルトと判断するのは難しいかも・・・
- 「カルトに入信したのではない、気づいたらそこがカルトだった」という言葉が印象的だった。ヨガやスピリチュアル、神を語って上手く正体を隠しているため、自分で気付くことは難しいと感じた。
- すばらしい団体でも疑う心が大切であると思いました。高校生のときにも知っておきたい内容だと思いました。
- カルトに入って人生が台無しになるなんてとても怖いなと思った。このようなことにならないようにするためにも、心がけて生活していこうと思いました。

- 公園のベンチに座っている際に、一人のおばあちゃんにその聖書をよんで下さいと言われた。
(若草公園)
- 最近ポストの中に、宗教関連のような新聞に電話番号が書かれたものが投函されていました。
これはカルトに関係するものなのかは分かりませんが、気味が悪いと思いました。
- 表向きは優しそう。(逆に怪しい部分も感じた)
- 分大でも、カルトがあり、自分自身も被害にあわないだろうと思っていたが、知り合いが、カルトらしい所に声をかけられたときいて、自分が体験したわけではないが、怖いと思った。
- とても良い活動をしている風に見せかけていることが分かったので、親切にされるほど疑わな
いといけないと思う。大学で公認されている部活やサークルを発表したら被害は減るのではな
いか。
- 初めは、ただの友達でそのつながりを守りたいと思わせてくるところが怖いところだと思いま
した。周りに流されるだけでなく、自分で断る勇気が必要だと感じました。
- 教育学部全体の集会などでカルト団体は初めは、サークルやボランティアなどの形で私たちに
近づいてくるということを知りましたが、自分に近づいてこられた時にみわけることが難しく
不安があると思いました。
- 駅前で宗教っぽいちらしや本を配っていることがあるが、それらはカルト団体なのか？
- カルトの勧誘は少し疑問に思うところがあっても、決めつけることはできない程度の疑問なの
で、なかなか気づけないんだと思いました。
- これまでは、なぜカルトに入る人がいるのか、入らなければいいだけではないのかと思ってい
たが、ビデオを見たり話を聞くうちに、気付いたら入っていたということが多いのだというこ
とを知ることができた。
- カルトの勧誘みたいな人が直接アパートに来たが断った。

(4) 今後、取り上げてほしい話題

- 学生のアルコール問題
- 様々なシチュエーションでのカルトの断り方。
- 学生の生活がアルバイトに圧迫されないようにする方法
- ギャンブル依存
- APUでの実践例を取り上げると身近な例でいいかもしれません。
- ハラスメント問題
- 大分県内あるいは大学内で実際に起きた事例があればもっと身近な問題として親近感や危機感
がもてると思います。
- ブラックアルバイトについてなど。

⑦学生のメンタルヘルス講演会

毎年、保健管理センターと高等教育開発センターの共催で学生のメンタルヘルスに関する講演会を開催している。今回は別府大学短期大学部より飯田法子先生をお招きした。飯田先生は、本年度の明治安田こころの健康財団より助成対象に選ばれた。

日 程： 平成27年12月16日(水) 13:10~14:40

場 所： 教養教育棟42号教室（巨野原キャンパス）
 看護学科棟222講義室（挾間キャンパス：テレビ会議）
 講 師： 別府大学短期大学部保育科准教授 飯田法子先生
 題 目： メンタルヘルスの理解とストレスへの対応
 概 要：

保健管理センター教授工藤欣邦先生より開会の挨拶，同センター堤隆先生による講師紹介のち，飯田先生の講演が始まった。

今回の講演の主題はストレスとその対処法である。今日ブラック企業などが社会問題となっていること，医療現場で新人のバーンアウトが多くなっていることなどがあり，また，労働安全衛生法が12月から改正されたことなど，ストレスを考える良い機会でもある。ここでは厚生労働省ホームページを参考にしたストレスチェックを実施し，その結果をもとに参加者自信が気をつけるべきことが説明された。

ストレスの基礎知識として，ストレッサーには，1)物理的ストレッサー，2)化学的ストレッサー，3)生物的ストレッサー，4)精神的ストレッサーの4種類があること。ストレスへの対処法として，生活リズム，生活の工夫，考え方の工夫，仕事の仕方の工夫，コミュニケーションの工夫などが紹介された。また，適度なストレスは生活を生き生きさせること，ポジティブ思考だけではいざというときに対処できないので，ネガティブ思考の中にも良い面があることに気づくことなど，様々な対処法の説明もあった。人の話が聞けないときは心に余裕がないなどの危険信号を早く察知することの必要性も強調された。

講演のあと，教員が学生のストレッサーにならないための心構えや，ストレスをためないコツについての質疑応答があった。

所 属	氏 名
教育福祉科学部	佐藤 晋治，安倍 景子
経済学部	安東 敏明
医学部	濱田 智広，田中 千秋，田所 朱美，出川 隆富，三宅 秀敏 中室 隆子，溝上 義則，木戸 芳香
工学部	小田 和広，福永 道彦，原田 拓典，西野 浩明，原山 博文 児玉 利忠，村田 俊幸，森田 則之，伊藤 信介
その他	釘宮 隆，津々見 智子，佐藤 智久，久保 克智，池田 圭一 大島 のぞみ，原田 綾子，松田 悦子，吉野 美香，廣野 俊輔 堤 隆，笹島 三幸

学生 26名

参加者の声

- ストレスが悪いものでもないとわかりすっきりしました。ありがとうございました。
- ストレスは悪い事だけでなく，色んな効果がある事も分かり，物事を前向きに捉える良い機会となりました。ありがとうございました。
- ストレスを感じる性質であることが良く理解できた。そのストレスを交わすこと，対処することを今後の課題にし，より楽しく過ごしていきたいと思いました。
- ストレスとどのようにつきあっていくかについて，わかりやすい説明でした。
- ストレスとつきあっていく考え方やコミュニケーションが大事であることを学びました。

- 良かったです。
- ストレスの耐性についてお話を聞けて、とても有意義な時間でした。ありがとうございました。
- 人への思いやりが回復に向けられているということを知り得る事ができました。
- 相手の話を聞く「傾聴」が大切であるというお言葉が印象的でありましたが、その後のアドバイスの対処が、心理支援士として、今私が抱えている問題点でもあります。
- 本日はお話を伺うことができ、ありがとうございました。
- ストレスはあってあたりまえと思うので、自分の考え方、気の持ちようでもプラスに生かせることに改めて気づかされた。他のせいにするのではなく、己の人間性を見つめるようにしたいものだ、と思えたことで「今」の自分の「ストレス」をうまく転換できたかも。
- ストレスの対処、生活の工夫を取り入れるとともに、仕事の仕方、考え方の工夫について本日の講演会の内容を取り入れていきたいと思います。
- 日頃からストレスとうまく付き合っていけるよう、生活スタイルや趣味を充実させていきたいと思います。
- ストレスをバネにしていこうと感じます。趣味がないので見つけてみようと思いました。ありがとうございました。
- 自分の性格について、知る機会となり良かったです。ストレスがあっても、考え方次第なので、ポジティブに捉えることができるよう心がけたいと思いました。
- 年齢や経験を重ねて、以前より楽に自分のことを考えることができるようになった気がしています。また、そのことに気付いた事も良かったと思っています。ストレスに意義を見つけ、適度にこれからもストレスと付き合っていこうと思います。
- ありがとうございました。お疲れ様です。
- 大変貴重なお話を聞くことができ、勉強させていただきました。改めて自分のストレスへの対応についても考えなおす機会となりました。ありがとうございました。
- 私はACが一番高く、CPが一番低かったです。改善すべきことなどがわかったので、これからの生活に生かせたらなと思います。
- ストレスは悪いものと思っていましたが、そうではないことが分かり驚きました。うまくバランスをとっていきたいです。ありがとうございました。
- ストレスに対する考え方、対処法など実際に試してみたいと思いました。大変勉強になったので、自分のストレスだけでなく人のストレスに対処してあげられるようになりたいと思いました。
- エゴグラムなどで自分の特徴が大まかに理解できたのはとても良かったです。貴重な体験となりました。心理学を専攻する者として、この機会をポジティブに捉えて、これからも頑張っていこうと決意を新たにしました。
- 本日はお忙しい中、お時間をとって頂き興味深いお話を聞かせて頂いてありがとうございました。私は大学に入り、心理分野を専攻し学んでいく中で1つの物事に関する多様な捉え方、考え方があることを知り、非常に明るい性格になれたと思っています。どんなストレス発散行動を行うよりも、ネガティブな考え方を変えることのほうが、大きなストレス解消につながることを身をもって感じているところです。私の姉は、非常にストレスを受けやすいタイプで、常に神経をはりめぐらしているような状態にあります。そんな姉を理解するための手助けとなりました。本当にありがとうございます。

- 実際に心理検査のようなものをして自分の傾向を知れたことがよかった。
- ストレスの考え方，物事に対する見方を工夫してみようと思いました。
- ストレスの対処法についての知識を得ることができたので良かった。
- ストレスが悪いものばかりではなく，何かしらの意義があるのかもしれないと知り，時間をかけてでもストレスの転換ができればと感じました。
- ストレスの対応性をしっかりと身につけることや適切につきあっていくことが必要だということが分かりました。
- 実際にテストで分かり自分がどんなタイプ分かりました。内容もとても興味深かったです。
- 考え方に偏っているなと自分が感じる機会が多いので，考え方の転換の話などとても参考になりました。
- 別府短大の保育科時代に心理学の分野で飯田先生から講義を受けていたので，徐々に先生のお話を聴けて嬉しかったです。適度なストレスは生き生きとさせるというのは興味深いです。試験前などストレスを感じながらも，「よっしゃー」という気持ちにもなります。「あー今日はもう疲れた」というような日が半年に1度くらいあり，そんな日に当たった時は，思い切って学校も休んじゃいます。しかし，FCが一番高い結果となったので，自己中心的にならないように心がけたいと思います。本日はありがとうございました。
- ストレスの効果には，困難に対処する能力や人とのつながりを強める，学びや成長につながるということがあるのだと学んだ。私はストレスを受けやすいタイプだと思いますが，ある物事を前向きに捉えたり意義を見出すことを心がけたいと思いました。また，本当にストレスを抱えたときに相手にやさしくしようとするのは個人的に難しいことだと感じました。そして，周りの人に相談する勇気も必要であると感じました。
- 貴重なお話を聞くことができ本当に良かったです。ありがとうございました。自分のことを振り返りながら色々なことを整理できた気がします。これからもストレスと上手に付き合いながら，・ポジティブに楽しく毎日を過ごしたいと思いました。そして，自分に余裕をもつことで，周りの人やクライアントさんにもゆったりと接していきたいです。
- ストレスについて，様々なことを学べて良かったです。エゴグラムチェックリストは円満型でしたが，良い面，悪い面どちらも当てはまる点があったように思います。自分について知り，ストレスと向きあっていきたいです。そして適度なストレスとともに生き生きと生活していきたいです。
- ストレスはなくすものではなくて，回避・軽減していくものだとわかった。また，適度なストレスは張りのある生活を送れるというのも知らなかった。エゴグラムチェックの結果で自分は他人に追従しがちで，自分の意見がないといった傾向があるらしいとわかった。この結果には納得でき，自分の考えというものを持っていくようにしたいと思った。
- ストレス社会で生きていく上で自分自身の身体を思いやることも大切だが，社会全体でストレスを弱めていく方法を模索していく必要もあるだろう。
ストレスが貯まっているときに自覚するのは難しいと思うが，今度から意識していきたいと思う。ストレスのプラスの面も意識したいと思う。
- 懸賞論文でストレスチェック制度やメンタルヘルスについて調べていて，掲示板を見て講演会について知りました。自分の考え方のクセや人間関係について分かりやすく分析ができて楽しかった。最後にありましたが「人に頼ってみること」がやはり一番のメンタルヘルスケアにな

- るのだということが分かりました。また、自分が知らず知らずのうちに、様々なストレスを交わしているということが分かり、面白かったです。
- ストレスのためすぎは良いことではないが、適度なストレスであれば逆によいという点は意外だった。
 - 具体的な対処法を紹介してもらい、よかった。
 - 途中参加でしたが、話の根拠（実験や統計の方法など）を示して頂けるとさらに宜しいかと思えます。ボンヤリした話が多く、「なぜ、そう言えるのか？」疑問に感じるところが多かったです。心理学の実験法は非常に進んでいると思えますし、興味のあるところです。
 - ストレスのもたらす様々な効果と対処法を知ることができました。ケースバイケースで難しいと思いますが、ストレス下にある学生へのうまい対処法などについてお話をうかがえればなお良かったと思います。
 - 若い頃より、ストレスというものを受ける機会が増えたと思うので、ストレス対策の方法などがためになった。
 - 非常に分かりやすい講演で、大変参考になりました。ストレス耐性を向上させるように、自分なりの工夫をしたいと思います。
 - ストレスを受けにくいタイプになれるようにしたいと思います。
 - 他者との繋がり方と、繋がられ方を選ぶこともストレスの大きな要因と思い直しました。とても分かりやすかったです。

⑧FD・SD研修会「第30回教育サロンin大分」

学生をどう伸ばすか、どう向き合うか、教員としての工夫にはどのようなものがあるかなど、日頃授業について考えていること、試みていることなどを、多くの大学の教員、学生を交えて本音で話し合うサロン型教職員研修会「教育サロンin大分」をホルトホールで開催した。今回は追手門学院大学で実施されているアサーティブ入試の報告を話題提供として実施した。

日 程： 2015年12月19日（土）13：00～18：00

会 場： ホルトホール408教室

話題提供：追手門学院大学 アサーティブセンター長 池田輝政氏
追手門大学 アサーティブオフィサー 志村知美氏

概 要：

平成26年度大学教育再生加速プログラム【テーマⅢ（入試改革）】に、私立大学では唯一の採択となった追手門学院大学の「アサーティブプログラム・アサーティブ入試」について話題提供をいただき、高大接続について参加者全体で議論した。

教員、学生、一般市民が一堂に会し意見交換し議論を深めるための場づくりの実習も取り入れ、アクティブラーニングの手法を学ぶ上でも参考になる研修会であった。

参加者の所属も様々であり、多様な大学入試の考え方について意見を交換するとともに、今後の発展や可能性についても議論を深めることが出来、有意義な研修会となった。

参加者数35名（県内外の教職員、一般市民、大分大学の教員及び学生）

⑨FD・SD講演会「変動するこれからの教育～中央教育審議会委員から見た、地方大学のこれからの方向性～」

日 時： 平成28年1月25日（月）

会 場： 且野原キャンパス教養教育棟 35号教室

医学部看護学科棟 211講義室（遠隔授業システム）

講 師： キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会 代表理事 生重幸恵氏

第1部 13：10～14：40 講演会

「変動するこれからの教育」～中央教育審議会委員から見た、地方大学のこれからの方向性～

第2部 15：00～16：40 「学生のキャリア形成を考えるワーキング」

会 場： 且野原キャンパス 高等教育開発センター室1

「変動するこれからの教育～中央教育審議会委員から見た、地方大学のこれからの方向性～」を、キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会代表理事である生重幸恵氏を講師として開催した。大分県内の大学より、20名（学内14名、学外6名）の教職員の参加があった。

参加者の声

- 大分大学を中心とする教育改革の方向性について熱く語っていただき、感銘を受けた。この改革をどのように具現化していくかが課題である。大学の構成員ならびに社会全体にどのように理解してもらえるかを考えていくことが必要である。
- 求められる地方大学の方向性の全体像をわかりやすくお話しいただき、ありがとうございました。
熱意のある講演に共感する点、多々ありました。学生のモチベーションを上げる教育のヒントを得た気がしました。
- 大分大学をほめていただくのはよろしいのですが、大学間の違いについてのご理解がやや不足していらっしゃるようです。講師選びはどのようになされるのでしょうか。
- COC+に取り組む意義を理解することができた。
- 講演の内容、主旨についてはよく理解できました。ただ、工学系だけではないと思いますが、対象は必ずしも地域だけでなく、全国も対象にする必要があると考えます。次世代に向けた教育をどのように考えるのかは、もう一度考えなおさなければなりません。
- 具体的な、細かな話（発散した）が多く、話のストーリーがつかみにくい。しかし、地域活性化にもつながる小、中、高の変化の方向（大きな）を感じることができた。これは、COC+の申請書内容と一致している。熱い教育への想いがよく理解できました。
- 今後の大学教育のあり方と地方創生との関わりについて、非常に参考になる話でした。特に「キャリア教育は、生きる力を育てる教育である」というのは、目からウロコでしたが、その通りであると思いました。また初中等教育の現状についてもよく分かりました。ありがとうございました。
- 大分の大学と地域について、いろいろのヒントを聞くことができました。Powerfulな講演で大変良かったです。
- 小学校教育から高等教育、さらに、キャリア開発に関して、普段断片的に思いを巡らせていた内容が網羅された講演であり、考えを整理する一助として大変興味深いものであった。
- 未来も守るためにも教育は大切だと思いました。
- 大変興味深い内容で、こどもの現場、大分入学者選抜改革、キャリア教育の重要性等、役に立つ事例が多く提示されたと思います。挟間キャンパスでは、本研修会の開催の周知が不十分で

あったようで、参加者が非常に少なかったことが残念でした。

- 一時的に詰め込んでその後すぐに忘れてしまうような知識の習得でなく・・・というところがそのとおりだと思いました。北野教務委員長もよくおっしゃっています。大分大学、これからも頑張っていかなければいけないとつくづく感じました。
- いろいろな面で共感できる内容だった。特に、小学校～大学までのキャリア形成と、その後の生涯までを見通す教育の視点が印象的だった。18歳で決める（決まる）分もあると思うが、大切なのは、そこまでのキャリアに続ける次のキャリアだという点など・・・こうした視点を導入するには、大学教員ももっと学外に出て多様な活動（ボランティアな分を含む）を体験する必要があると思う。
- 今日の教育改革の「なぜ」について、本音で語っていただき、中教審（文科省）の考え、スタンスを理解することができました。ありがとうございました。
- 教育の改革がなぜ今問われているのかが、明確になった。複雑な課題がある中で、何ができるのか、真の学ぶ力を目と耳と（脳）知恵によって本物のものとさせたいと思いました。熱心なご講演ありがとうございました。

⑩アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会

大学の教育改革が全国的に展開されており、その中核を占めるものはアクティブラーニングの導入である。本学でもその全学的な取組が始まり、シラバスにも各授業でのアクティブラーニングへの取組を記載するよう新たな項目が加わった。その一方では、アクティブラーニングとは何かの疑問も少なくない。そこで、大分大学が進めている「大学改革を加速させるための人づくりプロジェクト」の一環として、アクティブラーニングに関する研修会を開催した。

テーマ： 「アクティブラーニングを全学的に展開するための研修会」

日 時： 平成27年3月24日（火）13：00～16：00

場 所： 旦野原キャンパス教養教育棟23号教室

講 師： 成田秀夫氏（河合塾 研究開発職・講師）

野吾教行氏（河合塾 教育研究部）

概 要：

最初に、高等教育開発センター長山下茂氏より、開会の辞として、全国のアクティブラーニングへの取組に関して、研究会等へ参加しての印象とその必要性が伝えられた。

次に、望月聡副学長より挨拶があり、本学でのアクティブラーニングへの今後の取組、将来に向けての展望等のお話があった。講師の紹介のあと、講演が始まった。

第1部 成田秀夫氏より

1. 社会の変化とアクティブラーニング
2. 学びを深めるアクティブラーニング
3. 今日からできるアクティブラーニング型授業

第2部 野吾教行氏より

1. 河合塾の大学教育力調査について
2. アクティブラーニングについて
3. 2012年度 大学のアクティブラーニング調査－質問紙調査から見てきたこと－

4. 実地調査からの事例紹介と提言

今回の研修では、具体的なシラバスや教材作成のためのワークショップが予定されていたが、時間が不十分で実施できなかったため、次回の研修会への課題とした。参加者からは、アクティブラーニングについての理解が深まったと好評であった。今回は予定人員どおりの25名の参加があった。

参加者（名簿があればリスト作成）

教育福祉科学部 6名

経済学部 6名

医学部 2名

工学部 6名

その他の機関 5名

①FD・SD研修会「地域で学び、地域で活躍する学生を育成するためには」

日時： 3月6日（日）・3月28日（月）

概要： FD・SD研修会「地域で学び、地域で活躍をする学生を育成するためには」を（株）ラーニングバリュー主導により開催した。

日時： 3月23日（水）

概要： FD・SD研修会「アクティブラーニングの全学的に展開するための研修会（その2）」をKEIアドバンス（河合塾グループ）により開催した。

（2）学生による授業評価アンケート調査

本学の授業改善を目的とした、学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計と分析を行い、報告書を発行している。本年度刊行した報告書は「平成26年度教員による自己点検レポート集～学生による授業評価への対応～」 「平成26年度授業改善のためのアンケート調査結果報告書～学生による授業評価～」である。

平成27年前学期及び後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

前学期

- ・教養教育（全学教育機構）：外国語科目・ゼミナール科目
- ・教育福祉科学部：Cグループ（授業担当者の名前さ～の）
- ・経済学部：各学科2番目の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

後学期

- ・教養教育（全学教育機構）：身体スポーツ科目・医学部基礎教育科目
- ・教育福祉科学部：Bグループ（授業担当者の名前は～わ）
- ・経済学部：各学科3番目の講座の科目
- ・医学部：医学部提出科目

①平成27年度前期授業改善のためのアンケート対象科目

【教養教育】

英語 I (HARRAN THOMAS JAMES)	総合英語Ⅲ (雲 和子)
英語 I (HARRAN THOMAS JAMES)	基礎英語 I (雲 和子)
英語 I (HARRAN THOMAS JAMES)	基礎英語 I (雲 和子)
英語 II (HARRAN THOMAS JAMES)	英語ゼミナール 7 (雲 和子)
英語 II (HARRAN THOMAS JAMES)	英語 I (園井 千音)
英会話 (ウィリアム アルバート マクビーン)	英語 I (園井 千音)
英会話 (ウィリアム アルバート マクビーン)	英語 I (園井 千音)
英会話 (エバンズ・グリニス)	英語 II (園井 千音)
英会話 (エバンズ・グリニス)	英語 II (園井 千音)
基礎フランス語 I (コモン ティエリ)	基礎ハングル I (黄 炳峻)
教養フランス語 I (コモン ティエリ)	基礎ハングル I (黄 炳峻)
オーラル・イングリッシュ	教養ハングル I (黄 炳峻)
(シンプソン・リチャード ヒュー)	生涯スポーツ K (バレーボールを楽しもう)
英会話 (シンプソン・リチャード ヒュー)	(岡内 優明)
英会話 (シンプソン・リチャード ヒュー)	英語 I (岡本 哲明)
オーラル・イングリッシュ	総合英語Ⅲ (久保田 亮)
(シンプソン・リチャード ヒュー)	総合英語 (橋本 美喜男)
英会話 (ヌートバー ジュリー)	総合英語 (橋本 美喜男)
オーラル・イングリッシュ (ブリス アリアナ)	英語 I (玉井 昇)
TOEFL 英語 I (ホワイ トクリストファー ミル)	応用英語 E (玉井 昇)
総合英語Ⅲ (ホワイ トクリストファー ミル)	オーラル・イングリッシュ (金子 光茂)
留学準備集中英語 (ホワイ トクリストファー ミル)	総合英語 (金子 光茂)
総合英語 I (ホワイ トクリストファー ミル)	日本語文法分析 (金森 由美)
留学準備集中英語 (ホワイ トクリストファー ミル)	表現技術 (金森 由美)
アカデミック・イングリッシュ I (リーディ ング&ライティング) (レイモンド ラングレイ)	大分事情 (金森 由美)
アカデミック・イングリッシュ II (スピーキ ング) (レイモンド ラングレイ)	英語 II (後藤 一美)
基礎ドイツ語 I (安岡 正義)	英語 II (後藤 一美)
教養ドイツ語 I (安岡 正義)	応用英語 E (御手洗 靖)
基礎ドイツ語 I (安岡 正義)	英語ゼミナール16 (御手洗 靖)
基礎フランス語 I (安田 俊介)	英語 I (佐々木 朱美)
基礎フランス語 I (安田 俊介)	英語 I (佐々木 朱美)
応用フランス語 I (安田 俊介)	英語 I (佐々木 朱美)
総合英語 (稲用 茂夫)	英語 II (佐々木 朱美)
応用英語 E (稲用 茂夫)	英語 II (佐々木 朱美)
	英語 I (佐々木 朱美)
	基礎ドイツ語 I (佐々木 博康)

教養ドイツ語Ⅰ (佐々木 博康)
 英語Ⅰ (三重野 佳子)
 英語Ⅰ (山野 敬士)
 英語Ⅱ (山野 敬士)
 英語Ⅱ (山野 敬士)
 教養中国語Ⅰ (森川 登美江)
 基礎中国語Ⅰ (森川 登美江)
 総合英語Ⅲ (染矢 正一)
 英語Ⅰ (染矢 正一)
 英語Ⅰ (染矢 正一)
 総合英語Ⅰ (染矢 正一)
 英語Ⅱ (染矢 正一)
 生涯スポーツB (アウトドアスポーツ入門)
 (前田 寛)
 基礎ドイツ語Ⅰ (池内 宣夫)
 教養ドイツ語Ⅰ (池内 宣夫)
 総合英語Ⅲ (田村 淑子)
 総合英語Ⅲ (田村 淑子)
 英語Ⅰ (田村 淑子)
 英語Ⅰ (田村 淑子)
 総合英語Ⅰ (田村 淑子)
 総合英語Ⅰ (田村 淑子)
 英語Ⅰ (田村 淑子)
 生涯スポーツC (レクリエーションスポーツ)
 (島田 義生)
 ソーシャルネットワークと大分からの発信Ⅱ
 (南里 敬三)
 基礎中国語Ⅰ (包 聯群)
 基礎中国語Ⅰ (包 聯群)
 オーラル・イングリッシュ (柳井 智彦)
 総合英語Ⅰ (利光 英世)
 総合英語Ⅰ (利光 英世)
 総合英語 (利光 英世)
 応用英語E (利光 英世)
 基礎中国語Ⅰ (李 末)
 TOEFL 英語Ⅰ (李 末)
 総合英語Ⅲ (李 末)
 基礎中国語Ⅰ (李 末)
 教養中国語Ⅰ (李 末)
 総合英語Ⅲ (李 末)

総合英語Ⅰ (李 末)
 英語Ⅱ (李 末)
 英語Ⅱ (李 末)
 英語Ⅰ (李 末)
 基礎ハングルⅠ (劉 美貞)
 応用ハングルⅠ (劉 美貞)
 基礎中国語Ⅰ (鄧 紅)
 教養中国語Ⅰ (鄧 紅)
 基礎中国語Ⅰ (鄧 礼容)
 基礎中国語Ⅰ (鄧 礼容)
 教養中国語Ⅰ (鄧 礼容)

【教育福祉科学部】

英語コミュニケーションⅠ
 (シャーリー ジェラルド トーマス)
 アカデミック・ライティング
 (シンプソン・リチャード ヒュー)
 英語コミュニケーション中級A
 (シンプソン・リチャード ヒュー)
 言語・外国語(英)Ⅰ
 (シンプソン・リチャード ヒュー)
 英語コミュニケーション初級A
 (シンプソン・リチャード ヒュー)
 幼児教育法 (永田 誠)
 生涯学習概論Ⅰ (永田 誠)
 学校保健(小児保健, 精神保健, 学校安全及
 び救急処置を含む。) (玉江 和義)
 人間と環境Ⅰ (高浜 秀樹)
 言語・外国語(独)Ⅰ (佐々木 博康)
 知的障害児の発達検査法(佐藤 晋治)
 彫刻ⅠA(a) (佐脇 健一)
 彫刻ⅡA(a) (佐脇 健一)
 表現基礎実習AⅡ(彫刻)(佐脇 健一)
 空間・立体表現実習Ⅰ (佐脇 健一)
 芸術表現応用AⅡ(彫刻) (佐脇 健一)
 彫刻ⅡB(a) (佐脇 健一)
 消費者教育 (財津 庸子)
 化学Ⅰ (芝原 雅彦)
 創作表現実習Ⅰ (清水 慶彦)
 表現理論基礎Ⅰ (清水 慶彦)

アンサンブルⅠ (清水 万敬)
 合奏Ⅰ (和楽器を含む) (清水 万敬)
 管楽器Ⅰ (清水 万敬)
 表現基礎実習BⅢ (管楽器) a (清水 万敬)
 気象海洋学実験Ⅰ (西垣 肇)
 大気海洋科学Ⅰ (西垣 肇)
 地学Ⅱ (西垣 肇)
 体育学概論 (西本 一雄)
 スポーツ社会学 (谷口 勇一)
 ニュースポーツ (谷口 勇一)
 家庭電気・機械 (谷野 勝敏)
 電子工学 (実習を含む) (谷野 勝敏)
 数学概論 (小) (竹本 義夫)
 製図 (中原 久志)
 情報工学 (中原 久志)
 情報科授業論 (中原 久志)
 情報システムⅠ (中原 久志)
 算数科指導法 (小) (中川 裕之)
 宇宙科学 (仲野 誠)
 情報処理演習Ⅱ (仲野 誠)
 地学Ⅰ (仲野 誠)
 異文化接触史Ⅰ (鳥井 裕美子)
 政治学概論Ⅰ (鄭 敬娥)
 ソルフェージュⅠ (田村 洋彦)
 音楽基礎実技Ⅰ (田村 洋彦)
 スポーツ史 (田端 真弓)
 体育史 (田端 真弓)
 体育 (小) (田端 真弓)
 西洋美術史 (田中 修二)
 美学・美術史概論 (田中 修二)
 表現の歴史Ⅰ (田中 修二)
 病弱児の心理・生理・病理 (田中 新正)
 障害児教育史 (田中 新正)
 病弱児の指導法 (田中 新正)
 表現基礎実習BⅡ (ピアノ) a (田中 星治)
 ピアノⅤ (田中 星治)
 芸術表現応用BⅡ (ピアノ) b (田中 星治)
 ピアノⅢ (田中 星治)
 表現基礎実習BⅡ (ピアノ) c (田中 星治)
 ピアノⅠ (田中 星治)

保育の指導2 (田中 洋)
 幼児研究法Ⅰ (田中 洋)
 幼児・児童臨床心理学 (田中 洋)
 子ども理解の探求 (田中 洋)
 子ども観察法 (田中 洋)
 保育の指導Ⅳ (田中 洋)
 古典文学研究 (田畑 千秋)
 国文学概論 (田畑 千秋)
 古典文学特講 (田畑 千秋)
 ライフスタイルと衣服(被服製作実習を含む)
 (都甲 由紀子)
 被服学(被服製作実習を含む)
 (都甲 由紀子)
 被服構成実習Ⅱ (都甲 由紀子)
 被服構成実習Ⅱ (都甲 由紀子)
 衣生活論 (都甲 由紀子)
 世界地誌 (土居 晴洋)
 地誌学 (土居 晴洋)
 地歴科授業論 (土居 晴洋)
 A・A地域論Ⅱ (土居 晴洋)
 人文地理学概論 (土居 晴洋)
 人文地理学概論Ⅰ (土居 晴洋)
 機械工学概論(実習を含む) (島田 和典)
 内燃機関実習 (島田 和典)
 芸術表現応用AⅡ(木工) (富田 礼志)
 クラフトⅠ (富田 礼志)
 生活と空間 (富田 礼志)
 図画工作科指導法(小) (富田 礼志)
 教育臨床心理学 (武内 珠美)
 臨床心理学 (武内 珠美)
 道徳の指導法 (鈴木 篤)
 教育本質論 (鈴木 篤)

【経済学部】

経済学Ⅱ (宇野 真人)
 地域と交通 (大井 尚司)
 国際物流論Ⅰ (大井 尚司)
 経済地理学Ⅰ (大呂 興平)
 簿記Ⅰ (越智 学)
 簿記Ⅰ (小野 慎一郎)

地域福祉論Ⅱ (垣田 裕介)
 地域経営論Ⅰ (久木元 美琴)
 保険論Ⅰ (佐藤 大介)
 経済学Ⅲ (佐藤 隆)
 経済学Ⅰ (高見 博之)
 EUの政治と経済 (デイ スティーブン)
 経営戦略論Ⅰ (仲本 大輔)
 地域発展論Ⅰ (宮町 良広)
 農村発展論Ⅰ (山浦 陽一)
 企業ファイナンス論Ⅰ (鶴崎 清貴)
 経営学入門 (幸 光善)
 人事システム論Ⅰ (幸 光善)
 都市経営論Ⅰ (高島 拓哉)
 日本経済史Ⅰ (合田 公計)
 比較地域分析Ⅰ (城戸 照子)
 労使関係論 (石井 まこと)
 国際関係論Ⅰ (高山 英男)

【医学部】

フランス語Ⅰ (井上 富江)
 フランス語Ⅳ (井上 富江)
 英語Ⅰ (大下 晴美)
 英語Ⅰ (大下 晴美)
 スペイン語Ⅱ (佐藤 孝裕)
 中国語Ⅱ (清水 昭子)
 英語Ⅶ (チドゥロウ・ショーン)
 英語Ⅶ (チドゥロウ・ショーン)
 英語Ⅲ (チドゥロウ・ショーン)
 英語Ⅲ (チドゥロウ・ショーン)
 ドイツ語Ⅰ (野村 文宏)
 ドイツ語Ⅳ (野村 文宏)
 老年看護方法論Ⅱ (三重野 英子)
 老年看護学概論 (三重野 英子)
 母性看護学概論 (水谷 幸子)
 母性看護方法論Ⅱ (水谷 幸子)
 看護アセスメント学Ⅱ (宮崎 伊久子)
 英語Ⅱ (森 茂)
 英語Ⅱ (森 茂)
 小児看護方法論Ⅱ (幸松 美智子)
 英語Ⅷ (吉岡 秀克)

ハングルⅡ (劉 美貞)
 成人慢性期看護方法論Ⅱ (脇 幸子)

【工学部】

解析学Ⅱ (安藤 悦夫)
 解析学Ⅱ (開 憲明)
 建築施工学 (上田 賢司)
 建築法規 (宮本 吉朗)
 図学 (今永 和浩)
 測量学実習 (児玉 伸彦)
 代数学Ⅱ (武口 博文)
 力学Ⅰ (後藤 善友)
 力学Ⅰ (今野 宏之)
 技術者倫理 (佐藤 光雄)
 物理学基礎 (後藤 善友)
 物理学基礎 (小林 正)
 基礎代数学Ⅰ (武口 博文)
 基礎解析学Ⅰ (安藤 悦夫)
 基礎解析学Ⅰ (開 憲明)
 システム制御基礎 (中江 貴志)
 メカトロニクス (田上 公俊)
 機械工学実験Ⅰ (田上 公俊)
 機械製図 (後藤 真宏)
 機械設計学基礎 (橋本 淳)
 機械力学基礎・演習 (劉 孝宏)
 材料と弾性の力学 (後藤 真宏)
 材料力学基礎・演習 (後藤 真宏)
 伝熱学Ⅰ (橋本 淳)
 熱力学基礎・演習 (田上 公俊)
 流体力学基礎・演習 (濱川 洋充)
 流体工学Ⅰ (栗原 央流)
 機械物理 (山本 隆栄)
 機械数学Ⅱ (石松 克也)
 熱工学Ⅱ (田上 公俊)
 エネルギー変換機器 (後藤 雄治)
 機構学 (福永 道彦)
 弾性力学 (小田 和広)
 伝熱学Ⅰ (岩本 光生)
 電気回路ⅠⅠ (高坂 拓司)
 電気理論基礎 (濱本 誠)

電磁気学 I	(濱本 誠)	データサイエンス演習 (和泉 志津恵)	
流れ学 I	(山田 英巳)	情報論理学	(古家 賢一)
流体力学 I	(山田 英巳)	データサイエンス基礎 II (和泉 志津恵)	
機械要素設計学	(福永 道彦)	基礎プログラミング	(中島 誠)
エネルギーシステムデザイン (後藤 雄治)		言語処理	(川口 剛)
材料力学 I	(小田 和広)	ソフトウェア工学 II	(大竹 哲史)
機械設計製図 I	(岩本 光生)	計算機アーキテクチャ I	(川口 剛)
機械設計製図 II	(岩本 光生)	英語コミュニケーション	(大城 英裕)
音響工学	(秋田 昌憲)	音メディア処理	(古家 賢一)
計算機工学 I	(緑川 洋一)	基礎代数学 I	(田中 康彦)
通信工学	(秋田 昌憲)	基礎代数学 I	(寺井 伸浩)
電気回路 I	(金澤 誠司)	基礎解析学 I	(田中 康彦)
電気回路 III	(戸高 孝)	基礎解析学 I	(寺井 伸浩)
電気機器設計・製図	(佐藤 尊)	セラミックス化学	(豊田 昌宏)
電気工学概論 I	(柴田 克成)	化学工学	(平田 誠)
電気電子計測工学	(樋田 雄二)	基礎理論化学 I	(大賀 恭)
電気電子工学入門	(戸高 孝)	原子と分子	(原田 拓典)
電気電子制御工学 I	(柴田 克成)	原子と分子	(大賀 恭)
電子回路 II	(緑川 洋一)	高分子化学 I	(守山 雅也)
電磁気学 I	(金澤 誠司)	高分子化学 II	(氏家 誠司)
電磁気学 IV	(戸高 孝)	錯体化学	(甲斐 徳久)
力学 I	(末谷 大道)	電気化学	(津村 朋樹)
物理学基礎	(末谷 大道)	物理化学 I	(永岡 勝俊)
電力エネルギー工学	(市來 龍大)	分析化学	(井上 高教)
電気電子数学 I	(柴田 克成)	無機化学 I	(津村 朋樹)
物理学実験	(長屋 智之)	コンピュータプログラミング (富来 礼次)	
力学 I	(長屋 智之)	コンピュータプログラミング (富来 礼次)	
物理学基礎	(長屋 智之)	基礎構造	(佐藤 嘉昭)
物理学基礎	(近藤 隆司)	建築CAD製図 II	(姫野 由香)
基礎電磁気学	(近藤 隆司)	建築環境計画 I	(大鶴 徹)
コンピュータグラフィックス (西野 浩明)		建築環境工学 I	(富来 礼次)
解析学 II	(田中 康彦)	建築計画 I	(鈴木 義弘)
解析学 II	(寺井 伸浩)	建築計画設計演習 II	(鈴木 義弘)
計算機科学概論	(中島 誠)	建築構法	(井上 正文)
情報システム概論	(大竹 哲史)	建築材料	(大谷 俊浩)
情報ネットワーク	(西野 浩明)	建築設備計画 I	(真鍋 正規)
情報構造論	(中島 誠)	建築総論	(佐藤 嘉昭)
情報職業指導	(越智 義道)	建築耐震システム	(菊池 健児)
代数学 II	(田中 康彦)	構造力学 II	(井上 正文)
代数学 II	(寺井 伸浩)	材料力学	(佐藤 嘉昭)

鉄筋コンクリート構造 (菊池 健児)
 都市計画 (小林 祐司)
 福祉環境計画 (鈴木 義弘)
 建築英語 (佐藤 嘉昭)
 Cプログラミング (池内 秀隆)
 メカトロニクスⅡ (小川 幸吉)
 応用解析Ⅱ (福田 亮治)
 応用解析Ⅱ (福田 亮治)
 情報処理概論 (松尾 孝美)
 身体運動機能学 (岡内 優明)
 人間システム信号処理 (上見 憲弘)
 人間工学 (前田 寛)
 電気回路Ⅱ (小川 幸吉)
 電子回路Ⅱ (上見 憲弘)
 電磁気学Ⅰ (小川 幸吉)

福祉機器工学Ⅰ (今戸 啓二)
 応用解析Ⅲ (沖野 隆久)
 応用解析Ⅲ (福田 亮治)
 応用解析Ⅲ (沖野 隆久)
 応用解析Ⅳ (沖野 隆久)
 応用解析Ⅳ (沖野 隆久)
 システム解析 (松尾 孝美)
 現代制御工学 (菊池 武士)
 力学基礎演習Ⅰ (松尾 孝美)
 計測工学 (上見 憲弘)
 機構力学 (今戸 啓二)
 材料力学Ⅰ (今戸 啓二)
 バイオエンジニアリング概論 (菊池 武士)
 データベースシステム (二村 祥一)
 知識処理論 (末田 直道)

②平成27年度後期授業改善のためのアンケート対象科目

健康運動科学(後期) (稲垣 敦)
 健康運動科学演習Ⅱ (吉村 良孝)
 健康運動科学演習Ⅱ (吉村 良孝)
 化学Ⅲ (下田 恵)
 化学Ⅳ (久保田 直治)
 化学実験 (久保田直治・下田恵)
 化学実験 (久保田 直治)
 医療情報学Ⅰ (江島 伸興)
 心理学 (上野 徳美)
 医学のための哲学 (西 英久)
 数学Ⅱ (大山 哲司)
 物理学Ⅱ (谷川 雅人)
 生物学Ⅳ (池田 八果穂)
 人間生物学 (池田八果穂・濱田文彦)
 生物学Ⅲ (松浦 恵子)
 医学のための心理学Ⅱ (林 智一)
 健康トレーニング (岡内 優明)
 生涯スポーツの足がかりⅡ (島田 義生)
 秋・冬の野外活動 (前田 寛)
 スキー・スノーボードの理論と実践
 (前田寛・岡内優明)
 バラエティースポーツの実践 (玉江 和義)

レクリエーションスポーツと健康づくり
 (松元 義人)
 現代スポーツの問題点を探る - 卓球を例にし
 て - (西本 一雄)
 運動学習の科学 (田端 真弓)
 エクササイズの理論と実践 (麻生 和江)

【教育福祉科学部】

権利擁護と成年後見制度論 (橋本 聖美)
 精神保健福祉援助演習Ⅰ (橋本 美枝子)
 精神保健福祉援助実習指導
 (橋本 美枝子)
 精神保健福祉援助実習指導
 (橋本 美枝子)
 精神保健福祉援助演習Ⅱ (橋本 美枝子)
 精神保健福祉相談援助の基盤(専門)
 (橋本 みきえ)
 英語研究Ⅰ (橋本 美喜男)
 英語研究Ⅱ (橋本 美喜男)
 学習英文法 (橋本 美喜男)
 教職展開ゼミ (長谷川 祐介)
 特別活動の理論と実際 (長谷川 祐介)

国語科教育演習	(花坂 歩)	国語科指導法(中)	(堀 泰樹)
国語科学習材研究	(花坂 歩)	コミュニケーション論	(堀 泰樹)
線形代数Ⅱ演習	(馬場 清)	手話Ⅱ	(本多 みどり)
線形代数Ⅱ	(馬場 清)	福祉の心理学	(前田 明)
代数学	(馬場 清)	理科教育学入門	(牧野 治敏)
計算機数学	(馬場 清)	表現と環境	(松田 聡)
電気工学(実習を含む)	(東 徹)	音楽理論・作曲法・音楽史基礎	(松田 聡)
社会保障論Ⅰ	(久本 貴志)	表現の歴史Ⅱ	(松田 聡)
社会(小)	(平田 利文)	表現理論基礎Ⅱ	(松田 聡)
社会科授業論	(平田 利文)	表現の歴史Ⅲ	(松田 聡)
基礎デザインⅡB(b)	(廣瀬 剛)	音楽科指導法(中)	(松本 正)
芸術表現応用AⅠ(デザイン)	(廣瀬 剛)	音楽科授業論	(松本 正)
構成演習	(廣瀬 剛)	音楽科指導法(小)	(松本 正)
デジタルアート演習	(廣瀬 剛)	音楽科指導法(小)	(松本 正)
ソーシャルワーク論Ⅲ	(廣野 俊輔)	介護概論	(三重野 英子)
体験実習Ⅱ(社会福祉)	(廣野 俊輔)	心理学特別研究	(溝口 剛)
障害者福祉論	(廣野 俊輔)	医療心理学	(溝口 剛)
精神保健福祉に関する制度とサービスⅡ	(廣野 俊輔)	基礎ゼミⅡ(心理)	(溝口 剛)
		英語科授業論	(御手洗 靖)
情報通信	(藤井 弘也)	理科指導法(中)	(三次 徳二)
情報と職業	(藤井 弘也)	環境科学入門	(三次 徳二)
応用数学	(藤井 弘也)	理科指導法(小)	(三次 徳二)
応用理科Ⅰ	(藤井 弘也)	理科授業論	(三次 徳二)
美術鑑賞論	(藤井 康子)	食物学(栄養学, 食品学及び調理実習を含む)	(望月 聡)
美術鑑賞論	(藤井 康子)		
美術科授業論	(藤井 康子)	食品学	(望月 聡)
社会科指導法(中)	(藤瀬 泰司)	現代食品事情	(望月 聡)
教育心理学研究法Ⅱ	(藤田 敦)	基礎ゼミⅡ(生活)	(望月 聡)
心理学実験法	(藤田 敦)	食物学演習	(望月 聡)
心理学実験法	(藤田 敦)	指揮法実習	(森口 真司)
教授学習心理学	(藤田 敦)	教員志望者のためのキャリア開発	(森下 覚)
キャリア総合演習	(藤田 敦)		
近代文学概論	(藤原 耕作)	日本史特講Ⅱ	(八木 直樹)
近代文学史	(藤原 耕作)	日本史概説Ⅱ	(八木 直樹)
近代文学研究	(藤原 耕作)	日本史概説Ⅱ	(八木 直樹)
英語コミュニケーションⅣ		共生社会論	(八木 直樹)
	(ポール ミッシェル)	英語科指導法(中)	(柳井 智彦)
英語コミュニケーションⅡ		教育社会学	(山岸 治男)
	(ポール ミッシェル)	言語・外国語(仏)Ⅱ	(山口 真紀)
国語科授業論	(堀 泰樹)	教育研究の基礎	(山崎 清男)

教育の行政と組織 (山崎 清男)
 現代の教育課題 (山崎 清男)
 学級指導演習 (山崎 清男)
 プログラミングと言語 (山下 茂)
 コンピュータ概論 (山下 茂)
 物理学実験 I (コンピュータ活用を含む)
 (山下 茂)
 物質科学基礎実験 I (山下 茂)
 ネットワーク基礎演習 (山下 茂)
 情報基礎演習 (山下 茂)
 教育情報科学 (山下 茂)
 数値情報処理 (山下 茂)
 国語表現法 (山本 裕一)
 福祉行財政・福祉計画論 (四ツ谷 年晴)
 言語・外国語 (中) I b (李 末)
 言語・外国語 (中) II (李 末)

【経済学部】

日本の社会保障 (阿部 誠)
 経済学 II (宇野 真人)
 管理会計論 II (大崎 美泉)
 金融論 II (小笠原 悟)
 簿記 II (越智 学)
 監査論 II (越智 学)
 簿記 II (小野 慎一郎)
 会計学 II (小野 慎一郎)
 財政政策 (小野 宏)
 原価計算論 II (加藤 典生)
 証券市場論 (金 珍奎)
 異文化間コミュニケーション論 II (久保田亮)
 経済学 I (高見 博之)
 情報社会論 II (豊島 慎一郎)
 中国文化論 (包 聯群)

【医学部】

症状マネジメント (井上 亮)
 基礎看護技術 I (吉良 いずみ)
 感覚器疾病論 (穴井 孝信)

【工学部】

電力システム工学 (後藤 雄治)
 エネルギー変換工学 (後藤 雄治)
 制御工学 II (後藤 雄治)
 電気回路 I (高坂 拓司)
 流れ学 II (山田 英巳)
 流体工学 II (山田 英巳)
 材料力学 II (小田 和広)
 工業力学 (堤 紀子)
 機械材料 (堤 紀子)
 機械工作法 (齋藤 晋一)
 機械設計製図 III (齋藤 晋一)
 電磁気学 II (濱本 誠)
 木質構造 (井上 正文)
 鉄骨構造 (井上 正文)
 建築構造設計 II (菊池 健児)
 建築構造設計 I (菊池 健児)
 構造解析 (菊池 健児)
 塑性設計法 (菊池 健児)
 都市システム工学 (小林 祐司)
 建築設計演習 (小林 祐司)
 建築ワークショップ (小林 祐司)
 建築材料実験 (大谷 俊浩)
 構造力学 I (大谷 俊浩)
 構造力学 I 演習 (大谷 俊浩)
 建築環境工学 II (大鶴 徹)
 建築計画 II (姫野 由香)
 建築環境計画 III (富来 礼次)
 住居論 (鈴木 義弘)
 建築計画設計演習 I (鈴木 義弘)
 オペレーションズ・リサーチ基礎
 (越智 義道)
 データサイエンス基礎 I (越智 義道)
 情報数学 (越智 義道)
 多変量解析 (原 恭彦)
 数値解析 I (原 恭彦)
 数値解析演習 (原 恭彦)
 ウェブサイエンス (古家 賢一)
 ヒューマン・インタフェース (古家 賢一)
 マルチメディア処理 (行天 啓二)

基礎解析学Ⅱ	(寺井 伸浩)	化学史	(甲斐 徳久)
基礎代数学Ⅱ	(寺井 伸浩)	化学結合論	(氏家 誠司)
オペレーティング・システム	(西野 浩明)	物理化学Ⅱ	(大賀 恭)
情報英語	(西野 浩明)	分離工学	(平田 誠)
計算機アーキテクチャⅡ	(川口 剛)	有機化学Ⅰ	(守山 雅也)
人工知能基礎	(大竹 哲史)	無機化学Ⅱ	(津村 朋樹)
デジタル回路	(大竹 哲史)	流体力学	(濱川 洋充)
アルゴリズム論	(中島 誠)	機械設計製図	(中江 貴志)
基礎解析学Ⅱ	(田中 康彦)	システム制御	(中江 貴志)
基礎代数学Ⅱ	(田中 康彦)	材料力学	(後藤 真宏)
熱力学	(近藤 隆司)	機械工学基礎・演習	(後藤 真宏)
物理学実験	(近藤 隆司)	電気工学概論Ⅱ	(秋田 昌憲)
確率統計	(福田 亮治)	電気回路Ⅱ	(金澤 誠司)
応用解析Ⅱ	(福田 亮治)	電磁気学Ⅱ	(金澤 誠司)
人間システム工学	(上見 憲弘)	電磁気学Ⅲ	(戸高 孝)
電子回路Ⅰ	(上見 憲弘)	電気電子材料	(戸高 孝)
生体運動制御論	(前田 寛)	プラズマ工学	(市來 龍大)
材料工学	(今戸 啓二)	電気電子数学Ⅱ	(柴田 克成)
材料力学Ⅱ	(今戸 啓二)	通信方式	(秋田 昌憲)
人間システム制御工学	(松尾 孝美)	電気機器工学Ⅰ	(槌田 雄二)
電気回路Ⅰ	(小川 幸吉)	電子回路Ⅰ	(緑川 洋一)
力学基礎演習Ⅱ	(菊池 武士)	物理学実験	(末谷 大道)
制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)	力学Ⅱ	(末谷 大道)
物質の状態と変化	(大賀 恭)	機械力学	(劉 孝宏)
基礎理論化学Ⅱ	(大賀 恭)	熱工学Ⅰ	(田上 公俊)
物質の状態と変化	(原田 拓典)	リハビリテーション工学	(永野 敬喜)
生物有機化学	(石川 雄一)	建築CAD製図Ⅰ	(重田 信爾)

(3) 教育改革推進事業の支援

本年度、高等教育開発センターFD・授業評価部門として関わった全学の事業は、1) 学長裁量経費「人づくり経費」、2) 全学教育機構教養改革部門学修システムワーキング、3) 平成27年度学長戦略経費（機能強化推進枠及び教育改革推進枠）であった。1および2については別途報告書が作成されているので、ここでは学長戦略経費（機能強化推進枠及び教育改革推進枠）事業名「地域密着型のアクティブラーニングを強化するための学修環境の整備」について記した。要望調書は以下のとおりである。

平成27年度 国立大学改革基盤強化促進費 要望調書

部局名： _____

順位																	
事業名	地域密着型のアクティブラーニングを実現する学修環境の整備																
事業概要	<p>大分大学の強みである福祉を主題とした教育・研究と地域に根ざした大学としての取り組みを、より積極的に教育へ反映させるための教養教育改革が平成28年度より実施される。また、平成28年度の福祉健康科学部の新設、教育学部への改組がおこなわれ、より地域と密着した授業が必要となる。</p> <p>一方、今日的な大学教育の課題として、アクティブラーニングは必須である。これらの課題に対応し実効性のある教育を展開するための施設として、地域と教室を高品質に結ぶフューチャークラスルームの新設とアクティブラーニング教室の改修を行い、それらの教室で活用するデジタルペーパーを導入する。</p> <p>本事業の教室整備により、教室に居ながらにしてリアルな地域・現場の様子を把握しつつ、臨場感のあるグループワークやディスカッションなどの学習活動を展開することができる。</p> <p>さらに、この学修成果を的確に把握し、学生の指導に活かすことができるよう、学修支援システムを改修し学生の成果物の蓄積を容易にすると共に、学修成果を「見える化」することで、教員がチームとなって学生を指導できるシステムとする。</p> <p>教室と学修支援体制を改修する設備を導入することで、学生に授与する学位を実質化するとともに、福祉と地域の課題解決能力を備えた学生を育成することができる。</p>																
整備内容	<ul style="list-style-type: none"> ・整備場所：教養教育棟2階 ・フューチャークラスルーム設備の新設（28号教室） <ul style="list-style-type: none"> 壁面スクリーン（4面）及びプロジェクタ（5台） 4K短焦点プロジェクタ（1台） テレビ会議システム（1組） 電子ホワイトボード（1面） 可動式机、椅子セット（50組） 機器取り付け支柱、映像、音声、無線LAN環境整備 ・アクティブラーニング教室への改修（25、26、27号各教室） <ul style="list-style-type: none"> 壁面スクリーン（3面×3教室）及びプロジェクタ（12台） 4K短焦点プロジェクタ（1台） 機器取り付けラック、映像、音声、無線LAN環境整備 ・学修支援機器導入 <ul style="list-style-type: none"> デジタルペーパー（50個） 電子ホワイトボード（4台） カスタマイズ費用 ・学修支援システム改修 <ul style="list-style-type: none"> 電子ポートフォリオ構築 																
事業経費	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">所要額①（施設整備費）</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">70,600</td> <td style="width: 20%; text-align: right;">千円</td> </tr> <tr> <td>所要額②（附帯工事費等）</td> <td style="text-align: right;">29,000</td> <td style="text-align: right;">千円</td> </tr> <tr> <td>学内負担額③</td> <td></td> <td style="text-align: right;">千円</td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="border-top: 1px solid black; padding-top: 5px;">補助金要望額（①+②-③）</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">千円</td> </tr> </table>		所要額①（施設整備費）	70,600	千円	所要額②（附帯工事費等）	29,000	千円	学内負担額③		千円	補助金要望額（①+②-③）					千円
所要額①（施設整備費）	70,600	千円															
所要額②（附帯工事費等）	29,000	千円															
学内負担額③		千円															
補助金要望額（①+②-③）																	
		千円															

1. 整備の必要性、緊急性

大分大学では、福祉を主題としつつ、地域に根ざした大学として教育・研究に取り組んでいる。これらの理念、実績を積極的に教育へ反映すべく、平成28年度の教養教育改革により、全ての開講科目をナンバーリングしカリキュラムの系統性を明確にすると共に、福祉・地域を主題とした授業科目群を新設し新入生には必修として履修させる計画である。また、平成28年度の福祉健康科学部の新設、教育福祉科学部の教育学部への改組により、一層地域と密着した授業が必要とされる現状である。

一方、今日的な大学教育の課題として、学生の主体的な学修を進め確かな学力と社会人基礎力を養成しなければならない。

これらの課題を克服し実効性のある教育を実施するためには、地域と教室をリアルタイムで結んだ授業形態が非常に有効であり、それを実現する教室の整備が必要である。さらにこのような学習活動で生じる多様な提出物を蓄積し的確に学修成果を評価するため、また学生の学修履歴を「見える化」し、教員が集団として学生を指導するための学修支援システムの改修が必要である。

2. 事業概要

本事業では、アクティブラーニングによる授業を実施する際に、教室と課題となる地域を、高品質なテレビ会議システムで電子的に結びつけ現場のリアルな映像を教室で再現し、その臨場感の中でグループワーク等でのディスカッションを通して課題解決の課程を学習する授業を展開する。

地域と教室を高品質の映像で結び現場での豊富な情報を教室に導入することは、より現実的な課題発見、問題解決を可能とする。システムを実施する事業である。具体的には、教育実習の事前指導において、大学にいながらリアルな授業参観ができること、福祉系の臨床場面では、地方の施設の介護場面等に大学から問いかけができるなど、擬似的な直接体験により学習を進めることができる。インターンシップの事前説明においても、現場の臨場感や担当者の直接の説明により、より実効性の高い指導が可能となる。同時に、教室内での学習活動の効果を高めるために一人に一つずつのデジタルペーパーを導入することで、情報検索、情報共有、ディスカッションの精度を高めさせる。このような学修環境を地域に出かけた先では構築することは不可能である。このフューチャークラスルームにおいて地域の良さと、教室の利便性とを同時に授業に取り入れることが可能となる。また、大勢の学生が一度に地域へ出かけることによる、準備と時間、費用の省力化をはかることができる。

このような授業においては、従来型の知識伝達型の授業のように学修成果を定型的に評価することは困難である。そこで、学生の授業活動による成果物を逐一集積し電子的なポートフォリオを作成し、それらを基礎資料として、教員や学生自身が学修成果を検証する仕組みが必要である。

そこで、本学が現在導入している授業支援システムを拡張・改修することで、従業科目に限られた学修評価を学生の履修課程を通した学修評価へと拡張した評価システムとすることで、学生の成長を検証することが可能となる。このシステムにより、一人の教員が単独で学生を指導するのではなく、教員集団がチームとなって学生を指導することが可能となり、学生に授与する学位

を実質化することができる。

3. 整備による効果

本計画に示した教室の整備により、地域課題に即した授業を臨場感を持って展開することができる。現場へ出向く学生にとっては、現場での対応力、教室と現場との情報伝達能力が鍛えられる。教室で学ぶ学生にとっては、現場からの情報を的確に把握し課題解決を解決する能力、教室内の学生同士や教室と現場とのコミュニケーション能力、情報分析の能力が育成できる。

大学の教職員にとっては、授業との関わりから地域の課題を具体的に把握する機会が多くなる。

結果的に教育を介しての大学と地域との結びつきが強固になり、地域のニーズに応じた学生の教育が一層進むことになる。

4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

高等教育開発センターにおける生涯学習関連業務は、第2期中期計画において本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、次の2部門において生涯学習社会の形成に関してのセンターとしての以下の業務をおこなった。

① 大学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放を推進する。

② 生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援する。

本年度は第2期中期計画の最終年次にあたり、本センターが平成22年度に策定した「連携GP等への取組及び地方自治体をはじめとする地域の関係機関との連携を進めるとともに、これらの取組を推進するための体制整備の方針」の定着と今後の発展をめざして、県民の生涯学習支援や指導者育成による地域づくりのため、学外の機関・団体・企業等と連携した県内のネットワーク、学内の教育機能のネットワークなどを拡充して高等教育機能を発揮する取組を行った。あわせて、学内外のネットワークの現状と課題について取りまとめるなどして、次期中期計画期間中の取組の方向性を検証した。

【平成27年度の主な取組】

(1) 部門会議第1回

日 時： 平成27年6月11日（木）13：10～13：45

場 所： 且野原キャンパス：教養教育棟会議室2

挾間キャンパス：第3会議室【遠隔会議システムを利用】

出席者： 岡田正彦（大学開放推進部門長）、中川忠宣（生涯学習支援システム部門長）、藤原耕作（教）、仲本大輔（経）、藤木稔（医）、橋本淳（工）各委員

欠席者： なし

議 題：

1. 平成27年度事業計画について（資料1-1）

中川生涯学習支援システム部門長から資料1-1に基づき平成27年度事業計画について説明があり、検討の結果、原案のとおり了承した。

2. 平成27年度公開講座及び公開授業について（資料1-2）

岡田大学開放推進部門長から資料1-2に基づき平成27年度公開講座及び公開授業について説明があり、検討の結果、原案のとおり了承した。また、公開講座講習料規程に基づき、公共性の高い講座、子ども向けの講座及び研究開発的性格を持つ講座に関しては、講習料を無料もしくは減額とすることを併せて確認した。

報 告：

1. 平成26年度事業報告について（資料2及び机上配布資料）

中川生涯学習支援システム部門長から資料2及び机上配布資料に基づき平成26年度事業実績

について報告があった。

2. 平成27年度アクションプランについて（資料3）

中川生涯学習支援システム部門長から資料に基づき平成27年度アクションプランについて報告があった。

その他：

中川生涯学習支援システム部門長から、COC+については現在議論が進んでいるが、その中で各学部に相談し、また協力をお願いすることがあると思うので、その際はお願いする旨発言があった。

(2) 主な事業

高等教育開発センターはこれまでに、県民の生涯学習支援と地域づくり指導者の育成を進めるための取組を支援してきた。そうした各種組織等が自立的・主体的に継続・発展して行う地域貢献活動や、学生や社会人の学びに関するモデル的な取組を協働して行うこととした。また、学内のシステム充実に向けた取組の1つの柱として、COC+事業をとおして部局間連携によるプログラムの開発に着手した。そのために、個人の自主的な学びへの高等教育機能の開放に止まらず、県民の地域貢献のための学びや、学生の生涯学習の基礎づくりとキャリア形成に関する学びなど、生涯学習と社会教育、その他の教育活動等の上に、教育制度全体として打ち立てる基本理念に立ち返り、「生涯教育」という概念からの大学開放の実践と研究を行うために以下の柱で事業を推進した。

①県民への高等教育機能の提供による生涯教育

これまで実施してきた個人のリフレッシュ・リカレント教育の推進としての公開授業、公開講座の学習機会の提供を継続し、県民自らの生きがい創出の支援をするとともに、第3期に向けた生涯教育システムの研究を始めた。

さらに、地域における活動を支援する間接的・地域貢献の1つの手法としての地域指導者養成の取組を継続するとともに、様々な地域課題に対応した指導者養成の在り方と養成プログラムの研究を始めた。

②県民と協働した学生の生涯教育の推進

COC+事業と関連付けながら、社会への入り口にいる学生が自主的な学びの必要性や喜びを学び、社会に出てからも生涯学び続けるための生涯学習の啓発と地域社会との交流の場づくりをおこないつつ、地域機能を活用したプログラムづくりを始めた。

具体的なプログラム開発としては、「自ら考え、判断し、実践する力」（キャリア形成）を育成するためのインターンシップ授業や、課題探求型教育（地域貢献活動や学習ボランティア等）としての日常的なボランティア活動のサークルを育成するなどの取組を行った。

③生涯教育に関する調査・研究

①及び②のためにCOC+事業と関連付けながら、大学開放を推進する学内体制の検討とプロジェクト研究をおこなうとともに、学生及び社会人の生涯学習を支援するための研究を進め、学びのネットワーク型プログラム等の開発を始めた。

【平成27年度の事業内容】

(1) 大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取組をおこなった。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する「主催講座」と市町村教育委員等と協同行う「連携講座」となっている。

平成27年度の公開講座は、前期7講座、後期14講座の計21講座（前年度：21講座）を実施し、受講者の合計は674名（前年度：778名）であった。

平成27年度公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数	申込者数
1	わかりやすく楽しい英語発音上達講座	大分大学内	6月5日～ 6月26日 (4回)	8	15	15
2	社会に役立つ数学	ホルトホール大分	8月19日～ 8月21日	4.5	26	33
3	泳げない子どもの水泳教室	大分大学内	7月28日～ 8月4日 (7日間)	21	85	93
4	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7月11日～ 8月29日 (7日間)	14	15	62家族 (125名)
5	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校内	8月8日～ 8月9日	6	37	87
6	将棋講座	大分大学内	8月17日～ 8月22日 (6日間)	12	57	158
7	手のひらパソコン「ラズベリーパイ」でコーダーデビュー（プログラム）してみよう	大分大学内	8月29日	1.5	12	13
8	遺伝子病としての「がん」	大分大学内	10月10日	1	30	事前受付 無し
9	がんのチーム医療	大分大学内	10月10日	1	20	事前受付 無し
10	からだに優しい「がん治療」 ーカメラ治療からロボット手術までー	大分大学内	10月11日	1	35	事前受付 無し

11	がんとピロリ菌 ー胃癌は予防できる？ー	大分大学内	10月11日	1	20	事前受付 無し
12	こどもにも発症する「がん」についてー成人との違いと治療成績の向上：ゼロから100%へー	大分大学内	10月11日	1	10	事前受付 無し
13	変わりゆく社会と地域経済のゆくえ	ホルトホール大分	9月24日～ 10月22日 (5回)	7.5	39	41
14	「教育の協働」推進のための公開講座（読み聞かせ：首藤富久恵氏講演会）	大分大学内	9月27日	2	41	46
15	地域協育コンファレンスinおおい	大分県立社会教育総合センター	11月13日	4.5	42	42
16	「協育」アドバイザー養成講座 上級編	熊本県阿蘇市	12月3日～ 12月4日	12/3-4 9時～17時	10	13
17	豊の国学 中央講座 リレー講演会	ホルトホール大分	12月5日	3.5	41	47
18	小学生ラグビー教室	大分大学内	H 28. 1月 31日～3月 13日(5回)	12.5	18	18
19	豊の国学 分野別講座 「第1回 豊の文化及び産業講座」	ホルトホール大分	2月20日	3	35	39
20	第9回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会	梅園の里	2月27日～ 2月28日	2/27 10:30～ 2/28 12:30	68	65
21	豊の国学 分野別講座 「第2回 豊の産業講座」	ホルトホール大分	2月28日	3	18	29

三公開講座に関する過去10年間の講座数及び受講者数の変化三

本センターの統合2年前（平成18年度）から統合8年後（平成27年度）の10年間の講座数及び受講者数を示したものが図1である。

子ども・家族対象の講座では、平成24年度のみの実施の「子どもサイエンス2012」の1,250名を除くと受講者数はほぼ例年どおりである。

しかし、平成25年度以降は、講座数及び受講者数共に減少して、3年連続して横ばい状態である。その要因の1つは、大規模な対象者数の講座を取りやめ、目的別な体験型の講座に変更したこと、2つ目は、佐伯市や大分市等との連携講座が終了したことなどが上げられる。

今後とも、県民の生涯学習機会の提供として継続して実施する講座に加え、実施目的を明確にしつつ高等教育機関の特性を活かした指導者養成や青少年の課題、健康づくりへの対応など、県民にとって有効で県民のニーズに応える講座の開設が必要であると考えている。

平成24年度から「とよの学びコンソーシアムおおい」の公開講座として開設している「豊の国学」は、中央講座と分野別講座を合わせて94名の参加があった。各学部からそれぞれ1名の教員を推薦して、大分大学からは4名の教員が講師として担当するシステムができあがった。

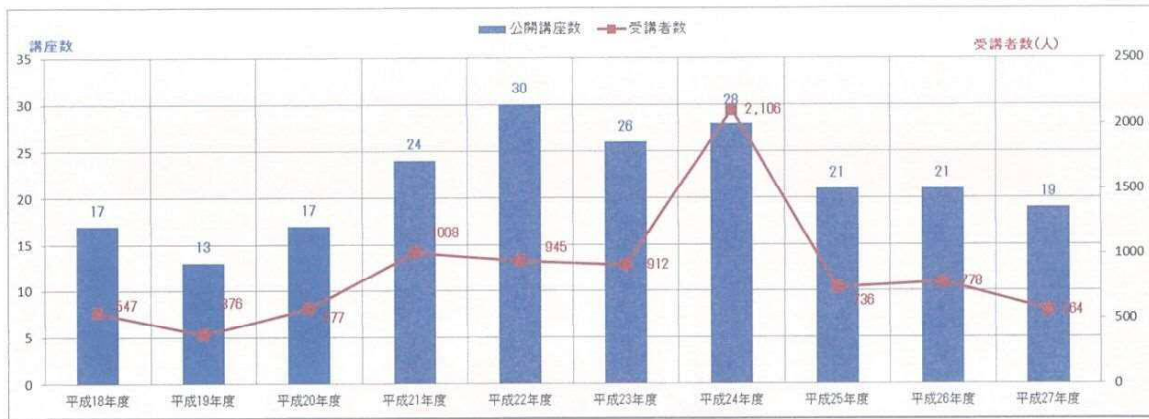


図1 過去10年間の公開講座の実施状況

とよのまなびコンソーシアムおおいた連携講座

豊の国学 中央講座

～リレー講演会～

様々な角度から「豊の国(大分県)」を見ていただくため、
豊の国の「人」「文化」「産業」「自然」についてのリレー講演(30分)を行います。

- ◆日時／平成27年12月5日(土)〈受付 12:30～〉 13時開会・17時閉会予定
- ◆会場／ホルトホール大分 302会議室(大分県大分市金池南一丁目5-1)
- ◆対象／一般の方(定員60名)
- ◆受講料／無料 ※ただし事前の申込みが必要となります。
- ◆申込締切／平成27年11月24日(火)必着 ※申込方法は裏面をご確認ください。

◆スケジュール

13:00～	開会行事
13:05～	人 ふるさとの音楽に貢献した人々 講師：大分県立芸術文化短期大学教授 小川 伊作 大分県は、各界に多くの先人を輩出してきましたが、音楽の分野も例外ではありません。今回の講座では、ふるさと大分の音楽に貢献してきた人々の足跡を、クラシック・ポップスを問わずたどりたいと思います。
13:35～	文化 大分県の中の朝鮮半島 講師：別府溝部学園短期大学学長 溝部 仁 宇佐八幡宮の出発点ともいわれる御許山と朝鮮・中津大貞八幡宮と朝鮮との関係や宇佐八幡宮最大の祭祀である行幸会と朝鮮について考察します。
14:05～	産業 大分県の電力事情 講師：大分工業高等専門学校教授 佐藤 秀則 豊の国と言えば海の幸・山の幸に恵まれていますが、これは食べ物ばかりではありません。大分県のエネルギー源は火力(LNG、石油、石炭、バイオマス)、水力、地熱、太陽光、風力、バイオマスと多様です。問題はどこにあるのでしょうか。
14:35～14:45	休憩
14:45～	産業 消費者の視点にたった街づくり —JRおおいたシティ開業でみてきたもの— 講師：日本文理大学准教授 今西 衛 大分は、JRおおいたシティ、県立美術館が開業し、街が大きく変わりました。一方で、大分の街は、消費者のニーズを満たしているのか？ヒアリングや調査結果を踏まえ、街づくりについて講義します。
15:15～	産業 地方創生と共生、協働 講師：別府大学教授 篠藤 明徳 「地方創生」が大きく取り上げられているが、産業創造が中心に論じられています。本講義では、社会の共生や協働の観点から「地方創生」を考えます。
15:45～15:55	休憩
15:55～	産業 少子高齢化に対応した大分県の産業とは 講師：立命館アジア太平洋大学副学長 平田 純一 日本全体で少子高齢化が問題とされだして久しい。大分県における少子高齢化の状況を全国で対比して比較したうえで、大分県における産業にこうした時代背景に即した産業は何かを考えます。
16:25～	自然 大分県の生物多様性 講師：大分大学准教授 永野 昌博 自然豊かな大分県。多様な生態系が存在し、多様な動植物が暮らしています。それらを活かし、守り、共に暮らしていくためにはどうすればよいかについて考えます。
16:55～	閉会行事



学と学の連携による知の総合交流拠点
大分高等教育協議会

とよのまなびコンソーシアムおおいた連携講座

豊の国学 分野別講座

「とよのまなびコンソーシアムおおいた連携講座」とは、大分県内の大学、短期大学及び高等専門学校などの高等教育機関が設立した「とよのまなびコンソーシアムおおいた」が主体となり実施する、大分県に関する様々な分野の専門的・学術的な教育内容等を連携・融合させた講座です。

専門的で、より高度な学習機会を提供することによって県民の生涯学習を支援することを目的として開講します。

今回の講座では、豊の国(大分県)の「文化」と「産業」について深く知り、更に学びを深めていただくために分野別の講演会を行います。

- ◆ 対象／一般の方(各回とも定員40名)
- ◆ 受講料／無料 ※ただし事前の申込みが必要となります。
- ◆ 申込締切／平成28年2月10日(水)必着 ※申込方法は裏面をご確認ください。

【第1回～豊の文化及び産業講座～】

- ◆ 日時／平成28年2月20日(土) 13:00～16:15
- ◆ 会場／ホルトホール大分2F サテライトキャンパスおおいた 講義室 (大分市金池南一丁目5-1)

① 日本の食 大分の食

● 講師：大分大学 平田 誠 准教授

日本人の伝統的な食文化である和食は、平成25年12月にユネスコ無形文化遺産に登録されました。食自身について考えるとともに、日本の食文化、大分の食文化の特徴についてその歴史を含めて解説します。

② 七島蘭プロジェクトと農工連携についての取り組み

● 講師：大分工業高等専門学校 小西 忠司 教授／松本 佳久 教授／菊川 裕規 准教授／尾形公一郎 准教授

豊の国大分に根ざして50年の大分高専ではアグリエンジニアリングの教育研究を推進しています。本講座では国東七島蘭の豊表生産プロジェクト事例および大分・オランダ・アメリカなどの先進的な農業生産調査結果を紹介し、農業と工業の連携について考えます。

【第2回～豊の産業講座～】

- ◆ 日時／平成28年2月28日(日) 13:00～16:15
- ◆ 会場／ホルトホール大分2F 201会議室 (大分市金池南一丁目5-1)

① 大分県の小児救急医療

● 講師：大分大学 穴井 孝信 教授

大分県で夜間・休日の小児救急医療が整備されているのは大分市と中津市だけです。大分市は大分こども病院、中津市は中津市民病院が担当していますが、その他の地域で夜間・休日の小児救急医療を整えることが難しい現状についてご説明します。

② 大分の地域とくらしを支える交通の問題について

● 講師：大分大学 大井 尚司 准教授

大分県内における「交通」の現状をお話するとともに、地域・くらしにとっての交通の重要性と、それをどのように「活かし」「持続可能」にしていくか、各地の取り組みを含めご紹介いたします。



学と学の連携による知の融合交流拠点
大分高等教育協議会

2) 公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各科目担当教員の意向調査および一部学部からの推薦にもとづき実施している。近年、新聞折り込み広告での取り組みを含め、多くの方の受講が行われている。今後は、個別の授業をバラバラに受講するだけでなく、公開授業の受講がまとまった内容の習得や社会活動につながることなど、より積極的な効果を生み出すよう工夫を行っていきたい。

平成27年度大分大学公開授業

前期

番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
1	生命観の変遷	1	27	国際関係論 I	1
2	現代天文学と生命	2	28	高分子化学 I	3
3	西洋美術史	1	29	英語 I	7
4	言語・外国語(独) III	0	30	言語・外国語(独) I	2
5	証券論	3	31	小学校外国語活動指導法	3
6	教養中国語 I	0	32	異文化間コミュニケーション論 I	1
7	環境物理学	1	33	東洋史特論 II	1
8	基礎中国語 I	1	34	応用英語 E	3
9	経済統計を読む	0	35	英語 II	2
10	比較経営史 I	1	36	EUの政治経済	0
11	電気化学	2	37	保険論 I	0
12	応用中国語 I	1	38	英語 II	1
13	金融論 I	6	39	音響工学	0
14	英語 I	7	40	身体表現基礎	1
15	体育学概論	3	41	応用中国語 I	1
16	英語 I	1	42	英語ゼミナール 9	5
17	哲学概論 II	0	43	中国史学緒論	4
18	臨床心理学	12	44	英語ゼミナール 16	6
19	古典文学特講	0	45	生涯学習論入門	1
20	地域芸術文化研究	0	46	基礎経営論 I	1
21	美学・美術史概論	1	47	政治経済学 I	0
22	科学技術コミュニケーション入門	0	48	国語(小)	2
23	文化人類学	2	49	東洋史概説	0
24	労使関係論	2	50	身体感覚の知覚演習	1
25	コミュニケーション能力の養成入門 I	1	51	システム L S I 設計特論第 1	0
26	衣生活論	2			

後期

番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
52	化学Ⅳ	0	76	英語Ⅰ（木）	4
53	基礎中国語Ⅱ	0	77	日本語学Ⅰ	1
54	クルマと社会の関わり	1	78	異文化間コミュニケーション論Ⅱ	0
55	中国文化論	5	79	言語・外国語（独）Ⅱ	3
56	言語・外国語（独）Ⅳ	0	80	生涯健康論	1
57	教養中国語Ⅱ	0	81	応用英語E	5
58	国語科学習材研究	1	82	グローバル化と政治経済	2
59	哲学概論Ⅰ	0	83	近代ドイツ文化論	1
60	基礎中国語Ⅱ	0	84	保険論Ⅱ	1
61	基礎中国語Ⅱ	0	85	英語科授業論	0
62	世界の教育	0	86	身体表現実習	0
63	比較経営史Ⅱ	2	87	ダンスⅠ	0
64	応用中国語Ⅱ	1	88	応用中国語Ⅱ	0
65	金融論Ⅱ	7	89	英語ゼミナール17	10
66	英語Ⅰ（火）	2	90	大学開放論-社会人の学びと大学生の学び-	0
67	臨床心理学演習	13	91	政治経済学Ⅱ	2
68	福祉と工学技術	1	92	基礎経営論Ⅱ	0
69	カラダの見方・考え方	2	93	表現形式総合論Ⅱ	0
70	海流とその研究	2	94	環境生物学Ⅰ	0
71	仕事と社会	2	95	英語Ⅰ（金）	3
72	成人教育方法入門	0	96	数値解析	1
73	コミュニケーション能力の養成入門Ⅱ	2	97	日本東洋美術史	4
74	国際関係論Ⅱ	2	98	国際健康コンシェルジュ養成講座	9
75	有機化学Ⅰ	0	99	知的財産基礎講座	2

a. 公開授業に関する過去13年間の講座数および受講者数の変化

本センターの統合5年前（平成15年度）から統合8年後（平成27年度）の13年間の公開授業数及び受講者数を示したものが図2である。

公開授業数は、平成20年度の98授業をピークに減少傾向であったが、平成23年度から4年間は100授業を超え授業を公開した。受講者数も平成17年度をピークに減少傾向であったが23年度は89名で過去最高に近づき、平成24年度から大きく増加している。しかし、平成25年度ピークに、公開授業数及び受講者数共に微減の傾向がある。

平成27年度の公開授業は、前期51科目（前年62科目）、後期48科目（前年53科目）で計99科目（前年115科目）となっている。また、受講生は前期・後期の合計108名（前年度：206名）であり、最近の4年の横ばいから比較して若干減少している。しかし、以前は受講者の集中化が見ら

れたが、近年は受講者の希望する科目に散らばっているという傾向が続いている。しかし、臨床心理学と英語の科目は他に比べて受講者が集中している。

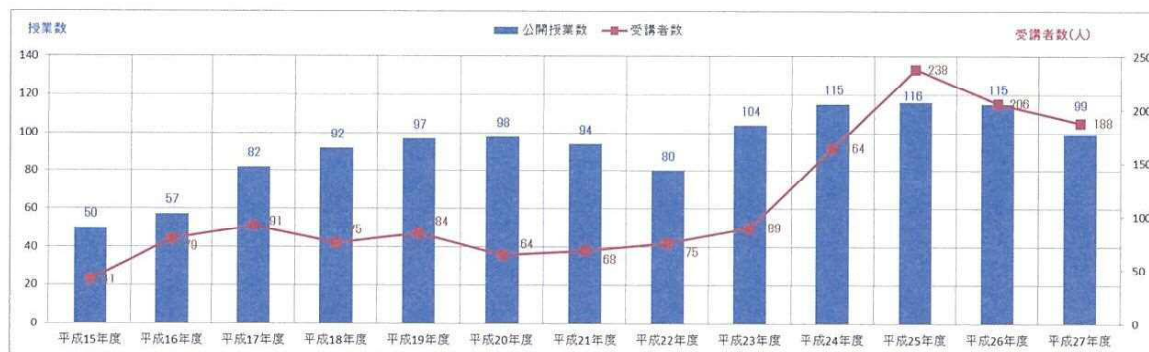


図2 過去13年間の公開授業の実施状況

b. 公開授業における先進的取り組み

教育福祉科学部（27年度当時）御手洗靖教授の「小学校外国語活動指導法」や「応用英語E」などでは継続的に受講する方が公開授業で学生の学びに積極的な役割を果たし、さらに自主的な研究会にも参加して学生の支援を行うなど新しい展開が生まれている。公開授業を社会人の学習機会として開設するだけでなく、公開授業を契機として伝統的學生との交流や授業の活性化が図られている事例として重要な動きと考える。今後公開授業に関しても単純に開設科目数や受講者数の増加のみを考えるのではなく、公開授業の実施が人分大学における教養教育・学部専門教育の活性化や質的向上に貢献するように取り組んでいきたい。

参考になる事例として、教育福祉科学部御手洗靖教授と受講生の一人である上田史江氏に公開授業を巡る取り組みについて寄稿をお願いした。以下に紹介する。

○御手洗靖教授の報告

①公開授業で社会人が受講することによる効果

（どのように社会人が授業に関わり、そのことが学生の学習に役立っているか）

私が担当している「英語ゼミナールE」（前期）、「英語ゼミナールF」（後期）では、次のような英語の運用訓練をおこなっています。教材を毎年変えるので、20数名の学生のうち、15名程度が単位不要の聴講学生で、多くは4年間で8回履修してくれます。今年は多様な話題を扱った会話形式の単語集を使用し、3つの話題につき、（1）から（5）を繰り返します。（1）指名された学生による音読に対する、教員による発音指導。（2）学生による音声的気づきの発表。（3）ペア形式で、教材の内容を自分の英語で90秒で相手に伝達。（4）教材の話題に関連して準備してきたことを、ペアで10分程度会話。（5）会話中に英語で言えなかったことの質問と教員による回答（高校までの既習事項を生かす考え方の指導）。（3）と（4）はスマホに録音して授業後に聞き返し、表現できなかつた1文とそれに対する自分の修正を電子掲示板に投稿して、それを教員が修正します。以前は1人5文だったのですが、今年は余裕がなく1文に後退しています。

社会人受講生は、学生に負けじと積極的に活動し、質問もしてきます。数値に表れた受講生への効果としては、TOEICのリスニングでどうしても取れなかつた満点を達成した、英検1級に挑戦し続けて学生と同時に合格した、というものがあります。数値以外としては、経済関係の

元大学教授が、英語に自信をつけて80歳でウイーンへ初めて一人旅をし、また、縁あってアメリカのコロンビア大学で尺八を演奏する機会を得たという例があります。このように、私のささやかな試みが人様のお役にたつのは嬉しいものです。

受講生が大学生に与える効果として3点をあげておきます。(1) 英語力が高いため、会話中に学生が英語表現の援助をしてもらえる。(2) 学び続ける姿勢や英語の「使用者」としてのモデルが、学生へのよい刺激となる。(3) ペア会話の相手が毎回変わるので、「誰とでも誠意をもって話す」という基本的な心構えが学生に身に付く。最後の点については、授業を通して社会的に変化したと語った学生がいました。このような人間的成長こそ、この授業の最大の教育的効果かもしれません。

②公開授業の枠を超えた社会人受講生の取り組み

私は、意欲のある学生のために英会話の会を開いており、「英語ゼミナール」を履修している受講生のうち、3名の方が参加しています。内容は、各自が話したい内容を持ち寄り、ペア形式でひとりが話題の中心となって、共同で10～15分会話を継続したのちに、役割を交代します。90分間で、2～3回相手を変えます。私の役割は、質問へ回答することと、参加者が奇数の時に会話相手となることくらいで、学生の自主性を重視しています。

この会の学生への効果としては、「英語ゼミナール」との相乗効果で話す力が高まり、教員採用試験の英語討論や英語面接で他の受験者に優り、現役合格へ結びついています。受講生への刺激としては、「NHKラジオ英会話」や「NHK実践ビジネス英語」の聴取や、話題作りに『週刊ST』の購読を開始した方がいらっしゃいます。また、ネット上の歌唱サイトで受講生同士や海外の方と歌ったりするなど、教室外の人間関係も形成しているようです。

「英語ゼミナール」にせよ、英会話にせよ、このような「学びの共同体」が成立している要因としては、まず、参加者全員の英語を話すことへの熱意があげられるでしょう。次に、参加者の人柄のよさがあると思います。学生は、向上心を持ち、礼儀正しく良心的です。受講生はやさしくユーモアがあります。英会話の会の3名は、昨年、保護者感覚で卒論発表会に参加してください、学生も私も感激しました。最後の要因として、学生も言っていることですが、異学年による集団構成の果たす役割が非常に大きいと思います。「先輩のようになりたい」という憧れ、「後輩に負けられない」というプライドと「後輩を伸ばしたい」という愛情により、肯定的な関係が生まれて、憧れていた自分が憧れられる側に成長するという好循環が代々受け継がれ、卒業後もその関係が続いています。実は、今年の1年生から教育学部に英語専攻がなくなり、意気消沈ぎみだったのですが、幸い、小学校専攻の学生が1名の英語ゼミナールと英会話の会に参加してくれたおかげで、元気を取り戻しました。大分大学で働ける間は、この小さな火を灯し続けられればと願っています。

○上田史江氏の報告

私は大分市在住の大学生2人、高校生一人の子どもを持つ主婦です。12年前から当時通っていた英会話スクールの先生の後押しもあり、自宅で英語を教えています。当時は小学生だった生徒さんたちも中学、高校と成長していくうちに英語の内容も難しくなってきました。自分自身の英語を上達させるために、自宅でTOEICや英検の勉強をしたり、英会話スクールに通ったり、英語学習者の集まる勉強会などに参加したりと試行錯誤していました。しかし、どれもどこか頭

打ち感がありました。この殻を突破するには海外留学しかないのではないかと。自分の年齢や状況を考えてそんなことは無理だし、こんなことなら学生の時にもっと勉強しておけばよかった。と燻った気持ちでいました。

そんな時、大分合同新聞で公開授業のチラシを見つけました。各学部からいろんな授業の参加が可能で、その中でも私が一番目を引いたのは、御手洗靖教授の英語ゼミナールでした。「人前で長いスピーチができるようになる人気の講座」と書いてありました。これからの英語は私たちが学んできた読み書きが中心ではなく、いかに自分を英語で表現できるようになるかという事が大切だと常々思っていました。私はその部分が特に自分の課題であると思っていましたし、大学のキャンパスへの興味もあり迷うことなく参加の申し込みをしました。とはいうものの、私の中では「大学生に混じって勉強するのって自分はわくわくするけど、大学生にとっては迷惑ではないか。」とか「大学生って勉強一生懸命やるのかな。」「日本人の教授って頭でっかちなイメージがあるし私が望むような成果って得られるのだろうか。」など疑心暗鬼の気持ちもありました。

授業の初日、私のそんな不安は一気になくなりました。授業内容は私が想像したものよりも格段に上でした。まず与えられたトピックの要約を90秒間で何語言えるかペアで数えあいます。その後、そのトピックについてお互いの意見を言い合い、わからなかった英語表現は教授に質問にします。また音声を注意深く聞くことも指導されていて毎回何に気づいたかを発表しています。常に英語でアウトプットをする事を要求され、90分の授業はあっという間に終わります。また参加するには予習は欠かせません。

この授業に参加してまず思うことは、御手洗教授の素晴らしさです。教授はあらゆるところに常にアンテナを張って英語を取り入れています。その引き出しは非常に多く生徒からのどんな質問にも答える事ができます。また、これから教師として社会に出ていく学生たちにどのような英語教育が必要かを生徒との絶妙な距離感をとりつつ親身に指導されています。私も、英語学習者として、英語を教えるものとして毎回の授業で学ぶことは多く、心にとまる言葉をいつもメモして読み返しています。

授業はペアワークで毎回違った学生さんとペアをくみ、いろんなトピックについて英語で話します。どの生徒さんも礼儀正しく私たちに接してくれます。また感心するほど熱心に勉強しています。私はこの講座に参加して3年目になりますが、学生さんたちの英語の上達には目を見張るものがあります。また、英語というツールを使って話すと思議なことにお互い素直な気持ちで話すことができるような気がします。出会った学生さんたちは皆素敵でまるで我が子のように応援したくなります。これだけ真摯に勉学に励んでいるので、きっと皆いい先生になると確信しています。

この講座のファンは私だけではなく、参加する社会人の多くがリピーターになっています。皆さんが共通して感じていることは、現役の学生と講義を受けることで知的刺激を受けると同時に競争心も刺激される。また商業主義の他の英語学校と違い大学という場所で良心的な受講料できちんとした講義が受けられる。学生にとっても社会人としての経験を伝える場所になるのでメリットがあるのではないかと。実際に、私はこの講座に参加して1つの目標であった英検一級に合格することができました。教授や学生さんたちと一緒に参加している社会人の方々から、たくさん気づかされ刺激を受けたおかげだと思っています。また、このような機会を与えてくれた大分大学にとっても感謝しています。これからも地元に開かれた大学で有り続けて欲しいと思っています。

3) 公開講座・公開授業収入

開講した授業・講座数及び受講者数の変化は前述したとおりであるが、平成24年度の工学部の公開講座などに見られるように、年度において特殊な場合があるために「受講料収入」で変遷を示したものが図3である。

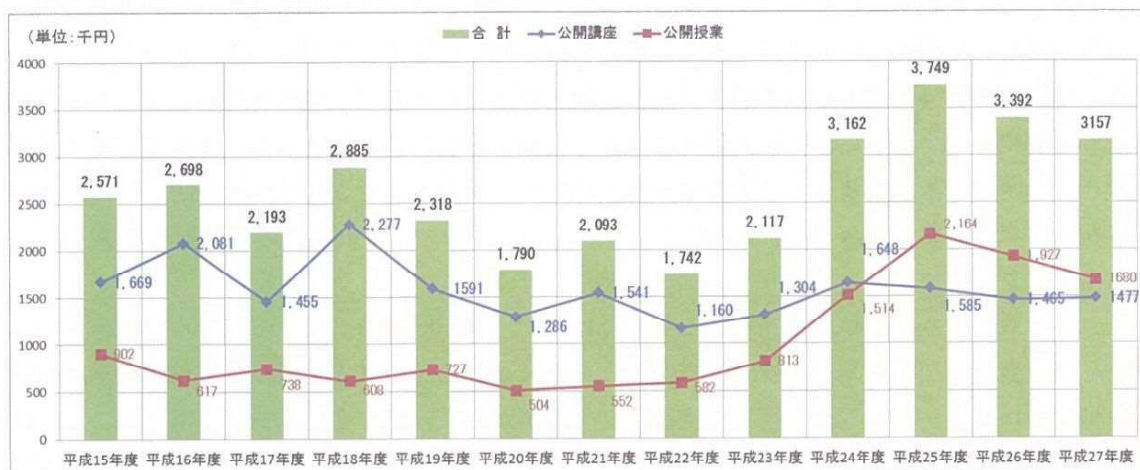


図3 過去13年間の公開事業収入の変化

平成19年度以降の減少要因は、社会のニーズに対応した指導者層の育成のための無料の公開講座の開設や青少年対象の低額の公開講座の開設等に伴うものであるが、受講対象者を指導者層や青少年等に拡大することにより、地域貢献を強くアピールすることができた。平成23年度からの収入の増加は、公開授業・公開講座とも開講数の増加もあるが、有料であってもニーズが高い授業の公開と広報の充実が大きく要因していると捉えている。しかし、平成25年度をピークに公開授業の収入が減少傾向である。

(2) センター主催指導者養成事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援をおこなった。

1) 生涯学習指導者研修事業

① 地方創生コンファレンス事業の受託・実施

27年度の取り組みとして、文部科学省委託「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」に「コンファレンスを契機とした取り組みを高めるサイクルのパッケージ化—地域における仕組み・システム開発と人的ネットワークの形成・機能高度化を目指して—」をテーマとして申請し採択された。この事業を申請した趣旨・目的は以下の通りである。

○地域の現状、学びを通じた地方創生コンファレンスの趣旨・目的

近年、西日本を中心に各地で社会教育に関する実践研究交流会が開催され、事例の蓄積や共有が図られつつある。しかし、これまでの交流会では、①発表した事例をさらに発展させるための

課題分析やその後の取り組みへの継続的支援が十分ではなかったこと、②発表された事例の成果や課題を自らの取り組みにどのように反映し活かすかは参加者に任せられ具体的な改善には必ずしもつながっていなかったこと、などが課題である。

学びによる地域力活性化が実効性を持つためには、交流会での発表やモデル事業が「点」として行われるだけでは不十分であり、交流会等での事例発表とそこでの課題分析、事後の取り組みおよびその後の省察に対する支援、さらに高めた取り組みに関する再度の発表、までをパッケージ化し推進する①「発表から取り組み支援、省察、再発表により取り組みを高めるサイクル」の形成が必要である。さらに、交流会等での発表を契機に、各地域での取り組みで共有可能な課題や視点を設定し、課題解決のための情報共有や相互の助言などを行う②「地域力活性化のための取り組み共有会議室」をネット上に立ち上げ、facebookグループでの投稿とその記事の事務局による整理（ブログで実施）により情報共有と発信を行う。

これらの取り組みは今年度に完結するものではなく、来年度以降、県や市町村、大学等が行う研修、交流会、モデル事業、調査研究事業などをそれぞれ関係づけて実施し、それに大学や高等教育機関のコンソーシアムが連携して支援する「発表から取り組み支援、省察、再発表により取り組みを高めるサイクル」形成の第1段階として実施する。

事業申請にあたっては、大分県教育庁社会教育課と大分県立社会教育総合センター、NPO法人大分県教育アドバイザーネットに連携を依頼し、以下のような役割分担で事業を推進することとした。

○コンファレンス事業における役割分担

- ・大分大学高等教育開発センター

事業全体の統括・進捗管理、第1回第2回コンファレンスの主催、取り組み支援の実施、取り組み共有会議室の運営、成果報告書の刊行、その他本事業推進にかかる業務全般

- ・大分県教育庁社会教育課

コンファレンスの共催、取り組み支援への参加、コンファレンスでの司会進行

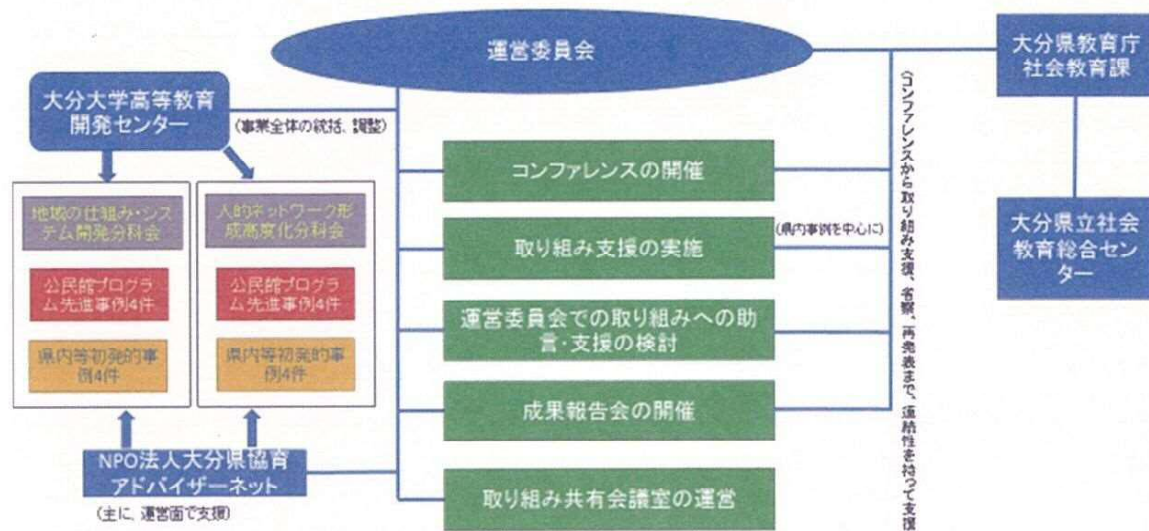
- ・大分県立社会教育総合センター

コンファレンスの共催、取り組み支援への参加、コンファレンスでの司会進行

- ・NPO法人「地域協育アドバイザーネット」

コンファレンスの支援（記録、写真、会場など）、シンポジストの派遣

取り組みを高めるサイクルのパッケージ化プロジェクト実施組織図



大分地区での取り組みは、第1回と第2回の2度にわたるコンファレンスを実施し、その間にそれぞれの事例の地域を訪問して調査と取り組み支援を行うこと、コンファレンスを単なる発表の機会とせず取り組みの評価と改善の機会と位置づけたことなどが特色である。実施した事業内容は以下のように進化した。

○事業の実施内容・方法

事業採択通知後、まず事例発表をお願いする自治体の選定・依頼を行った。基本的には「公民館等を中心とした社会教育活性化事業（公民館G P）」に参加してすでに一定の進捗がある事例と、県内事例を中心にこれまでの実績よりも取り組みの構想が優れていると考えられる事例宛に分けて候補を選定し、交渉した。その結果、公民館G Pに採択されていた事例3事例、採択されていない事例5事例を選定した（大分県内4事例）。

大分地域のコンファレンスは、①協議を行うことを重点と考えたこと、②県内事例を中心として事業終了後も継続的に支援が行えるように計画したこと、から大分県内を中心に、次に北部九州を中心とした広域に広報を実施した（大分県や県内市町村など県内に約350部、九州内各県教育委員会や他地区コンファレンス実行委員会、全国国立大学生涯学習系センター協議会加盟校など県外に約350部送付した）。また、学長記者会見で、コンファレンスの実施について広報した。

第1回コンファレンスは、11月13日（金）13：00～17：40の日程で、本事業に協力いただいている大分県立社会教育総合センターを会場に開催した。地域での取り組みのキーになるのはやはり取り組む人々や組織を結ぶ人的ネットワークであることを考慮し、「地域のは組み・システム開発分科会」と「人的ネットワークの形成・機能高度化分科会」の2分科会を設定し、市町の取り組みについてじっくり協議した後、シンポジウムでそのような市町の取り組みを支援する県立生涯学習センターの役割や人的ネットワークの形成、地域での仕組みづくりについて協議した。

12月に入ってから各自治体と日程調整を行い、年明けから2月上旬までに8事例すべてを訪問して訪問調査を行った。最低90分、最長4時間をかけて、協議を行い、第1回コンファレンスで設定した課題を確認した後、その課題を解決するための取り組みを検討した。また、自治体によっては、実際の取り組みの見学もさせていただいた。大分地区でのコンファレンスは、人的ネット

ワークや地域の仕組みづくりなどどちらかといえば目に見えにくいものを中心に上げていたが、長門市の油谷小学校で玄関近くに作られていた地域交流室や広島県立生涯学習センターの研修と連携して企画実施された廿日市の市民センター職員研修の様子など建物や研修プログラム自体の具体的な条件の設定も重要であることを改めて感じる機会となった。

訪問調査に加え、その後訪問調査の内容を文書にまとめたものを事務局で作成し、それを各自治体で確認、加筆修正していただくことで、訪問調査の内容・成果に関する協同しての振り返りが有効に行えたことも重要であった。

第2回コンファレンスについても、第1回と同様の理由で同じ範囲への広報を行い、人数が少なめでも内容の濃い協議ができるようプログラム上も工夫を行った。

第2回コンファレンスは2月27日（土）10：30より28日（日）12：00までの日程で、大分県国東市安岐町の梅園の里を会場に実施した。第2回コンファレンスについては、福岡県立社会教育総合センターで長年行われてきた「中国四国九州生涯教育実践研究交流会」とこれまでも連携して実施してきた「地域発！『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」と重ねて実施することとした。大分地域での意欲的な取り組みに関する発表の場をさらに広域の取り組みである「中国四国九州生涯教育実践研究交流会」と連携して位置づけようという視点からこのような設定とした。

午前中からの長い時間を確保したため分科会方式にはせず、参加者みんなで発表内容を共有し、協議を行った。事例発表では、第1回コンファレンスで設定した課題とその後の訪問調査を踏まえ、今後の取り組みの展開について発表していただいた。その後のシンポジウムでは、①人的ネットワークを形成するコツ、②部署などの壁を越える連携・協働を行うために必要なこと、③有効な振り返りを行うために心がけること、④地域での仕組みづくり、などについてヒントや気づきを共有した。2日目のエクスカージョンでは、世界農業遺産に選定された国東地域の椎茸と七島藺の栽培を取り上げ、見学・実習を行った。

このようなコンファレンスと訪問調査の取り組みと並行して（あるいは後続して）実際の取り組みについて相互に発信し、意見交換し、取り組みの知恵を集積するFacebookページおよびブログを作成する計画であったが、これについては全体のスケジュールが余裕のないものになったこともあり、第1回・第2回のコンファレンスと訪問調査について報告する事務局サイドの記事のみをFacebookにアップするにとどまった。これについては、28年度に入って具体的な取り組みの進展について情報発信をし、交流や協議を行っていただけるよう大分大学として継続的に支援を行っていく計画である。

取り組みをおこなった結果、参加していただいた自治体等の担当者からは、参加した意義・メリットについて具体的な指摘をいただくことができた。文部科学省への報告書で提示した事業の成果と課題は以下の通りである。

○成果

大分地区で実施した「地域協育コンファレンスINおおいた」は、冒頭でも述べたとおり、前後2回のコンファレンスの間に訪問調査による取り組み支援（課題解決のための取り組みのデザインに関する協議）を組み入れ、①発表の機会の中で以降の取り組みの課題を設定し、②課題解決のための取り組み（設定する目標や取り組みの内容・方法・スケジュールなど）を自治体とコ

ンファレンス事務局が協同で検討し、③自治体が課題解決に取り組んで上で、④再びコンファレンスで発表する、という取り組みの継続的支援プロセスの形成を意図していた。

実際のスケジュールでは、実際に課題解決にあたる時間を十分に確保できず、課題解決のための取り組みをデザインした時点で第2回のコンファレンスを迎えることとなり、その発表内容は取り組みのデザインと今後の展望を中心とするものになった。その意味では、大分地区のコンファレンスがどの程度効果のあるものになったのかは、各地域での今後の取り組みの成果に俟つ部分が多い。

しかし、現時点で確認できる成果も色々と指摘できる。まず、積極的・主体的に取り組みを進めており、自らの取り組みについての分析ができている自治体の担当者同士が集まれば、かなり具体的なレベルで互いに同意し共感する気づき（地域の組織の現状や取り組みの意義、巻き込むことが難しい人々などについて意見は一致し、地域や取り組みのテーマを超えた同意や共感を持つことができた）を事例発表やシンポジウムでの協議の中で共有することができた。また、そのような協議の場で、論点を整理したり、視点を変えたり、構造化して協議をリードする研究者の関わりの重要性も、一般参加者を含めて共通して感じていただくことができた。

本コンファレンスでは、第1回第2回ともに、それぞれの発表について20分と長めの協議時間を設定した。しかし、実際には20分でも時間は十分ではなく、それぞれの関心に基づく個別の質問・意見に加えて、共通の分析軸を設けて協議する「深め型」の協議の時間を持つことの必要性に気づくことができた。それでも、参加者からは事例発表あるいは協議の中で、職場に持ち帰ることのできる具体的な気づきをたくさん持つことができた旨声を掛けていただいた。

○課題

大分地区のコンファレンスで実施した内容が今後様々な地域で有用なモデルとして用いられるためには、発表（研修）・課題設定・課題への取り組み（取り組み支援）・再発表（再研修）という一連のサイクルの有用性を、具体的な事例の証拠とともに、確認し、発信していく必要がある。コンファレンス事務局としての大分大学は、今後も県内事例を中心として今回参加いただいた自治体の支援を継続的に行っていく計画であり、最終的には、大分地域における発表や研修の場がそれに伴い様々な取り組みとその支援につながり、その取り組みを再び発表するというサイクルを形成することが目標である。言い換えれば、発表（研修）しては実践しその実践を再び持ち寄って発表（研修）し合うサイクル、学びと実践の循環的関係を構築することが最終目標である。

しかし、このようなサイクルを形成するためには、ただでさえ忙しい業務の中で、何とか時間を捻出して発表や研修の場に参加し、その後も継続的に取り組みを行い、取り組みの振り返りをした上で再度の発表（研修）に臨むという労力を厭わない職員が必要である。実際には、2回とも研修に参加するだけでも簡単ではないという職員が多いのが実情である。ましてや、詳細で具体的な情報の持ち寄りにはさらに時間をかけることが必要になる。それだけの労力をかけても参加する価値のある発表（研修）の場を形成して発信する必要がある。また、その側面的支援として職場でも可能な情報のやりとりや共有のためにICTの活用（メールによる個別協議やSNSによる情報の共有・蓄積など）も有効であろう。

○今後の取り組み発展に向けて

今回、コンファレンスを実施させていただいたことで、以前から感じていた社会教育の取り組みの課題についてより明確に感じることができた。多くの社会教育関係者は、取り組みを行う上で十分な情報や人的ネットワーク、仕組みを持っておらず、何か新しい取り組みを始めるときには、一から情報を探り、手順を考え、プログラムを企画する必要に直面するケースが多い。実は、先導的な取り組みを行った経験を持つ職員や研究者とつながれば、あまり悩むことなく効率的にこれまでの先行事例を参考にして取り組みをデザインし、その後の展開を予想することができる。社会教育関係職員の研修も、定型的な知識の伝達はなるべく別途行うようにして、参加型学習を基軸に、情報や事業を進めるための具体的情報の共有を中心とした「またぜひ来たい」、「具体的に持ち帰るものがある」、「次回までにこの点について実践してこようと考える」研修へと変革していく必要がある。

また、大分地区がこだわっている発表と実践、再発表のサイクルも、抽象的には誰もが必要と感じていることであるにもかかわらず、実際にはなかなか実現できていない事柄である。多忙な業務の中でも効果的な振り返りを行うための場を確保すること、定期的な実践を持ち寄り分析や取り組みへの提案を共有できる場をさらに整備すること、職場に帰っての実践が孤立したものにならないよう、なるべく継続的に取り組み支援が利用可能な環境を整備すること、少子高齢化や過疎化などの問題に直面しながらも前向きな捉え方・活動に持って行くための視点、このようなことが必要であろう。

都道府県や市町村の取り組みが継続的に発展し、地域を元気にして活力を生み出せるように、大学としても効果的な支援に取り組んでいきたい。

a. 第1回地域協育コンファレンス I N おおいたの開催

第1回地域協育コンファレンス I N おおいたは、これまでの公民館 G P での取り組み事例に加えて、県内を中心とした今後意欲的に取り組みを行おうとしている事例についても参加していただき、取り組みの成果と課題を報告し、27年度後半の取り組みの方向性を提案することを中心に開催した。

コンファレンスは、分科会とシンポジウムの2部構成とした。また、終了後には希望者の参加による情報交流会も設定し、夜の部も含め熱い協議がたっぷり行えるように配意した。本コンファレンスでは、地域での取り組みにおいて個別の取り組みをばらばらに支援するのではなく地域での仕組みやシステムを整備する必要があること、また地域での取り組みのキーになるのはやはり取り組む人々や組織を結ぶ人的ネットワークであることを考慮し、「地域の仕組み・システム開発分科会」と「人的ネットワークの形成・機能高度化分科会」の2分科会を設定した。

第1回地域協育コンファレンス I N おおいたの概要は以下の通りである。

日 時： 平成27年11月13日（金）13：00～17：40

場 所： 大分県立社会教育総合センター（大分県別府市大字別府字野口原）

主 催： 大分大学高等教育開発センター

共 催： 大分県教育委員会社会教育課，大分県立社会教育総合センター，NPO法人大分県協育アドバイザーネット

プログラム：

- 13:00 開会行事・趣旨と進行の説明
 13:30 分科会（それぞれ事例発表25分協議20分）
 16:10 シンポジウム「学びを通じた地方創生を実現する人的ネットワークの形成と仕組みづくり」（16:10～17:30）
 17:30 今後の進め方についての説明・閉会行事（17:40終了）
 （夜に別府市内で情報交流会を開催）

（1）分科会

分科会は「地域の仕組み・システム開発分科会」と「人的ネットワークの形成・機能高度化分科会」の2分科会で実施した。

本コンファレンスでは、一方的な発表を参加者が聞くだけでなく、その後時間をかけて詳細に事例に関する質疑や意見交流を行うことで、発表者・参加者が共に以降の取り組みに対する示唆をなるべく具体的に得ることを狙いとしていたので、発表25分に対して協議20分と協議の時間を多めにとったのが特徴である。

以下にそれぞれの分科会の発表事例について示す。

○地域の仕組み・システム開発分科会

「地域協育ネットとセミナー事業による地域づくり」

山口県長門市油谷中央公民館 館長 山本 幸範 氏

「まちづくり協議会方式による公民館（コミュニティーセンター）を中心とした地域づくり」

大分県中津市教育委員会社会教育課 生涯学習推進室長 山本 健吾 氏

「公民館が地域づくりにどのように関わるかー由布市の旧3町の取り組みの経緯を受けてー」

大分県由布市教育委員会社会教育課係長（社会教育主事） 長谷川 美由紀 氏

○人的ネットワークの形成・機能高度化分科会

「青少年センターとNPOの連携によるICTを活用した教育支援事業」

愛知県犬山市役所教育部社会教育課課長補佐 山本 直美 氏

NPO法人いぬやまe-コミュニティネットワーク事務局長 向田 邦江 氏

「Made in Usaを知って学ぼう、楽しもう」

大分県宇佐市民図書館司書 島津 芳枝 氏

「『地域の子どもは地域で育てる』若宮放課後子ども広場～大人も育つ地域の取り組み～」

大分県日田市公民館運営事業団事務局 濱田 宗則 氏

（2）シンポジウム「学びを通じた地方再生を実現する人的ネットワークの形成と仕組みづくり」

シンポジウムでは、分科会での事例発表を受け、そのような取り組みを広域で支援する都道府県単位での取り組みを事例として取り上げながら、人的ネットワークの形成と仕組みづくりについて検討した。

事例発表を行ったシンポジストは以下の2名である。

「地域課題対応研修支援や施策立案研修などを中心とした県立センターによる市町の取り組み支援」

広島県立生涯学習センター 社会教育主事 大名 克英 氏

「県立施設－市町行政－公民館等が協働する『課題解決支援講座』による地域づくり

佐賀県立生涯学習センター（アバンセ） 企画主任 北村 恵理子 氏

シンポジウムにはこの委託事業の協力委員である青山学院大学の苅宿俊文教授にも参加していただき、貴重な示唆をいただいた。取り組みの中に気づきをデザインすること、結び目（knot-work）を作ること、シーンからエピソード、ストーリーへ発展させることなどである。なお、コーディネーターは大分大学高等教育開発センターの岡田が担当した。

分科会とシンポジウムでの協議を通じて、以下の点が明らかになった。

○協育コンファレンスで明らかになったこと

- ・意欲的につながりを作り取り組みを展開すれば、地域はそれに応えてくれる

発表していただいた事例は、どれも公民館や教育委員会の内部のみで取り組みを進めず、意欲的につながりを作り出し、連携・協働によって単独では作り出すことが難しい事業性かを生み出していた。また、そのような働きかけを行えば、地域住民や地域の組織など地域の側にもそれに対応し協力する、あるいはより積極的に取り組みをリードしたり広げたりするなどの動きがすでに生まれている。社会教育の側から積極的にそして戦略的に働きかけることが重要である。

- ・つながりを作る（結び目を作る）ことが社会教育の主たる役割である

社会教育の限られた教育資源（人、予算、時間）を投入する上で、取り組みを自己完結的に社会教育サイドで担当することは有効でない。社会教育は実際の講座等の運営にもまして、社会教育ならではの広い人的ネットワークを生かして人と人、組織と組織を結びつけることに力を入れることが望ましい。

- ・有効な振り返りによって取り組みがさらに発展する

意欲的な取り組みを行っているときでも時間は不足しがちではあるが、それでも時間と手間をかけて振り返りを行いそれを具体的な改善につなげることができている取り組みは、取り組みの発展が実現できている。

○今後さらに取り組みが必要なこと

- ・水平的拡大（巻き込み）と質的向上（深化）

取り組みをさらに発展させるには、現状よりもさらに協力・参加してくれる人（組織）を増やして取り組みの拡大や巻き込みをはかることも重要である。同時に、取り組みの段階的展開方策を検討し、取り組みを支える仕組みを形成することで取り組みの質的向上野心家をはかることも重要である。

- ・情報発信やエビデンスの確保など取り組みと並行する業務の充実

一生懸命取り組みを行っているときほど、それを広く情報発信したり、事業性かを証明するエビデンスの収集を忘れていたりしがちである。この部分についてこれまで以上に強く意識して取り組むことが必要である。

b. 第2回地域協育コンファレンスINおいた（第9回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会）の開催

第1回地域協育コンファレンスの後、ご発表頂いた8事例について、それぞれ現地を訪問し、第1回コンファレンスを受けた今後の取り組みの計画や課題解決の方法などについて意見交換を行った。訪問調査を終えた後、あまり期間を空けることができなかったが、取り組みの総括と今後の取り組み計画の発表を目的として第2回コンファレンスを実施した。第2回コンファレンスの概要は、以下の通りである。

日 時： 平成28年2月27日（土）10：30～28日（日）12：00

会 場： 梅園の里（大分県国東市安岐町富清2244）

主 催： 大分大学高等教育開発センター 東国東地域デザイン会議

共 催： NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット

NPO法人幼老共生まちづくり支援協会

協 力： 大分県「協育」ネットワーク協議会 大分県生涯教育学会

プログラム：

27日（土）

10：30 開会行事

10：50 実践事例発表（昼食休憩をはさむ）（大分県中津市，大分県日田市，大分県由布市，愛知県犬山市，広島県立生涯学習センター）

15：30 シンポジウム「まちづくりと人づくりを進める社会教育施設」

28日（日）

8：30 全体総括

9：00 エクスカーション「世界農業遺産の世界」（12：00閉会）

第2回コンファレンスでは、1日目の前半に実践事例発表を行い、後半にシンポジウムを行った。2日目には「世界農業遺産の世界」というテーマでエクスカーションを行った。それぞれの概要は以下の通りである。

（1）実践事例発表

1）中津市

中津市今津地区では、平成26年にまちづくり協議会を設立し、詳しく本音を引き出すワークショップから取り組みをスタート。その後部会ごと（総務部会，環境衛生部会，児童・生徒部会，協育部会，イベント部会，福祉部会）に取り組みを進めてきた。

取り組みを進める上で課題となったのは、地域づくりにおける4つの差があることであった。①世代の差（地域づくりへの参加に世代による差がある。40代以下の世代の参加が課題），②地区の差（コミュニティセンターの近くの地区は地域づくりのイベント等への参加が活発であるが、遠い地区は低調），③居住時間の差（昔からずっと地域に居住している人と外で働いて（暮らして）いてUターンしてきた人とで考えや関わりの差がある），④立場の差（務めている役職や所属している組織などの立場による違い）。

今後の取り組みでは、まちづくりに取り組んでいる3つの協議会（公民館運営委員会、まちづくり協議会、校区ネットワーク会議）をうまく統合して効果的に取り組みを進めていく必要がある。コミュニティセンターの視点で見れば、館長が公民館運営委員会とまちづくり協議会の事務局を担当しており、また校区ネットワーク会議でもコーディネーターを担当している。また、それぞれの組織のメンバーにも重複が多い。会議が重複して不必要な時間がかからないように、また協議内容がしっかり共通理解されるように、3つの協議会の役割などを整理して将来的には統合していきたい。

協議では、コミュニティセンターに名称変更した理由（市長の思いもあり、補助金などの関係もあって改称したが、事業内容としては公民館として運営している）、人権学習としてどのようなプログラムを実施しているか（コミュニティセンターが、高齢者、女性、幼児の保護者など対象別に実施している）、コミュニティセンターと従来からの組織との関係（コミュニティセンターが中心となつてつないでいく。コミュニティセンターの部会と従来からの組織との関係を整理していくことが課題である）、などの点について協議が行われた。

2) 日田市

発表予定の方が急病で欠席されたため、コンファレンス事務局が代理で発表を行った。11月の発表内容と2月の訪問調査の内容を振り返り、今後の取り組みの方向性について提案した。

若宮公民館では、平成26年11月から「若宮っ子サポート講座」を実施しはじめ、27年度は初めて年間を通じた活動に取り組んでいる。取り組みの中で、親子参加の講座を始めて実施したり、講座実施後に振り返りを行って後続の活動に反映させたり、サポーターの中でキーになる人が出てきたなど、成果が出てきている。

訪問調査で確認した課題としては、発展性を持たせるためにシリーズ化する講座も検討する、男性サポーターを増やす、地区を越えたつながりを作る、個別対応が必要な子どもへの取り組みを行う、などの点が示された。また、今後は公民館区を超えて、日田市全体でこのような取り組みを進めるためのシステムづくりや情報共有なども必要であることを報告した。

協議では、隣の地区や周囲の人を知らない、先生も地域と関わっていない地区が、県事業での取り組みをきっかけに、「何かできることがあれば」というように雰囲気が変わってきており、さらに仕組みづくりが必要だということが指摘され、日田祇園が世代間で交流するよい機会となっており中学生などがそれに参加することで地域の活性化が図られている、等の発言があった。

3) 由布市

由布市には条例公民館が5館ある。その内3館は中学校区の公民館でエリア的にかなり広くの圏域をカバーしており、利用者の視点では日常的に利用することが困難な面がある。また、従来小学校区に公立公民館が設置されていない地区について新設することは難しい状況にある。このような判断から、由布市では、自治公民館に焦点化し、その活動を活性化する取り組みを行ってきた。

自治公民館活動の活性化に向けては、旧3町（湯布院、庄内、挾間）での公民館の取り組みが異なることも考慮に入れつつ、公立公民館が自治公民館を支援する仕組みづくりも行っていく必要がある。

協議では、地域のあきらめムードを前向きに替えていくためにどのようにしたらよいかという

点で協議が行われ、人材育成、特に若い人(30代～50代)に興味を持ってもらうこと、大人になってからではなく子どもの時から地域に関わり地域の一員としての意識を持ってもらうこと、等の発言があった。また、子どもに働きかけ、子どもの参加を親や地域の参加に結びつけていくことが有効である等の指摘があった。

4) 犬山市

犬山市ICT講習会などでの連携を背景に、犬山市役所教育部社会教育課（青少年センター）とNPO法人いぬやまe-コミュニティーネットワークが連携し、平成25年度から公民館等を中心とした社会教育活性化事業（文部科学省委託事業）の中で取り組みを展開しており、今年度は単独事業として取り組みを継続している。

事業を統括する行政と専門性を活かして実施にあたるNPO法人の連携により、福祉課、ハローワーク、適応指導教室「ゆうゆう」、大学などと多様な連携が形成されている。将来的には、福祉、保健・医療、教育、雇用、地域など多様な領域をつなぐ取り組みに発展させていきたい。

就労支援、不登校児童対策、親子対象のロボット塾、と3つの事業を実施してきた。そのなかで、子どもの苦手を改称することではなく得意な部分を伸ばすことに集中して取り組みを行っている。事業実施後は報告書を作成してその内容を共有することによって講座の質的向上を図っている。またSNSで情報共有を行い、その履歴をマニュアルとして活用している。

課題としては、カリキュラムモデルの情報発信とネットモラル教育。カリキュラムモデルの発信については、犬山市生涯学習情報サイト「まなびナビ」や、NPO法人いぬやまe-コミュニティーネットワークHP等で進めている。ネットモラル教育については、情報端末を使いこなすことが必須になる将来の社会に向け、「自分がされて嫌なことはネット上でもしてはいけない」など基本を徹底して伝えていく。

5) 広島県立生涯学習センター

広島地域の取り組みの基本的方向としては、高齢になってからではなく若い内から地域に関わることができるように、支援を行っていく。研修については、出向いての研修を展開し、参加型学習のプログラムを増やしていく。

第1回コンファレンスと訪問調査を通じた気づきとしては、目に見えない潜在意識を知るためのオーダーメイド型研修が必要なこと、エピソードやシーンを残す取り組みを行うことで類型化・パターン化を行うこと、研修のプロセスやノウハウを明らかにする取り組みが必要なこと、などが短期的な課題として意識された。また、中長期的課題としては、中核となる職員の専門性の向上に取り組む必要について市町の理解を得る必要がある。

研修でプログラムを計画し、それを担当の市町で実施した後に再びそれを振り返る研修を行う「施策立案研修」に参加した廿日市市平良市民センターの山本氏から施策立案研修とそれを受けて地元で実施した市民センター職員研修（参加型学習による職員研修で参加型学習のプログラムを企画するという内容）の報告があった。廿日市市の市民センターでは事業企画の中心となる専任職員が一人体制のため、研修などに出かけて参加するのも難しい状況がある。そこで、研修自体を参加型のものにしつつ参加型学習のプログラムを企画する体験を共同で行い、自分の業務に反映できる実感が持てるような内容の研修を行い、今後職員同士でピア・サポートができる体制づくりを目指した。

このような研修を含め、広島県立生涯学習センターとしては、県が担う研修と市町が担う研修の連携・協働を行いつつ、さらに研究者ネットワークとの連携も行うことで、「学んだこと」や「学んだ人」が好循環する仕組みづくりを目指す。

(2) シンポジウム

シンポジスト：

九州共立大学スポーツ学部教授・生涯学習研究センター長 古市 勝也 氏

広島経済大学経済学部教授・広島県立生涯学習センター生涯学習推進マネージャー

志々田 まなみ 氏

NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット事務局長 安達 美和子 氏

コーディネーター：

大分大学高等教育開発センター准教授 岡田 正彦

シンポジウムでは、以下の4つの視点で協議を行った。内容について簡潔にまとめる。

①取り組みの中での人的ネットワークの形成

- 大学が地域とつながる（社会貢献、地域貢献、地域コミュニティの中核になる）取り組みが各地で展開されている
- 社会教育では以前から連携・協働を行ってきたが、地域をめぐる状況は厳しくなっている
- 気の合う仲間とつながり、そこでの取り組みを通してつながりが広がっていくというモデルが重要（北九州市折尾では、堀川サミットから様々な展開へ）
- 人的ネットワークを形成するには、つながることにより守りあう助け合う部分が重要
- つながり助け合う関係に加え、リーダーシップを引き受けて推進する立場（例えばまちづくり協議会）が重要で、そこで協力しつつ成熟させていく関係に持って行くことが必要
- 互いに異なる得意分野を生かしてつながる
- たとえば、温泉コンシェルジュ養成に携わった色々な組織とつながれたのは、人と人の信頼関係が基盤

②様々な組織との連携・協働を実現させるために

- スポーツ学部の地域貢献は何ができるかを考えるために、スポーツ学部を持つ九州の3大学で連携し、スポーツによる介護予防プログラムを企画した
- 学内ではかかわりの深い先生に声をかけてプロジェクトチームを作った
- 学外では、社協など多様な組織と共催の関係を作った
- 当初関係作りがうまく進まなかったが、既知の人からつないでもらうことでスムーズに連携関係が作れた
- 互恵性のある関係が重要
- 広島県では23の市町と仕事をしている。いい研修をすればたくさん来てくれると考えて研修の工夫をしていたが、自分が移動して大変だった経験からお届けする研修を行う気になった
- 参加する人にもいろいろな人がいる（やる気のある人・ない人、自信のある人・ない人）
- やる気も自信もある人はリーダーになってもらう
- やる気はないけど自信はある人はうまく勧めて講師などしてもらう
- やる気はあるけど自信はない人は支援の対象になる人（研修に参加する人）

- コンシェルジュ講座の時大学教員を当てはめる際に公民館での勤務経験が大変役に立った
- ③有効な振り返り（評価）をおこなうために
 - 領域の近い教員4名でプロジェクトチームを作ったのが、安心感など大きかった
 - 3名から7名くらいの中核メンバーがいることが重要
 - 人に評価されるより自己評価をとことん考えて言葉にすることが重要（評価の言語化）
 - 客観性を付け加えるためには一緒に頑張らなければならない関係者による評価が有効（たとえば、研修受講者の上司に受講後の変化を尋ねるなど）
 - 脅かされる評価ではなく、前向きになれる、具体的に改善につながる評価が重要
 - 信頼できる仲間で評価を共有すること、字に書くこと、意識的にそのような場を設けることが重要

シンポジウムでの協議、翌日の全体総括の中でも様々な提案が行われた。

- 地域づくり・人づくりに関わってもらいたい人をどのように組織していくか
 - 高校生や大学生の参加をイベントをきっかけに導く、中学生にジュニア・リーダーとして活動してもらい、総合学習の時間などをきっかけとして活用する、若い世代の人の中でもどのグループの人なら参加してもらいやすいか研究する
- 研修と学び、ネットワークづくりをセットにして展開することが重要

事例発表とシンポジウム、さらには第1回コンファレンスも含めた全体の成果と課題は以下のようにまとめられる。この取り組みについては、今後も県内事例を中心に支援を継続し、取り組みの継続的発展を可能にする支援の枠組み（取り組みと省察、課題設定（発表）、再取り組みのサイクル形成）に向けて取り組んでいく。

（1）成果

大分地区で実施した「地域協育コンファレンスINおおいた」は、冒頭でも述べたとおり、前後2回のコンファレンスの間に訪問調査による取り組み支援（課題解決のための取り組みのデザインに関する協議）を組み入れ、①発表の機会の中で以降の取り組みの課題を設定し、②課題解決のための取り組み（設定する目標や取り組みの内容・方法・スケジュールなど）を自治体とコンファレンス事務局が協同で検討し、③自治体が課題解決に取り組んで上で、④再びコンファレンスで発表する、という取り組みの継続的支援プロセスの形成を意図していた。

実際のスケジュールでは、実際に課題解決にあたる時間を十分に確保できず、課題解決のための取り組みをデザインした時点で第2回のコンファレンスを迎えることとなり、その発表内容は取り組みのデザインと今後の展望を中心とするものになった。その意味では、大分地区のコンファレンスがどの程度効果のあるものになったのかは、各地域での今後の取り組みの成果に俟つ部分大きい。

しかし、現時点で確認できる成果も色々と指摘できる。まず、積極的・主体的に取り組みを進めており、自らの取り組みについての分析ができている自治体の担当者同士が集まれば、かなり具体的なレベルで互いに同意し共感する気づき（地域の組織の現状や取り組みの意義、巻き込むことが難しい人々などについて意見は一致し、地域や取り組みのテーマを超えた同意や共感を持つことができた）を事例発表やシンポジウムでの協議の中で共有することができた。また、その

ような協議の場で、論点を整理したり、視点を変えたり、構造化して協議をリードする研究者の関わりの重要性も、一般参加者を含めて共通して感じていただくことができた。

本コンファレンスでは、第1回第2回ともに、それぞれの発表について20分と長めの協議時間を設定した。しかし、実際には20分でも時間は十分ではなく、それぞれの関心に基づく個別の質問・意見に加えて、共通の分析軸を設けて協議する「深め型」の協議の時間を持つことの必要性に気づくことができた。それでも、参加者からは事例発表あるいは協議の中で、職場に持ち帰ることのできる具体的な気づきをたくさん持つことができた旨声を掛けていただいた。

(2) 課題

大分地区のコンファレンスで実施した内容が今後様々な地域で有用なモデルとして用いられるためには、発表(研修)・課題設定・課題への取り組み(取り組み支援)・再発表(再研修)という一連のサイクルの有用性を、具体的な事例の証拠とともに、確認し、発信していく必要がある。コンファレンス事務局としての大分大学は、今後も県内事例を中心として今回参加いただいた自治体の支援を継続的に行っていく計画であり、最終的には、大分地域における発表や研修の場がそれに伴い様々な取り組みとその支援につながり、その取り組みを再び発表するというサイクルを形成することが目標である。言い換えれば、発表(研修)しては実践しその実践を再び持ち寄って発表(研修)し合うサイクル、学びと実践の循環的關係を構築することが最終目標である。

しかし、このようなサイクルを形成するためには、ただでさえ忙しい業務の中で、何とか時間を捻出して発表や研修の場に参加し、その後も継続的に取り組みを行い、取り組みの振り返りをした上で再度の発表(研修)に臨むという労力を厭わない職員が必要である。実際には、2回とも研修に参加するだけでも簡単ではないという職員が多いのが実情である。ましてや、詳細で具体的な情報の持ち寄りにはさらに時間をかけることが必要になる。それだけの労力をかけても参加する価値のある発表(研修)の場を形成して発信する必要がある。また、その側面的支援として職場でも可能な情報のやりとりや共有のためにICTの活用(メールによる個別協議やSNSによる情報の共有・蓄積など)も有効であろう。

(3) 今後の取り組み発展に向けて

今回、コンファレンスを実施させていただいたことで、以前から感じていた社会教育の取り組みの課題についてより明確に感じることができた。多くの社会教育関係者は、取り組みを行う上で十分な情報や人的ネットワーク、仕組みを持っておらず、何か新しい取り組みを始めるときには、一から情報を探り、手順を考え、プログラムを企画する必要に直面するケースが多い。

実は、先導的な取り組みを行った経験を持つ職員や研究者とつながれば、あまり悩むことなく効率的にこれまでの先行事例を参考にして取り組みをデザインし、その後の展開を予想することができる。社会教育関係職員の研修も、定型的な知識の伝達はなるべく別途行うようにして、参加型学習を軸に、情報や事業を進めるための具体的な情報の共有を中心とした「またぜひ来たい」、「具体的に持ち帰るものがある」、「次回までにこの点について実践してこようと考える」研修へと変革していく必要がある。

また、大分地区がこだわっている発表と実践、再発表のサイクルも、抽象的には誰もが必要と感じていることであるにもかかわらず、実際にはなかなか実現できていない事柄である。多忙な

業務の中でも効果的な振り返りを行うための場を確保すること、定期的実践を持ち寄り分析や取り組みへの提案を共有できる場をさらに整備すること、職場に帰っての実践が孤立したものにならないよう、なるべく継続的に取り組み支援が利用可能な環境を整備すること、少子高齢化や過疎化などの問題に直面しながらも前向きな捉え方・活動に持つて行くための視点、このようなことが必要であろう。

都道府県や市町村の取り組みが継続的に発展し、地域を元気にして活力を生み出せるように、大学としても効果的な支援に取り組んでいきたい。

②「『協育』アドバイザー養成講座」の取組

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえて家庭・学校・地域が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まり8年が経過した。その間、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う取組が急激に進んできた。大分県教育委員会は、それ以前の平成17年度から施策として取組始め、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を推進してきた。さらに、平成16年度にコミュニティースクール（和製英語）が実施され、学校教育に地域の願いを反映させ、日常からの地域と学校のつながりの基盤づくりの取組が始まった。現在、文部科学省は、コミュニティ・スクールの拡大を目指して推進している。

本講座は、こうした取組に対して民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進する中核的な人材の養成を行うことを目的として平成21年度から開講している。平成26年度までの受講者は129名で、開講する「基礎編」「中級編」「上級編」の3つの講座すべてを受講した方は32名であり、職業や地域活動を持ちながら日程を調整しての受講だが、徐々にネットワークが広がっている。

さらに、受講者で組織する「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」は、大分県教育委員会が進める、子どものために家庭・学校・地域が協働する「教育の協働（協育）」を、民間団体として推進する法人として平成22年に設立した。会員は、日常的に地域活動をしている方々が、大分大学高等教育開発センターが実施する「『協育』アドバイザー養成講座」を受講して、その趣旨を理解し、会員のネットワークを活用してそれぞれの活動を充実しようとするメンバーである。

NPO法人としての活動は「高まろう（学ぶ）」「広めよう（事業）」「繋がろう（情報）」の3つの柱で、特に「広まろう」の活動をとおして、「協育」のためのコーディネート場を作りながら、平成27年度文部科学省委託事業「成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業」～「おんせん県おおいた・別府型ドリームプロジェクト～への支援活動や、「〈協育見本市〉第9回地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」などの指導者研修会を実施した。

<平成27年度第6期生「『協育』アドバイザー養成講座」【上級編】>

1. 目的：

本研修は、県内外での「教育の協働」を推進・実践する先進地を視察し、地域づくりや青少年の健全育成に関する中心的指導者・コーディネーターとしての資質を向上させ、以て、「教育の協働」の推進に関するアドバイスの力量を高めることを目的とする。

2. 期 日： 平成27年12月3日（木）～4日（金）

3. 視察先： 平成27年12月3日（木）13：30～16：00頃

①阿蘇市立内牧小学校 〒869-2301 阿蘇市内牧1376番地

平成27年3月17日に学校運営協議会が立ち上がり、本格的にコミュニティ・スクールがスタートした。本年度は、学校運営協議会を中心に、学校、家庭、地域が一体となって内牧小コミュニティ・スクールのねらいである「人間づくり、学力づくり、社会性づくり、心と体づくり、地域づくり」を目指す。さらに、文部科学省の指定による土曜授業については、阿蘇市では平成25年度に試行が始まり、昨年度より本格実施になった。本校の土曜授業は、公開型土曜授業、連携型土曜授業、体験型土曜授業の3つに分かれており、特に、体験型土曜授業は、「人間づくり、学力づくり、社会性づくり、心と体づくり、地域づくり」のために重要な活動である。

視察先： 平成27年12月4日（金）10：00～12：00頃

②産山村教育委員会 〒869-2703 阿蘇郡産山村山鹿488-3

従来から「やまびこネットワーク事業」・「子どもヘルパー事業」で教育と福祉との融合モデルを進めて来た。その後も「うぶやま学」の創設など教育行政の総合化と住民主導を目指して、子ども支援事業を展開している。学校や保育園を支援して、学校、家庭、地域住民の交流を図るため、「学校支援地域本部事業」と「コミュニティ・スクール」を融合させた「広げ隊」、「学び隊」、「暮らし隊」、「伝え隊」の活動を推進し、子どもの実践も、住民の教育への参画も拡充し、小さな村の住民主導の人材育成が実りつつある。

4. 研修報告：

今年の実践研修は阿蘇方面です。大分大学から10名バスに乗り込み、視察先の阿蘇市立内牧小学校へと向かいました。

その後、現地で1名合流し、総勢11名になりました。内牧小学校は、平成27年3月に学校運営協議会が立ち上がり、本年度コミュニティ・スクールがスタートしたばかりです。学校・家庭・地域



が一体となって、内牧小コミュニティ・スクールのねらいである「人間づくり、学力づくり、社

会性づくり，心と体づくり，地域づくり」を目指しています。また，昨年度より本格実施になった土曜授業は，「公開型土曜授業」「連携型土曜授業」「体験型土曜授業」の3つに分かれています。地区により分けられたコミュニティは「登山」「清掃活動」「伝承芸能」などの年間計画をした取り組みをしています。平成24年の7月12日に豪雨災害を受けた地域ですが，コミュニティ活動が学校と地域を結びつけて，災害に負けない地域づくりにもなっていると思いました。私たちが訪問した時に，学習ボランティアの方がプリントの丸つけをしていました。生徒の理解進度に合わせて印刷されたプリントは，ボランティアの2名が解答している間に，教師がT T(チーム・ティーチング)で机間巡視して，子どもたちの質問に答えていました。個別指導にも近いこの学習形態で，成績は上がっているそうです。

2日目の訪問先の産山小・中学校は，平成21年度文部科学省よりコミュニティ・スクールの指定を受けた後，全教室に電子黒板の配置，ICT活用，西日本で初の土曜授業を開始，保小中一貫教育(5・2・2制)を展開するなど，先進的な教育活動をしている学校です。特色ある教育課程として，地域人材の活用し体験を重視した「うぶやま学」，1年生から始まる英会話科や中学校の英語を先取りした「ヒゴタイイングリッシュ」，小中教員による複数指導体制の「チャレンジ学習」などが取り入れられています。私たち一行が学校に到着すると，象の銅像が入り口に置かれていました。「二宮金次郎でなく，なぜ象なのだろう」という疑問を抱えながら，私は産山村の教育課長，校長先生等の説明を聞きました。特色として，産山小学校と中学校の間には，教員乗り入れ授業などの小中連携システムが機能し，小学校舎と中学校舎が多目的室・図書館を挟んで連結されています。入学式等の行事は合同で行われています。コミュニティ・スクールの仕組みですが，「交流コミュニティ(広げ隊)」「体験コミュニティ(暮らし隊)」「文化・安全コミュニティ(伝え隊)」「学習支援コミュニティ(学び隊)」の4種類の分野に分かれ，学校にコーディネーターが席を置いて，地域と学校を結んだ連絡が良く取りまとめているようでした。また，昭和63年度より，タイと交流(通称ヒゴタイ交流)が行われており，国際理解に基づいた活動を続けています。産山村の先生方から聞いて心に残ったことは，「産山でいろんな体験をさせてもらったので，そのお返しをしたい」という成長した子どもたちの声でした。

③読み聞かせグループの育成推進事業

地域での子どもたちの読書，スポーツ，文化等の活動を指導している地域指導者のネットワーク作りを進めることを目的に，指導者の育成と学生との交流を図る研修会を実施した。

平成27年度人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい(結い)」の活動

読書支援に関わるいろいろな立場の人たちが集い，情報交換をしながら，互いに高め合っていくことを目的とする。

第1回 人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい(結い)」

日時： 2015年6月21日(日) 13:00~15:00

- ①情報交換 (活動発表 本に対する熱い想いや悩みなど・・・)
- ②「ちょっと気になる絵本(本)」の紹介

場 所： 大分大学 旦野原キャンパス 教養教育棟 2階 会議室 1

第2回 人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」

日 時： 2015年9月27日（日）13：00～15：00

①講演会 子どもと本を結ぶあなたへ・・・

『子どもと 本と 私と・・・』

講演者： 首藤 富久恵 氏

主 催： 大分大学高等教育開発センター

NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット

人と本を結ぶ読書支援プロジェクト「ゆい（結い）」

場 所： 大分大学 旦野原キャンパス 教養教育棟 28号教室

第3回 人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」

日 時： 2015年12月20日（日）11：00～13：00

①一周年を記念してランチをしながら「協育」アドバイザーネット理事と交流

②講演会の報告

③「お薦めの本」の紹介

場 所： 絵本カフェ「みちくさ」 大分市府内町3-7-28

第4回 人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」

日 時： 2016年3月6日（日）13：00～15：00

①講話「子どもたちの心の育ちを支える楽しい活動」

講 師： 大分大学高等教育開発センター 中川忠宣教授

②情報交換「私の活動を聞いて！ あなたの活動を教えて！」

場 所： 大分大学 旦野原キャンパス 教養教育棟 2階 会議室 1

（3）学生の生涯学習機会の提供～学習ボランティア『フォーバル』の活動～

「学習ボランティア『フォーバル』」の活動は、「学習ボランティア入門」や「生涯福祉論」等の授業と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりをおこなった。年度当初の募集や研修会などを通して、平成26年度の登録者数は53名（H26.5現在）で、これまでの活動を体系的に行う3つの自主サークルが主体的な活動をおこなった。

※『フォーバル』とは

Oita University Volunteer Activity for Lifelong Learning=『Fouvall』

※ 詳細は「協育」事例集教育の創造～地域「協育」のススメ（第3巻）（大分大学高等教育開発センター発行）をご覧ください。

1) 地域との交流サークル「WITH」の活動

「WITH」は大分大学学生と大学に近接する旦野原ハイツ地区の交流を目的として、大分大学前駅の清掃や交流イベントの開催などを行っている。27年度は旦野原ハイツ西区・東区、旦野原自治公民館をはじめとした地域の組織・ボランティアとの連携により、「旦野原まつり」を企画し、実施した。旦野原自治公民館を会場とし、地域の組織・ボランティアとの連携により、学生サークル等のステージ発表、地元の方の作品の展示、工作教室、団子汁、やせうま、鶏飯、唐揚げ、等の販売、抽選会など多彩な内容のイベントが行われた。WITH以外に普段地元の方と交流する機会が少ない学生も参加し、交流を行うことができた。

2) 読み聞かせサークル「結(ゆい)」の活動

大分市府内子どもルーム読み聞かせ 第3・第5(土) 11:00~11:30

月 日	読んだ本	氏名	感想・備考
2014年 12月20日	あがりめさがりめ (いまきみち福音館書店) おいでおいでおいで (内田麟太郎・長野ヒデ子 童心社) いいおかお (松谷みよ子 瀬川康男 童心社) なにがみえるの (ひろのみずえ ひさかたチャイルド) まどからのおくりもの (五味太郎 偕成社) くだもの (平山和子 福音館書店) きゅっきゅっきゅっ (林明子 福音館書店)	村瀬鮎美 金丸佳加	1~3歳 5人くらいの 家族
2015年 1月17日	ころころパンダ ゆらゆらパンダ (いりやまさとし 講談社) がたんごとんがたんごとん (安西水丸 福音館書店) くっついた (三浦太郎 こぐま社) おふろでちゃぶちゃぶ (松谷みよ子 いわさきちひろ 童心社) かおかおどんなかお (柳原良平 こぐま社) ぼくはブルドーザー! (三浦太郎 こぐま社) のびのびのーん (かわかみたかこ アリス館)	金丸佳加 田中琴音	男の子2人 女の子2人の 家族
1月31日	おやおやおやさい (石田ちひろ 山村浩二 福音館書店) ぼくはぞうだ (五味太郎 偕成社) のろまなローラー (小出正吾 山本忠敬 福音館書店) こんにちは (わたなべしげお おおともやすお 福音館書店) きんぎょがにげた (五味太郎 福音館書店)	坂本花保里 外池夏子	1歳7か月 男の子
2月21日	きんぎょがにげた (五味太郎 福音館書店) がたんごとんがたんごとん (安西水丸 福音館書店) おひさまあはは (前川かずお こぐま社) はらぺこあおむし (エリック=カール 偕成社) おやゆびさん (風木一人(かずひと) ひろかわさえこ 鈴木出版) おやすみくまちゃん (シャーリーパレント- デイヴィッド・ウォーカー 福本友美子 岩崎書店) あっあっあっ、みつけた! (徳永真理 垂石眞子 童心社)	高木日向子 村瀬鮎美 岩下昌樹	4~5歳の 男の子

3月祝日 中止			
4月18日	<p>どうやってねるのかな？（薮内正幸 福音館書店）</p> <p>じゅんぴはいいかい（荒井良二 学研）</p> <p>だっこして（いしまきかやこ こぐま社）</p> <p>ぼちぼちいこか（マイク・セラー ロバート・グロスマン 今江祥智 偕成社）</p> <p>さよならさんかく（わかやまけん こぐま社）</p>	金丸佳加	
5月16日	<p>いたいのでいたいので とんでけ（平出衛（ひらいでまもる） 福音館書店）</p> <p>どうぞのいす（香山美子 柿本幸造 ひさかたチャイルド）</p> <p>あおくんきいろちゃん（レオ・レオニ 藤田圭雄 至光社）</p> <p>ごあいさつあそび（きむらゆういち 偕成社）</p> <p>なにをたべてきたの（岸田衿子 長野博一 佼成出版社）</p> <p>ちびごりらのちびちび （ルース・ボーンスタイン 岩田みみ ほるぷ出版）</p> <p>たまごのあかちゃん（神沢利子 柳生弦一郎 福音館書店）</p>	高木日向子 坂本花保里	赤ちゃん5人 2～3歳の親 子
5月30日	<p>おにぎりくん（村上康成 小学館）</p> <p>かにこちゃん（きしだえりこ ほりうちせいいち くもん出版）</p> <p>くるくるなあに（山本省三 てづかあけみ くもん出版）</p> <p>ぼくたちのピーナッツ（サイモン・リカティー 講談社）</p> <p>だあれだ（まつおかたつひで ポプラ社）</p> <p>どこからたべよう（井上洋介 農山漁村文化協会（農文協））</p>	田中琴音 岩下昌樹	読み手のこと を応援してく れて、よく聞 いてくれてい た
6月20日	<p>にじをみつけたあひるのダック（主婦の友社）</p> <p>かくれんぼ かくれんぼ（五味太郎 偕成社）</p> <p>おやおやおやさい（福音館書店）</p> <p>きんぎょがにげた（五味太郎 福音館書店）</p> <p>でんぐり でんぐり（黒井健 あかね書房）</p> <p>あくまくん（テレサ・ドゥラン エレナ・バル 出版社アルファポリス）</p> <p>あつさのせいかな？（スズキコージ 福音館書店）</p> <p>いただきます（わたなべしげお 福音館書店）</p>	高木日向子 岩下昌樹	1歳くらいと 4～5歳の兄 弟
7月18日	<p>こんにちは（わたなべしげお 福音館書店）</p> <p>くまさんくまさん なにみているの？（エリックカール・ビル＝ マーチン 偕成社）</p> <p>うさぎこちゃんとうみ （ディック・ブルーナ 石井桃子 福音館書店）</p> <p>くるまがいっぱい （グレース・マカロン デビット・A・カーター文化出版局）</p>	外池夏子 松田雄太郎	3歳くらいの 女の子

	<p>がたんごとんがたんごとん ざぶんざぶん(安西水丸 福音館書店)</p> <p>いないいないばあ(松谷みよ子 瀬川康男 童心社)</p> <p>かぐさんとんだ(五味太郎 福音館書店)</p> <p>きんぎょがにげた(五味太郎 福音館書店)</p> <p>はらぺこあおむし(エリック=カール 偕成社)</p>		
8月15日	<p>だるまさんが(かがくいひろし ブロンズ新社)</p> <p>ねないこだれだ(せなけいこ 福音館書店)</p> <p>くっついた(三浦太郎 こぐま社)</p> <p>もこ もこもこ(たにかわしゅんたろう もとながさだまさ 文化出版)</p> <p>おつきさまこんばんは(林明子 福音館書店)</p> <p>くだもの(平山和子 福音館書店)</p> <p>うちわばたばた(杉田比呂美 福音館書店)</p>	佐藤真由美	
8月29日	<p>はらぺこあおむし(エリック=カール もりひさし 偕成社)</p> <p>ふしぎなナイフ(中村牧江・林健三 福田隆義 福音館書店)</p> <p>みんなでぼん(まついのりこ 童心社)</p> <p>おおきくおおきくおおきくなあれ(まついのりこ 童心社)</p> <p>ながーいおはなのブタくん (キースフォクナー ジョナサン・ランバート ときありえ 文化出版局)</p> <p>へんしんトンネル(あきやまただし 金の星社)</p>	<p>外池夏子</p> <p>高木日向子</p>	<p>ヨチヨチ歩き</p> <p>の子も楽しそ</p> <p>うに参加して</p> <p>くれた</p>
9月19日	<p>きんぎょがにげた(五味太郎 福音館書店)</p> <p>こぐまちゃんのホットケーキ(わかやまけん こぐま社)</p> <p>ルラルさんのにわ(いとうひろし ポプラ社)</p> <p>でんぐり でんぐり(くろいけん あかね書房)</p> <p>がたんごとんがたんごとん(安西水丸 福音館書店)</p>	高木日向子	<p>0歳 1人</p> <p>1歳 3人</p> <p>3~4歳 1人</p> <p>大分大学出身</p> <p>のお父さんが、</p> <p>学生が読んで</p> <p>いるからと聞</p> <p>いて子どもさ</p> <p>んを連れてき</p> <p>てくれた</p>
10月17日	<p>ぶるん ぶるん おかお(とよたかずひこ アリス館)</p> <p>ハンバーグ ハンバーグ(武田美穂 ほるぷ出版)</p> <p>だっこ(なかのひろみ まつもとよしこ アリス館)</p> <p>バスにのって(荒井良二 偕成社)</p> <p>ぼくはぼくのほんがすき (アニタ・ジェラーム おがわひとみ 評論社)</p> <p>なにをたべてきたの(岸田衿子 長野博一 佼成出版局)</p>	<p>坂本花保里</p> <p>中山麻理子</p> <p>中村真望</p>	1~2歳の子

10月31日	いちご (平山和子 福音館書店) ・・・記録なし・・・	岩下昌樹 外池夏子	
11月21日	りんごころころ (松谷みよ子 童心社) かおかお どんなかお (柳原良平 こぐま社) さわさわもみじ (ひがしなおこ きうちたつろう くもん出版) いたいよ いたいよ (まつおかたつひで ポプラ社) あかくん でんしゃとはしる (あんどうとしひこ 福音館書店) ふゆのおばけ (せなけいこ 金の星社) いちご (平山和子 福音館書店)	田中琴音 岩下昌樹	2～3歳の女の子が1人, 0歳の子が2人
12月19日	まどからのおくりもの (五味太郎 偕成社) だるまさんの (かがくいひろし ブロンズ新社) ぐりとぐらのおおそうじ (中川李枝子 山脇百合子 福音館書店)	金丸佳加 松田雄太郎	0歳と2, 3歳の姉妹
<u>2016年</u> 1月16日	きゅっ きゅっ きゅっ (林明子 福音館書店) ねずみくんとかくれんぼ (なかえよしを 上野紀子 ポプラ社) ばななせんせい (得田之久 やましたこうへい 童心社) みかん (中川李枝子 山脇百合子 復刊ドットコム) いないいないばあ (松谷みよ子 瀬川康男 童心社) ぼくのでぶくろ (ふくだすぐる 岩崎書店)	田中琴音 坂本花保里	2, 3歳のお子さんとお母さん
1月30日	かお かお どんなかお (柳原良平 こぐま社) やさいのおなか (きうちかつ 福音館書店) ねえ, どれがいい? (ジョン・バーニンガム 松川真弓 評論社) ふゆはふわふわ (五味太郎 小学館) おさるのおいかけっこ (いとうひろし 講談社)	中山真理子 中村真望 松田雄太郎	1～2歳2人 4～5歳1人
2月20日	がたんごとんがたんごとん (安西水丸 福音館書店) きんぎょがにげた (五味太郎 福音館書店) くるまがいっぱい (グレースマカローンズ デイビットカーター 文化出版局) ねずみくんのチョコッキ (なかえよしを 上野紀子 ポプラ社)	外池夏子	2歳の男の子が2人, 1歳の男の子, 6歳の女の子
3月19日	はじめてのあかちゃんあそびえほん だあれかな (あらかわしずえ 学研) ちいさなうさこちゃん (ディックブルーナ 石井桃子 福音館書店)	外池夏子 高木日向子	2歳の男の子が1人

大分大学 学生読み聞かせボランティア「ゆい(結い)」勉強会(毎月第2土曜日 13時~15時)

2015年

- 1月10日 昔話絵本 例)「三びきのこぶた」「かちかちやま」の説明
2月14日 科学絵本 資料別
3月14日 春の絵本 資料別
4月11日 「ジーン」とくる絵本 「なおみ」福音館書店
8月9日 3歳前後 お薦めの絵本 読み聞かせの基本
6月13日 読み方 声の出し方 課題「三びきのやぎの がらがらどん」
金丸佳加 「なにをたべてきたの?」岸田衿子 長野博一 佼成出版社
高木日向子「ぎょうれつ んぎょうれつ」
マリサビーナ・ルツ 青木久子 徳間書店
7月11日 読み方 声の出し方
国東 富来小学校「読書バイキング」選書と打ち合わせ
8月8日 パークプレイス大分「あおぞら図書館~絵本の読み聞かせ」
9月12日 夏休みのためお休み
10月10日 富来小学校 パークプレイスの反省
講演会の報告
読みの練習「たんぼぼヘリコプター」から「コスモス」「おちばのゆうびん」
「かき」
12月19日 クリスマスの本・紹介したい本

2016年

- 1月9日 今年の干支「さる」の絵本
2月13日 好きな絵本・紹介したい絵本
3月12日 2人(以上)で読む絵本
3月28日 パークプレイス大分読み聞かせ・大分市民図書館講習会打ち合わせ

その他の活動

- ・国東市富来小学校「読書バイキング」7月19日(別紙)(坂本さん・田中さん)
- ・パークプレイス大分「あおぞら図書館 ~絵本の読み聞かせ~」9月6日(別紙)(外池さん・高木さん)
- ・大分市民図書館「読み聞かせボランティアスキルアップ講習会」講師の助手として3月29日(高木さん)



「ゆい（結い）」勉強会大分大学図書館 演習室にて

3) 別府市出身の学生による、後輩の小中学生の学びを支援する「コネクト」

平成26年の2月から、別府市の小学校や中学校への学習支援を行っています。学習支援を行っている大学生は、別府出身の大分大学の学生が中心ですが、このサークルの活動に賛同した大分市の学生も参加しています。「同じ別府市で育った後輩である子ども達の成長に、私たちが携わることで何か子ども達に良い影響を与えられたら・・・。」という思いがサークルの発足に繋がりました。学生たちの小学生や中学生時代に気づかなかったことなど、今になって「そうーか・・・」と思うことなど、子どもたちと関わりながら伝えていきたいと願っています。

サークル名は「コネクト」。この「コネクト」という名前には、「人と人との繋がりを大切にしていきたい」という思いを込めました。学習支援といっても、勉強を教えるだけではなく、子どもたちと一緒に遊ぶことで思いやりの心を育てたり、私たちの子どもの頃の遊びを教えたりと、勉強や遊びを通して友達の大切さや、別府の素晴らしさなど、様々なことを子ども達に伝えることを目標にしています。

(4) 大学教育と生涯学習の接続・連携

1) 生涯学習・社会教育に関する授業の実施（教養教育）

【生涯学習論入門】

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開するための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義した。25年度より大分県子ども子育て支援課との連携により、授業の中の2回分（5月22日と29日）を「ライフデザイン講座」として地域講師を活用して実施した。社会保険労務士の篠原丈司氏から男性の子育てやワークライフ・バランスについて、フリーアナウンサー小野亜希子氏から働きながらの子育て体験について、内容の濃いお話をいただいた。合わせて、クリッカーを使って学生の意識を確認しながらライフデザインについて考えた。

【成人教育方法入門】

人格が確立した成人への教育の方法について、ファシリテーターの育成という観点から演習と講義をした。

【学習ボランティア入門】

きっちよむフォーラムで学生から要望があったボランティア活動を単位化する授業として、ボランティア活動を中心とした授業を平成23年度から継続している。

①講義： 4時限（授業趣旨、学習ボランティアの意義・心得等）

②活動： 9時限（15時間以上）

※実際に地域へ出かけて子どもや高齢者等に関わるボランティア活動を行う。

③振り返り： 2時限（ボランティア報告会とまとめ）

【プロジェクト型学習入門1～インターンシップセミナーB～】

大学で学ぶ力を付けさせるため、また社会人として必要な力の基礎を修得させるため、プロジェクトを自ら企画し、実行することで、企画力、提案力、コミュニケーションスキルなどの向上を図っている。今年度は、前期の授業で「大学生協新商品開発（もぐもグローバルフェア）」と東日本大震災支援のための「ふれあいバザー」、地域の農業の実態を調べ電柵張りなどの作業を体験した「地域の農業」の3テーマで活動が行われた。後期の授業では大分地域若者サポートステー

ション（多々良友美氏が外部指導者として関与）が開発した「キャリアすごろく」をもとに、大分大学生協専務理事南條晃氏の指導を受け、「大分大学すごろく」を作成した。

【大学開放論－社会人の学びと大学生の学び－】

全国国立大学生涯学習系センター協議会の取り組みの一環として刊行した『大学開放論－センター・オブ・コミュニティ（COC）としての大学－』をテキストとし、大学開放について論じるとともに、その中で自分がどのように大学を利用して学ぶかについてグループワークなどを通して考える授業とした。「大分大学活用方法の提案」，「大学在学中の目的目標と取り組み」などをグループで検討し、交流した。

2) 本学及び学部の授業・講習との接続

【大分の水Ⅰ】 【大分の水Ⅱ】

これらの科目は、平成21年度選定大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進－学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践－」（以下水辺GPと略記）の取組として行われている授業科目であり、水辺GPの事務局員である岡田が関与している。具体的には、【大分の水Ⅰ】および【大分の水Ⅱ】では、週末に行われる地域体験活動プログラムのコーディネートや運営（国東市来浦地区、竹田市岡本地区、九重町セブンイレブン記念財団九重ふるさと自然学校など）を行い、あわせて環境学習や川端（かばた）に代表される自然共生型のライフスタイルについて講義をおこなった。教室では意欲が高くない学生であっても、現地で地元の人の指導を受ける際には意欲的な姿勢を見せる傾向があり、想定以上の効果を得ることができた。

【教師学】（複数教員）

1年生の「教師学」は、平成22年度からのカリキュラムの再編成で始まった科目で、教員免許状取得の必須で、教員としての学びを計画付ける導入科目として設定された。求められる教師像を探る中で、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から社会教育との連結という視点での指導をおこなった。

【教職実践演習】

教員免許取得の最終科目である4年生後期の必須科目であり、大学4年間の学びを検証し、教員としての力量を確認する。事例研究、ロールプレイ、学級経営、模擬授業の4つで構成され、それぞれ演習を通して教員としての資質を確認し、最終の学修をする科目である。高校教員を目指す経済学部2名の学生を担当した。

【教員免許状更新講習】

中川が現職の教職員の免許状更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座（4コマ）及び、その講義内容をさらに演習等で深める「社会教育と学校教育の連携」という選択科目（4コマ×2回）を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義をおこなった。

また、岡田が選択科目「学校と家庭、地域の協働方策－子育てを手がかりに－」（4コマを担当）を担当した。学校と家庭、地域が協働するための方策について、主として子育てに関わるという部分に焦点化して講義した。続いて、大分地域で子育て支援を行っている「子育てネットワークおおいだ」の2名のメンバー（宮崎、村田）とともにパネルディスカッションを行い、地域で起きている子育ての課題を具体的に検討した。最後にグループワークにより協働に向けた行動計

画の策定をおこなった。

(5) 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)

文部科学省委託事業「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」(COC+事業)の実施にあたり、生涯学習部門が関係する教育プログラム開発事業の取組をおこなった。

※詳細資料は、平成27年度地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)報告書参照

- 1) 「大分豊じょう化教育プログラム」の編成に関する方針作成
- 2) COC+大学(大分大学)の取組と大分を創る人材育成の到達目標(評価すべき規準)
- 3) 連携校における「大分を創る人材を育成する」科目の設定
- 4) 検証的科目の実施
 - ・「学習ボランティア入門」(大分大学生対象科目)
 - ・「中小企業の魅力の発見と発信」(大分大学生対象科目)

(6) 情報収集提供・学習相談活動

1) 情報収集・提供

○平成21年度末に本センターホームページの生涯学習関連をリニューアルしたHPを活用して、年度当初には年間計画を掲載すると共に、年間を通して各講座等の詳細情報とその実施報告の日常的な更新をした。

=大分大学高等教育開発センター生涯学習関連ホームページの構成=

概 要：①生涯学習支援の概要 ②年度事業計画 ③研究資料 ④生涯学習情報
県民の皆様へ：①公開講座の紹介 ②公開授業の紹介 ③各種学習機会の紹介
学生の方々へ：①ボランティア情報 ②学習ボランティア申し込み ③学習支援
お問い合わせ

○平成25年度に、県内の様々な青少年の育成に係る情報を一元的に提供する「おおいた『協育』ポータル」を開設した。

=「おおいた『協育』ポータル」の構成=

- ①大分大学の窓：大分大学高等教育開発センターが担当する研修事業・活動情報の提供
- ②活動情報の窓：大分内外の研修・イベント情報の提供
- ③学びの窓：「協育」の推進に関する資料の閲覧・ダウンロード
- ④組織・団体の窓：国・県・団体等の情報へ繋ぐ

4つの窓から、県民へ「協育」の推進に関する情報を提供するサイトとして情報提供をおこなった。

○紙媒体の情報提供については、ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などに加えて、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に2回作成して、大分市を中心に配布したり、センターが主催する各種講座については別途チラシを作成して事業ごとに募集したりするなどして広く県内全体への広報をおこなった。ま

た、平成23年度からの取組としては、公開講座・公開授業の広報を新聞チラシに挿入しての配布を行うなどして、幅広く広報を行って情報の広がりを図った。

2) 学習相談

社会人の学習活動へのアドバイスや学生の授業や卒業論文、就職活動等の生涯学習に関わる内容について、資料を提供するなどして相談活動をおこなった。

(7) 学内のネットワーク化

1) 部門会議の実施

年度当初の年間実施計画の協議、後期における各種取組計画等について、部門長から提案して審議するとともに、個別の案件については、関係する部門委員に相談するなどして生涯学習関連の取組の充実を図った。

2) 生涯学習支援に関する教員のネットワーク化

公開講座の実施については、各学部の計画での実施や教員が自主的に実施するなどのシステムがある。さらに、大分水フォーラムを通じた連携やセンターが各課題に対応する講座、市町村と連携・協同で実施する講座・調査研究においても一定のネットワークが出来ている。そうした中、平成25年度から「とよのまなびコンソーシアムおおいた『連携講座』」の「豊の国学」の実施にあたって、各学部から1名の講師を選任するシステムができ、学部から選任された教員が「中央講座」と「分野別講座」の専門分野での講義をおこなった。

また、これまで構築してきた社会人とのネットワークや学内の連携体制の中で、平成27年度からのCOC+事業における「大分を創る人材を育成する科目」の基盤づくりを行った。全学教育機構運営委員会での提案をベースにして、各学部の教員への「大分を創る人材を育成する科目」づくりへの周知を行い、大分を創る人材を養成する授業を拡充する体制ができた。

※平成28年度科目数：88科目（予定）

(8) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、県民の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取組をおこなった。

1) 生涯学習支援ネットワーク化の取組

①県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育委員会社会教育課や県立社会教育総合センターと、個別の施策に関する打ち合わせ会を実施するなどして、連携を深める取組をおこなった。さらに、本センターが実施する各種取組について市町村事業と協同で実施するなどして市町村との日常的な連携を取りながらネットワーク化を図った。

平成27年度は、県立社会教育総合センターの「おおいた学びの輪」推進事業「ふるさとサポート講座（地域づくりサポート）」では、講座受講がゴールではなく取り組みのスタートや継続・

発展につながるよう、実際の取り組みの企画と運営について継続的な支援を行った。

また、文部科学省委託事業「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」～地域力活性化コンファレンスの創設～において、県教育委員会と協働して事業を実施するなど、これまでの取組に加えたネットワーク化を図ることができた。

②県内高等教育機関のネットワーク化

「とよのまなびコンソーシアムおおいた」の生涯学習関係事業（連携講座）において分科会を行う中で、各学校の現状を把握するとともに担当者との意思疎通を図ることができた。さらに、「豊の国学」としての体系的な講座を提供するシステムが出来上がった。

2) 支援団体等の活動

①NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動（再掲）

事業1. 指導者養成事業（連携事業）

○「協育」アドバイザー養成講座

※大分大学高等教育開発センターが実施する研修事業への企画・運営へ参画

事業2. 「協育」プログラム開発事業

○研修会・協働事業等によるネットワークづくり推進プログラムの開発

・人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」の育成

・大分大学学習ボランティア「フォーバル」の研修事業

○第9回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会への企画・運営へ参画

事業3. 「協育」実践事業

○人と本を結ぶ読書支援ネットワーク「ゆい（結い）」（高等教育開発センターとの共催）

②大分県『協育』ネットワーク協議会

○第9回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会への企画・運営へ参画

○大学教養教育授業への支援活動

○NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動への支援活動

(9) 生涯学習推進と社会的活動の取組

県及び市町村教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取組をおこなった。

1) 県教育委員会生涯学習・社会教育行政との連携

=生涯学習・社会教育事業=※別途掲載

=生涯学習関係者研修事業=※別途掲載

=委員等への就任=

【県教育委員会社会教育課関係】

【県立社会教育総合センター関係】

○おおいた学びの輪推進「おおいたっ子サポート」事業におけるスーパーバイザー（中川）

【大分県関係】

- 大分県社会教育委員（岡田）
- 大分県協働推進会議委員長（岡田）
- 大分県青少年健全育成審議会副委員長（岡田）
- おおいた共創応援基金理事（岡田）
- 大分県立大分豊府高校思考力・判断力・表現力育成研究委員（岡田）
- 家庭教育支援プログラム検討委員会委員長（岡田）

2) 市町村教育委員会生涯学習行政との連携

=生涯学習関係者研修事業=

- 大分市南部公民館「おやじの夜なべ談義」コーディネーター（大分市：岡田）
- コミュニティ・スクール導入に関する研修事業（由布市・別府市：中川）
- 大分県家庭教育支援員研修（岡田）
- 由布市地区公民館担当者研修（岡田）
- 日出町自己公民館職員研修（岡田）

=委員等への就任=

- 由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）
- 由布市新たな地域コミュニティを考える会委員（岡田）

3) 国，都道府県，団体，機関等との連携・支援

【文部科学省事業】

文部科学省委託事業「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」～地域力活性化コンファレンスの創設～（※別途掲載）

【国・他県生涯学習関係者研修事業支援（主なもの）】

- 熊本県公民館等職員研修会（中川）
- 熊本県阿蘇市教育委員会研修会（中川）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター全国生涯学習センター等研究交流会（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育主事専門講座（岡田）
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成27年度社会教育主事講習B「社会教育施設の役割と機能」担当（岡田）
- 広島大学社会教育主事講習「大学と地域社会」，「高等教育と生涯学習」担当（岡田）
- 岡山県岡山教育事務所備中地区社会教育担当者研修会（岡田）
- 香川県みんなで育てる県民活動推進大会講師（岡田）
- 九州社会教育振興大会助言者（岡田）
- 全国子育てひろば大分大会助言者（岡田）
- 香川県青少年健全育成ブロック研修講師（岡田）
- 島根県つなぐ・つながる実践発表交流会講師（岡田）
- 佐賀市公民館職員研修講師（岡田）
- 広島県尾三地区公民館職員研修講師（岡田）

【委員等への就任】

- 全国国立大学生涯学習系センター協議会理事（岡田）
- 大分県マリンカルチャーセンター管理運営委員（中川）
- とよのまなびコンソーシアムおおいた生涯学習分科会長（岡田）
- 中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（岡田）
- 地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川・岡田）
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「公民館を中心とした社会教育活性化事業」審査委員（岡田）
- 子育てネットワークおおいた代表（岡田）
- おおいた水フォーラム事務局（岡田）

(10) 調査研究及び刊行物

1) 家庭、学校、地域社会の「教育の協働」に関する調査研究

～コミュニティ・スクールを効果的に運営するための機能と教職員の多忙化（仕事量の増加）及び多忙感（ストレス）の要因を探る～

目次

第1部 調査概要

第1章 調査計画の概要	1
1. 研究の目的	1
2. 調査研究の方法	2

第2部 コミュニティ・スクールの成果と運営の概要

第2章 コミュニティ・スクールに関する基本的事項の概要	7
2.1 コミュニティ・スクールに関する基礎的な事項	7
第3章 コミュニティ・スクール導入の成果に関する事項	9
3.1 学校教育課題への対応という観点からの成果について	9
3.2 児童生徒への効果という観点からの有効性について	13
3.3 学校教育機能への効果という観点からの有効性について	15
第4章 コミュニティ・スクール運営の組織・体制に関する事項	19
4.1 報告Vからのコミュニティ・スクール運営上の課題について	19
4.2 コミュニティ・スクールの運営と関係が深い組織・体制について	21
4.3 コミュニティ・スクールの運営のための組織・体制（仕組み）について	23
第5章 コミュニティ・スクールにおける多忙化（仕事量の増加）及び多忙感（ストレス）に関する事項	26
5.1 教職員の多忙化（仕事量の増加）について	26
5.2 教職員の多忙感（ストレス）について	29
5.3 教職員の多忙化（仕事量の増加）及び多忙感（ストレス）と関係する項目の相関と考察	32
第6章 コミュニティ・スクールの運営に関する工夫や考え方	34
6.1 全国アンケートから見る	34
6.2 先進地教育委員会の取組を見る	37

第3部 調査研究のまとめ

第7章 コミュニティ・スクールを効果的に運営するための機能と教職員の 多忙化（仕事量の増加）及び多忙感（ストレス）について	45
7.1 これまでの研究の整理	45
7.2 パースンの相関係数からの考察	47
7.3 調査研究の考察・提言と提案	57

2) 先進地事例

<東京都杉並区教育委員会の間取りから>

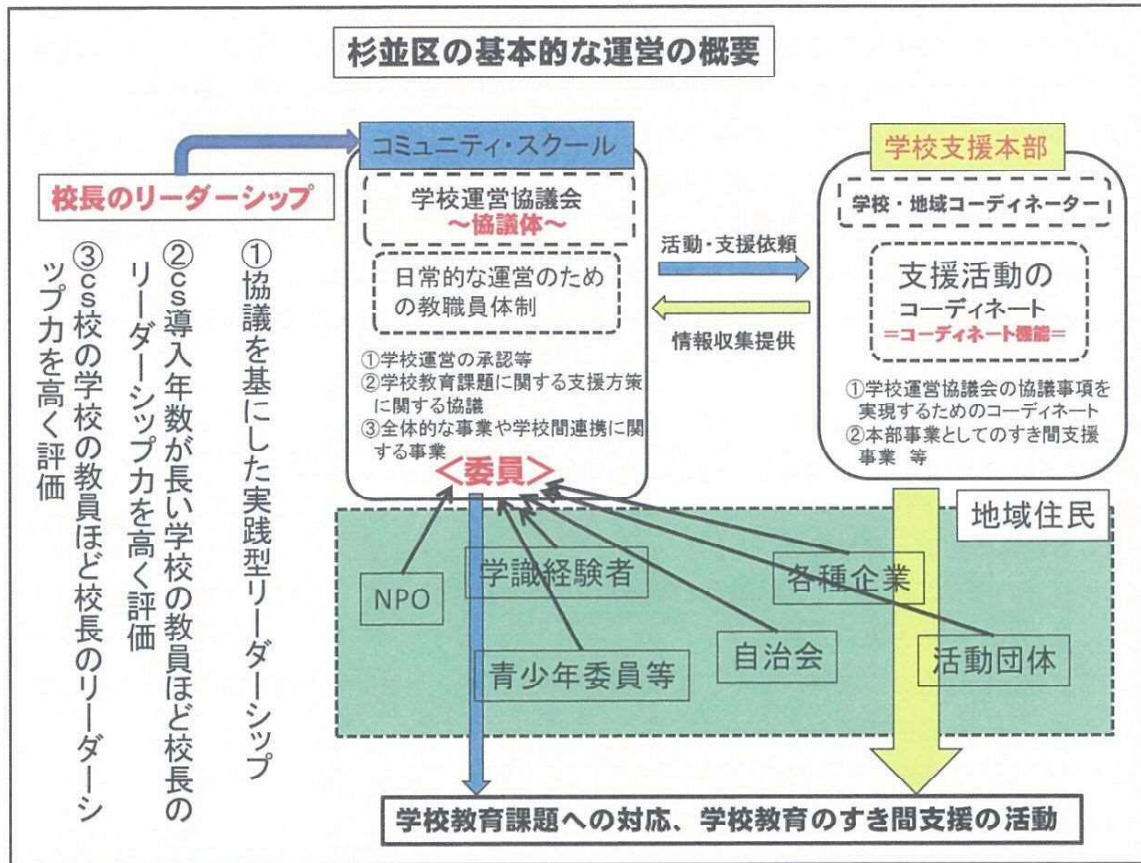
杉並区は、全ての公立小中学校に「学校支援地域本部」を設置し、コミュニティ・スクールはほぼ半数の学校に導入している。さらに、コーディネーター研修等を積極的に進めるなどの取組をおこなっている。杉並区内の学校では、多くの先進事例を見ることができ、本報告のデータは、平成26年度に実施した調査結果を紹介するものであり、詳細は、杉並区教育委員会ホームページ「地域運営学校成果検証調査の集計結果」をご覧ください。

間取り調査から整理できることは以下のとおりである。

①杉並区の現状として明確なのは「教職員への効果が大きい」ということである。ややもすると教職員の意識より「児童生徒への効果」を論じる傾向にあるが、教育行政としての教師像を明確にし、そのための研修や管理職への指導、コーディネーター研修等々が着実に実施されていることが要因であろう。異動の際に「地域に開かれた学校へ行きたい」という教員が13%もあることがそのことを証明している。また、こうした成果の基盤は管理職のリーダーシップであると分析している。

②コミュニティ・スクールが施策として推進されているということである。両輪である学校支援地域本部を全ての学校に置き、その上でコミュニティ・スクールを順次指定していることや、関係者の研修の計画的な実施によるコーディネーターの育成と教職員の意識改革をおこなうなどによる成果が大きいと考えられる。さらに、そうした施策を着実に進めるための予算の確保などもおこなわれている。

以上のような教育活動を行うための運営の概要を示したものが参考図1であり、このシステムが機能していることが、杉並区教育委員会の成果の要因であると考えられる。



参考図1：杉並区での基本的な運営の概要（大分大学 中川作成）

【杉並区の実績】

【児童生徒への有効性】

全ての公立小中学校に「学校支援本部」が設置されており、次のような傾向がある。

- ①子どもたちの教育活動に直接的にかかわる活動は主に学校支援本部で実践されているために、CSと非CSの比較で児童生徒への成果では大きく差が出ていない。
- ②CSと非CSを比較するとその違いは次のようなところに見てとれる。
 - ・CS校の小学生及び義務教育最終学年である中学3年生において、非CS校に比べて子どもの「自己効力感」が若干ではあるが「高い」傾向にある。
 - ・CS校の教員の方が、非CS校教員に比べて自校の児童生徒を肯定的に評価する傾向にある。
 - ・学習に対する意欲が高い（10%差）、ルールや決まりが守れる（9%差）、多様な体験活動に積極的に取り組んでいる（7%差）

【教職員への有効性】

1. 教職員の現状

- ①児童生徒への効果以上に、教職員や地域住民への効果が大きい。
- ②授業や行事等を企画する時点で地域住民・保護者を意識したものになっている。よって、地域住民も学校運営に踏み込める関係が出来ている。

2. 教職員の意識

- ①学校支援本部事業に対する教員の考え方として「頼んでも頼まなくてもいい」という意識で対応している場合もあり、法的根拠をもつCSへの取組と、意識の違いがある。
- ②CS校には、異動の際に「地域に開かれた学校へ行きたい」という教員が多く（13%多い）、経験を通じて地域との協力意識が育っていると思われる。
- ③CSとストレスの関係は直接的には見られない。しかし、小学校においては、保護者や地域住民との豊かなつながりが出来ていると、教員のストレスは低い。
- ④CS校の小中学校とも、非CS校に比べて「校長のリーダーシップが発揮されている」が9.3%多い。

【地域住民への有効性】

- ①CS校の地域住民・保護者の学校の運営支援活動への参加は13.3%、非CS校の地域住民・保護者の学校の運営支援活動への参加は9.2%で、CS校の方が若干多い。

【CS運営の組織・運営のヒント】

- ①校長・副校長だけでなく、教職員が組織的・計画的に関わっているCSは概ね協議が活発に行われていると思われる。
- ②学校運営協議会の会議録作成をCS委員の仕事として、全委員で内容を確認後HPへ掲載するなど、協議会活動を分担して行っている場合もある。
- ③学校関係者評価委員会は、学校運営協議会+1名以上として制度化している。

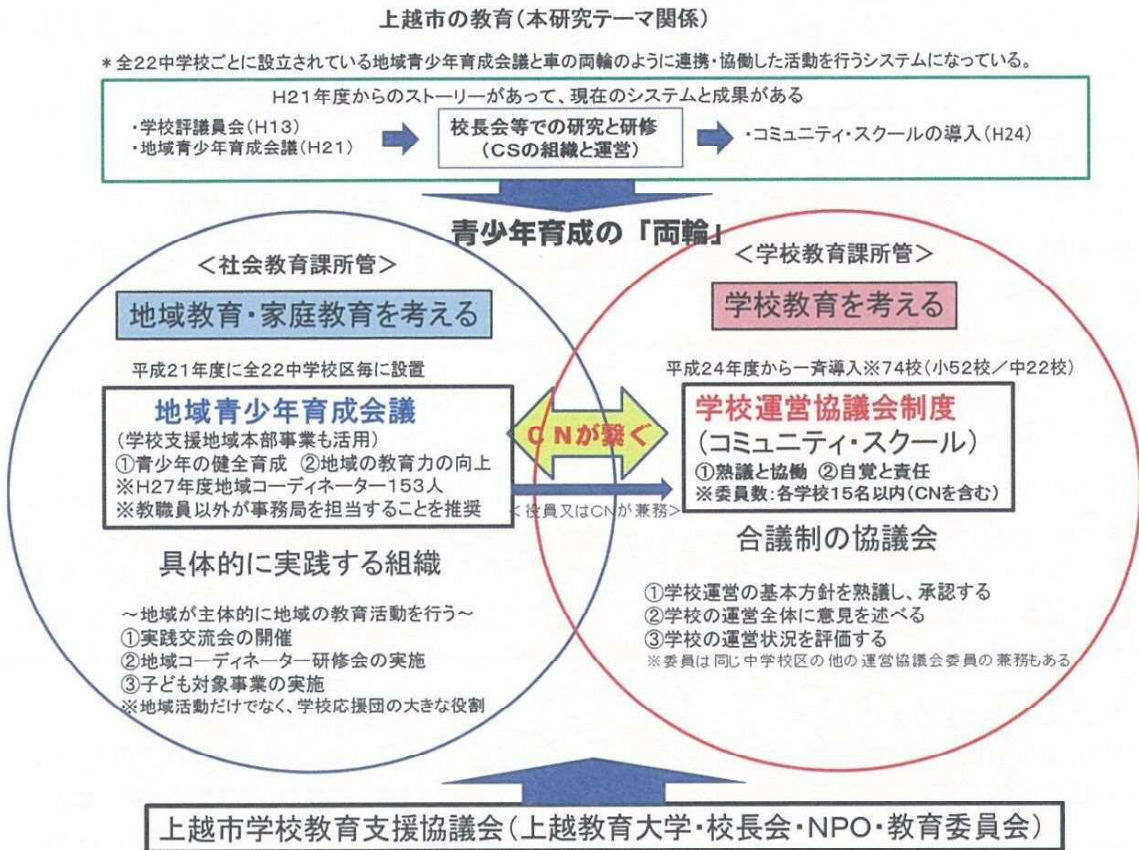
【CSと本部の関係】

- ①全ての小中学校に学校支援本部を設置しているが、CSは約半数校に導入、平成33年度に全校導入を目指している。
- ②学校支援本部を先に導入したCS校は「参考図：杉並区での基本的な運営の概要（中川作成）」が良く機能している。
- ③学校支援本部を後に導入したCS校は、運営協議会内に部会をおいて学校支援活動をしてきたため、学校支援本部の役割の明確化や連携に苦慮している場合もある。

<新潟県上越市教育委員会の間取りから>

①コミュニティ・スクール導入までの流れと仕組み

上越市は、平成21年度に、地域が主体的に地域の教育活動を行う体制を整備するため、全ての公立中学校区に「地域青少年育成会議」を設置し、地域コーディネーターを配置した。その活動を通じて、青少年の健全育成と地域の教育力の向上を図り、「地域の子どもは地域全体で育て、そこに関わる大人も地域も元気になろう！」を目指してきた。その取組をベースにして、上越市学校教育支援協議会を立ち上げるとともに、校長会等との連携をとおして、平成23年度にコミュニティ・スクールモデル事業の実施、平成24年度から74校（小学校52校、中学校22校）全ての公立小中学校をコミュニティ・スクールに指定した。こうした、ストーリーがある取組の中で現在のコミュニティ・スクールが効果的に運営されている。地域青少年育成会議の役員又は地域コーディネーターも委員となっている学校運営協議会が方針を熟議して承認する。それを受けて、地域青少年育成会議で実働するという、車の両輪の仕組みが出来上がっている。その仕組みを示したものが参考図2である。



参考図2：上越市での基本的な仕組みの概要（大分大学 中川作成）

②コミュニティ・スクール運営の考え方

- ・コミュニティ・スクールは地域と総合的な関係を持ち、そのことで学校職員の意識が変わる。それをとおして教職員の意識の共有・協働，地域住民の協働・支援につながっていく。その際、コミュニティ・スクールはそのような取組を行っていくためのシステムであり，教育内容ではない。このようなシステム・仕組を有効に活用することで，取組の成果が上がる。
- ・コミュニティ・スクールにおいてもテストの成績の上昇などが議論されるが，上越市では，数字ではなく，子どもが変わる（今後変わる）様子を求めている。実際に，地域青少年育成会議の活動をとおして，地域活動への参加の増加等の成果が見られる。さらに，これまでの取組で，学校運営協議会の熟議をとおして，教職員ばかりではなく，保護者や地域住民にもわかりやすいグランドデザインが，どの学校でも作成されるようになるなどの具体的な変化が生まれている。
- ・学校運営協議会で議論されたことに取り組むことが重要である。上越市では地域青少年育成会議を事前に組織して効果を発揮している。そうした組織が無い場合は，学校支援地域本部，それもなければ学校運営協議会と関係づけて地域での協働を行う組織が必要である。さらに，学校運営協議会と地域の組織をつなぐコーディネーターは業務量が多いが重要である。教員が担当する場合には，多忙化や多忙感が問題になりやすいのは当然である。

③上越市教育委員会からの示唆

コミュニティ・スクールを教育改革の1つのツールとしてとらえることが大切であるとともに，

コミュニティ・スクールの導入に関する教育行政としてのストーリーが重要となる。教職員が「子どものために何が必要なのか」「何ができるのか」を問い直し、また、様々な成果を実感するなどをとおして、今求められる教育に関する教職員の意識の変化が生まれる。こうした、多忙化や多忙感が生じてこないというストーリーこそが重要である。そうしたことと、今回示そうとしている5つの考察と2つの提言が同じテーブルに上がり、教育改革に生かされていくことには大きな関係性があることが示唆された。今回の聞取りから、コミュニティ・スクールの推進に必要な要素を以下の2点に集約する。

- ・学校改革とは、学校が開かれることであり、教職員が子どもの視点に立って「学校だけではなく、学校運営協議会委員と課題を共有し、議論を重ねて適切に対応していくことが重要だ。」という意識に変わることが必要であり、そのためのツールとしてのコミュニティ・スクールである。コミュニティ・スクールの導入が「教職員の意識改革」と「教職員相互の意識の共有・協働」、「保護者・地域住民の協働・支援」に有効であり、この学校教育機能は3点セットとして考えられ、コミュニティ・スクールの仕組みを学校がどう使い、教育行政がどう指導するかが重要である。さらに、コミュニティ・スクールに抵抗感をもつ者はいるが、子どものために学校支援をするという姿勢をもって、教育行政がコミュニティ・スクールに指定するという英断も必要である。
- ・学校運営協議会は「協議体」であり、その協議事項の実行組織・仕組みとの協働システムをどう整備するかが重要である。そこに必要なこととして、コーディネーターの配置や学校運営協議会委員の選任の考え方であり、さらに、重要なことは、コーディネーターや学校運営協議会委員の質の向上のための情報交換も含めた研修の充実である。

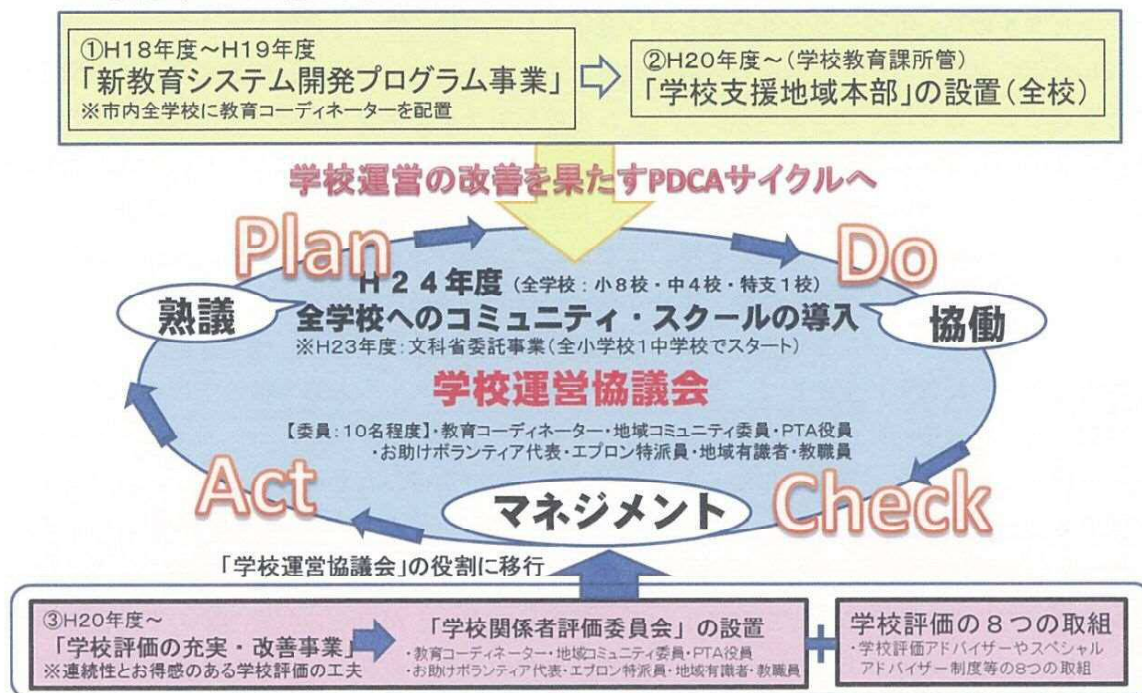
<新潟県見附市教育委員会の聞取りから>

①コミュニティ・スクール導入までの流れと仕組み

見附市は「共創郷育」を基盤において、3段階のステップでコミュニティ・スクールにおいて大きな働きをするシステムを作ってきた。まず、平成18年度・平成19年度に「新教育システム開発プログラム事業」を実施し、市内全学校に教育コーディネーターを配置して、地域の人材を有効に活用した学校教育の質の向上を図った。さらに、「新教育システム開発プログラム事業」を定着させるために、平成20年度から、小・中・特別支援学校の全て（13校）に「学校支援地域本部」を設置して学校教育課が所管し、システム的に学校教育活動の支援を行う体制を整備した。一方、平成20年度～平成25年度には文部科学省の委託研究「学校評価の充実・改善事業」等を実施し、「学校関係者評価委員会」の設置や、学校評価アドバイザー制度等の学校評価の8つの取組を行い、学校マネジメント力の強化の取組を行った。この2つの取組を基盤において、学校支援地域本部からのコーディネートシステムを活用して学校運営の改善を果たすPDCAサイクルによる地域教育力の活用の推進と、学校評価を適切に行い改善充実していく仕組みを両輪として、平成23年度にコミュニティ・スクールモデル校、平成24年度には全ての学校をコミュニティ・スクールに指定する段階へと進んできた。学校関係者評価委員会の役割をコミュニティ・スクールの学校運営協議会へ移行させるとともに、学校支援地域本部や学校評価アドバイザー等との協働を進めながら「熟議」と「協働」の機関としての役割を担っている。その仕組みを示したものが参考図3である。

見附市の教育(本研究テーマ関係)

～見附市の「共創郷育」の歴史とストーリーの中でコミュニティ・スクールが存在～



参考図3：見附市教育委員会の基本的な仕組みの概要（大分大学 中川作成）

②コミュニティ・スクール運営の考え方

- ・見附市は、平成18年度から本格的な「共創郷育」を進めており、コミュニティ・スクールの指定までに段階的な取組を進めてきた。学校運営協議会の重要な役割である「学校運営方針の承認」等の役割に止まらず、それまでの「学校評価」の役割も担って、「評価と改善」を一元的に考える仕組みを作っている。その評価・改善と学校支援が協働したPDCAサイクルの仕組みを作っていることに特色がある。
- ・子どものために「今やっている仕事」の枠から出ることが重要であり、コミュニティ・スクールの取組によって「自分だけでは出来ない教育機能が生まれる」ことを認識することが教職員の意識改革に繋がる。事務的な多忙化の可能性はあるが、現状としては教育の充実感を意識する教職員が全体としては多い。担当職員のみが負担感を感じる事が無いように、市教委としては学校全体がチームとして取組を推進していけるように管理職合同研修会を設けるとともに、新潟県教委が推進する多忙化解消アクションプランに基づき継続的に各学校を指導している。
- ・全教職員が同じ土俵に上がる学校システムの取組が重要であり、そのための教育行政の役割がある。その1つとして、校長の力量アップ(マネジメント力の向上等)が必要であり、校長会の中での研修も充実させている。さらに、「スクールアカウンタビリティin見附」において各校のコミュニティ・スクールとしての取組を広く市民に発信したり、学校運営協議会の一斉研修会を実施したりするなど、見附市全体としてコミュニティ・スクールの充実が進められている。

③見附市教育委員会からの示唆

コミュニティ・スクールの導入までに、市長が12年、前教育長が11年関わっており、ソーシャルキャピタルの高い町づくりを進めるという施策としての継続性、一貫性があった。その間に、過去10余年の見附市の様々な個別の教育施策を俯瞰して方向性を整理し、校長会などでの情報の共有を進めるとともに、コミュニティ・スクールの指定までに学校や地域の実情に応じて3年間かけるなどして着実に積み上げられたものである。こうした積み上げ（ストーリー）が、有効的なコミュニティ・スクールの推進に繋がっていく重要な要素であることとともに、今回示そうとしている5つの考察と2つの提言の実現につながるであろうことを示唆された。今回の間取りから、コミュニティ・スクールの推進に重要な要素を以下の2点に集約する。

- ・コミュニティ・スクールの導入するまでの段階的な手順が重要であり、様々な調査研究事業の成果を全市的に着実に生かして、地域と学校が協働するシステムとして積み上げていくことが重要である。直接的には、平成18年度からの事業が、平成23年度からのコミュニティ・スクールの導入に集約され、平成24年度からの全市一斉の指定が行われていることから理解できる。
- ・教育委員会のリーダーシップによるコミュニティ・スクールの導入によって、教職員に示すべきコミュニティ・スクールの有効性の提示や、学校課題の分析や教育活動の評価との一体化がシステム的に進められることなどによって、教職員一人一人が自らの教育活動の方向性を理解していくことが必要である。このことが教職員の意識改革であり、一律的な多忙化や多忙感に繋がらないために重要なことであろう。

<山口県萩市教育委員会の間取りから>

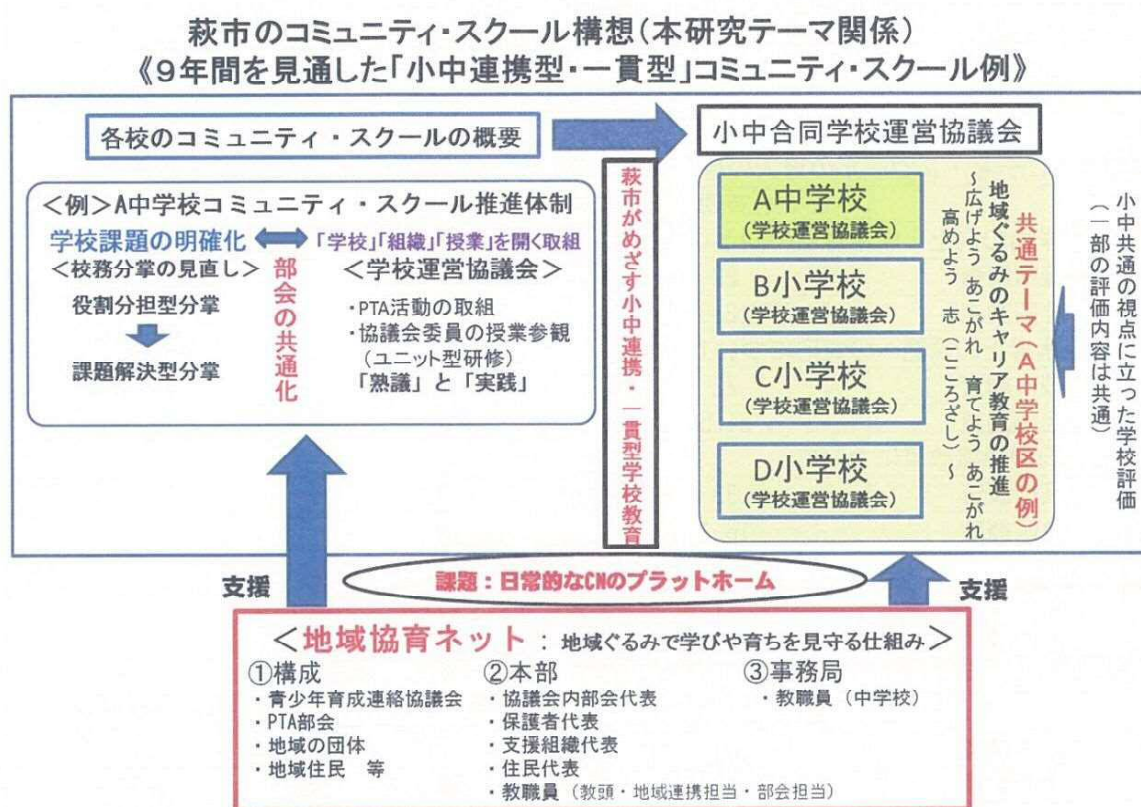
①コミュニティ・スクール導入までの流れと仕組み

萩市は、平成17年度に萩市立田万川中学校をコミュニティ・スクールに指定することから始まった。全国で5番目、山口県では初の指定である。その後、平成18年度には萩市立椿西小学校、平成24年度には萩市立須佐中学校、平成25年度には萩市立椿東小学校、平成26年度には萩市立萩東中学校が指定された。平成27年度には、萩市立椿東小学校が、文部科学省「首長部局との協働による新たな学校モデル構築事業」を実施するなど、5校を2年間のモデル校として指定し、その成果と課題を整理しつつ、全ての公立小中学校をコミュニティ・スクールに指定する準備をしてきた。平成27年度までに32校の公立小中学校をコミュニティ・スクールに指定、平成28年度には3校を指定し、35校の全てをコミュニティ・スクールに指定することとしている。これまで、各コミュニティ・スクールでは、学校運営協議会の熟議をとおして、各学校の教育課題に対応する地域と協働した学校教育活動の実践をおこなってきた。

萩市の取組の特色は、こうしたモデル校の実践を基にしてコミュニティ・スクールの広がりやベースとした小中連携・一貫型コミュニティ・スクールの推進にある。平成29年度までに15中学校区の全てを、一定規模以上の中学校区エリア内の小中独立・連携型のコミュニティ・スクールの推進と、小中併設・一貫型のコミュニティ・スクールの2つに分類して、「小中合同学校運営協議会」を設置することとしている。そのため、各学校の学校運営協議会の組織やコミュニティ・スクールの運営に関する教職員の校務分掌等の組織を同様なものにしてスムーズな取組ができるようにしている。

一方、地域の教育力の活用を具体的に進めるために、これまでの中学校区ごとの「青少年育成連絡協議会」をベースとして、中学校区内の幼稚園・保育園、各種団体、各校のPTAで組織す

る「地域協育ネット」を組織し、そうした仕組みを示したものが参考図4である。



参考図4：萩市での基本的な仕組みの概要(大分大学 中川作成)

②小中連携・一貫型コミュニティ・スクール運営のモデル事業

萩市においては、本調査の調査項目を、平成27年度から始めた小中独立・連携型モデルの2中学校区と、小中併設・一貫型モデルの2中学校区の12校の校長に対してアンケート調査をおこなった。対象校は、平成24年度以降の指定の11校と、平成17年度指定の1校である。その結果を全国調査と比較したものが表6-2-4である。

表6-2-4 コミュニティ・スクールの導入に関するアンケートの比較

〈コミュニティ・スクールの導入の成果〉 (%)			
	とても成果があった	成果があった	
萩市調査	22	78	
全国調査	25	68.5	
〈コミュニティ・スクールの導入の有効性〉 (%)			
	とても有効である	有効である	
①基礎学力の向上・学習意欲の向上について			
萩市調査	22	78	
全国調査	12.9	71	
②生徒指導上の課題への対応について			
萩市調査	22	78	
全国調査	21.5	68.8	
③教職員の意識改革について			
萩市調査	33	67	
全国調査	16.1	75.3	
④教職員の意識の共有や教職員相互の教育活動の協働について			
萩市調査	11	89	
全国調査	14	73.1	
⑤教職員の日々の多忙化・多忙感の増加 (%)			
	多忙化してない	一部が多忙化	多くが多忙化
萩市調査	22	77	0
全国調査	19.3	73.1	6.5
	多忙感はない	一部が多忙感	多くが多忙感
萩市調査	33	56	11
全国調査	27.9	62.4	8.6

萩市のデータが少ないために直接的な比較考察は出来ないが、平成24年度以降にコミュニティ・スクールを導入した萩市の学校においても、今回の全国調査の結果と類似した傾向が見られることがわかる。コミュニティ・スクールの導入の成果や有効性については4年以上経過した全国のコミュニティ・スクールと同様に「有効性」が認識されている。また、今回のテーマである多忙化（仕事量の増加）と多忙感（ストレス）についても2つの調査結果が類似しており、コミュニティ・スクールの運営に関して、一部の教職員に多くの負担が集中していることや、2つの調査は共に「多忙化・多忙感が無い」という回答が3割程度あったことなどから、この背景を詳細に調査することも必要であると考えられる。

③萩市教育委員会からの示唆

萩市は、山口県教育委員会の「全県的にコミュニティ・スクールを導入する。」という方針のもと、モデル事業をとおして段階的に推進してきた。特に、小中連携型・一貫型のコミュニティ・スクールの運営を目指しており、そのための地域からの支援体制としての「地域協育ネット」の組織化をおこなった。しかし、「地域協育ネット」を実働させるためのプラットフォーム的なシステムの存在がなく、学校毎の工夫に任されているという現状であることも事実である。平成27年度から3ヶ年計画で15の中学校区に「小中合同学校運営協議会」を整備することとしており、その中で、是非、日常的な「地域の子どもは地域で育てる」ための仕組みの整備を進め、提案していただくことを期待している。

Ⅲ 付 録

1. センター関係諸規則

(1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関連に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

(2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) センター次長
 - (3) 専任教員
 - (4) 部門長
 - (5) 各学部から選出された教員 各1人
 - (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
 - (7) 大分大学産学官連携推進機構運営会議から選出された者 1人
 - (8) 研究・社会連携部長
 - (9) 学生支援部長
 - (10) その他センター長が必要と認めた者
- 2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。
- 3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

附 則 (平成23年学内共同教育研究施設等細則第2号)

この細則は、平成23年4月1日から施行する。

(3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

(趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という）紀要（以下「紀要」という）の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

(紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等（実践報告を含む）を掲載するものとする。

(投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。

- (1) 本学教員
- (2) 本センター客員研究員
- (3) 本センターが依頼した人
- (4) 本センター運営委員会が認めた人

(執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

(刊行)

- 5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

(刊行費)

- 6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。

- (1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合
- (2) 別刷が50部を超える場合

附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

(4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

1) 投稿枚数

投稿原稿は、単独執筆または共同研究に関わらず、原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが、その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は、題目、要旨、キーワード、図表、注、参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし、原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお、当該日が休日の場合、次の勤務日を期限とする。

3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は、センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて、加筆、修正、削除を求めることがある。

4) 原稿の提出

原則として、原稿はワープロソフトを使用して作成し、プリントアウトしたもの(1部)とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし、上30mm、左右20mm、下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり、40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合、その旨を明記する。

5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合、著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを、単行書の場合には、著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

6) 校正

校正は一校を原則とし、必要最低限の訂正、修正に留めるものとする。

7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には、執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

2. 平成27年度高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
委員	中川 忠宣	高等教育開発センター次長（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	岡田 正彦	高等教育開発センター専任教員（大学開放推進部門長）
委員	鈴木 雄清	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	財津 庸子	教育福祉科学部
委員	西村 善博	経済学部
委員	中川 幹子	医学部
委員	益子 洋治	工学部
委員	吉田 和幸	学術情報拠点運営会議
委員	秋田 昌憲	産学官連携推進機構運営会議
委員	安部 武司	研究・社会連携部長
委員	中村 浩之	学生支援部長

新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
-----	------	----------------------

メディア・IT活用部門

部門長	鈴木 雄清	高等教育開発センター専任教員
センター員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員
センター員	鄭 娥敬	教育福祉科学部
センター員	藤井 弘也	教育福祉科学部
センター員	相浦 洋志	経済学部
センター員	原田 千鶴	医学部
センター員	厨川 明	工学部
センター員	吉崎 弘一	学術情報拠点

FD・授業評価部門

部門長	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員
センター員	鈴木 雄清	高等教育開発センター専任教員
センター員	島田 和典	教育福祉科学部
センター員	大井 尚司	経済学部
センター員	市原 宏一	経済学部
センター員	三宅 秀敏	医学部
センター員	小林 裕司	工学部

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田 正彦	高等教育開発センター専任教員（大学開放推進部門長）
部門長	中川 忠宣	高等教育開発センター次長（生涯学習支援システム部門長）
センター員	藤原 耕作	教育福祉科学部
センター員	仲本 大輔	経済学部
センター員	藤木 稔	医学部
センター員	橋本 淳	工学部

平成 27 年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発 行 平成 29 年 2 月

編 集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>